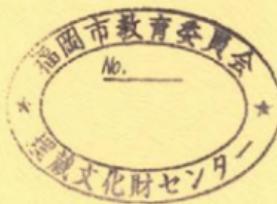


福岡市博多区

席田遺跡群

中尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集



1984

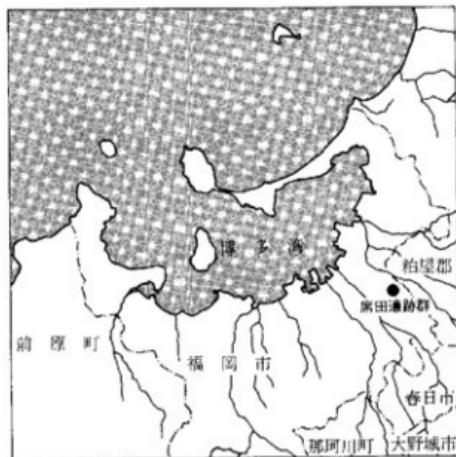
福岡市教育委員会

福岡市博多区

席田遺跡群

中尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集



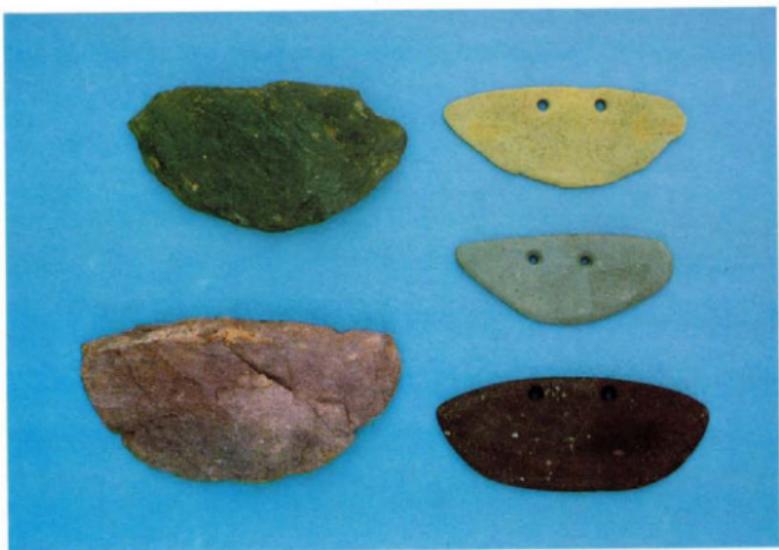
1984

福岡市教育委員会

I
V



第2地点（西から）



中尾遺跡出土の石器

3
V

7
V

序 文

昭和47年8月、米軍板付基地彈薬庫跡地約75haが福岡市に無償貸与されて以来、福岡市都市計画局は東平尾総合運動公園の整備計画を進めております。都市計画局の埋蔵文化財調査依頼に基づき福岡市教育委員会では、昭和49年度に分布調査を行ない、昭和50年度から毎年発掘調査を実施し、現在に至っています。

本書は、昭和53年から55年にかけて調査を実施した中尾遺跡について報告するものです。報告書に見られるように弥生時代の住居跡の検出をはじめ多くの成果をあげることができました。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し、心から感謝の意を表します。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを願うとともに研究資料としても活用いただければ幸いです。

昭和59年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例 言

1. 本書は、福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課の東平尾総合運動公園内における管理広場建設工事によって破壊消滅した中尾遺跡の発掘調査報告書です。
2. 中尾遺跡は、1978年から1980年の3年度に分け発掘調査したもので、東平尾総合運動公園（席田遺跡群）内では第4次から第6次の発掘調査に当たります。
3. 本書に掲載した遺構、遺物の実測図は縮尺を各々統一しています。また遺物写真についても土器、石器などの遺物ごとに統一し、実測図と対比できるように配置しました。なお遺物番号は次の頭文字を付し通し番号としました。
Y(弥生式土器) H(土師式土器) Su(須恵器)
Ji(陶磁器) T(石器) B(玉類)
4. 遺構、遺物写真の焼付には、福岡市埋蔵文化財センターの飛高憲雄氏と福岡市教育委員会文化課の大庭康時氏の協力をえました。また遺構の実測には、実測井治、河野徹也、荒津孝治、力武康次、藤田太、武本延子氏のご協力をえました。

本文目次

第1章　はじめに	I	
1. 発掘調査に至るまで	I	
2. 発掘調査の組織と構成	I	
第2章　発掘調査の記録	4	
1. 発掘調査の概要と経過	4	
2. 遺構と遺物	6	
1 第1地点	8	
土 坪	第1号土坪	8
住居跡	第1号住居跡	12
	第2号住居跡	16
	第3号住居跡	18
	第4号住居跡	23
變棺墓	第1号變棺墓	31
2 第2地点	32	
柱立柱建物跡	第1号柱立柱建物跡	32
住居跡	第5号住居跡	36
	第6号住居跡	36
	第7号住居跡	37
	第8号住居跡	40
	第9号住居跡	43
	第10号住居跡	44
	第11号住居跡	44
	第12号住居跡	46
遺物包含地	第1号遺物包含地	50
	第2号遺物包含地	53
3 第3地点	56	
住居跡	第13号住居跡	56
	第14号住居跡	61
	第15号住居跡	68
3. 出土土器観察表	71	
第3章　おわりに	88	

挿図・表目次

1 席田遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺1/25,000).....	2
2 席田遺跡群航空写真.....	3
3 赤穂ノ浦遺跡出土の銅鐸鋳型片.....	3
4 宝萬尾遺跡出土の青銅鏡.....	3
5 那珂久平遺跡航空写真.....	3
6 中尾遺跡第1地点.....	4
7 中尾遺跡第2地点.....	4
8 中尾遺跡第3地点.....	4
9 中尾遺跡全体図 (縮尺1/400).....	折りこみ 4-5
10 中尾遺跡地形図.....	5
11 中尾遺跡全景航空写真.....	5
12 第1地点全景写真.....	6
13 第1地点遺構図 (縮尺1/200).....	7
14 第1地点出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	7
15 第1号土塁実測図 (縮尺1/20).....	8
16 第1号土塁.....	9
17 第1号土塁出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	10
18 第1号土塁出土遺物 (縮尺1/3).....	11
19 第1号住居跡.....	12
20 第1号住居跡実測図 (縮尺1/60).....	13
21 第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	14
22 第1号住居跡遺物出土状況.....	15
23 第1号住居跡出土遺物 (縮尺1/3).....	15
24 第2号住居跡.....	16
25 第2・3号住居跡実測図 (縮尺1/60).....	17
26 第2号住居跡遺物出土状況.....	17
27 第3号住居跡遺物出土状況.....	17
28 第2・3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	18
29 第2・3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	20
30 第2・3号住居跡出土遺物 (縮尺1/3).....	21

31	第2・3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	22
32	第2・3号住居跡出土遺物（縮尺1/1・1/2）	22
33	第4号住居跡	23
34	第4号住居跡1面実測図（縮尺1/100）	24
35	第4号住居跡3面実測図（縮尺1/100）	24
36	第4号住居跡遺物出土状況	25
37	第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	26
38	第4号住居跡出土遺物（縮尺1/3）	27
39	第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	28
40	第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	29
41	第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	30
42	第4号住居跡出土遺物（縮尺1/2）	30
43	第1号豪棺墓実測図（縮尺1/12）	31
44	第1号豪棺実測図（縮尺1/6）	31
45	策1号豪棺墓	32
46	第2地点遺構図（縮尺1/200）	32
47	第2地点全景写真	33
48	第1号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）	34
49	第1号掘立柱建物跡	35
50	第1号掘立柱建物跡	35
51	第5・6号住居跡実測図（縮尺1/60）	36
52	第5号住居跡	37
53	第6号住居跡	37
54	第5号住居跡遺物出土状況	38
55	第5号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	38
56	第5号住居跡出土遺物（縮尺1/3）	38
57	第7～11号住居跡	39
58	第7～11号住居跡切り合い模式図	39
59	第7・8号住居跡実測図（縮尺1/60）	40
60	第7号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	41
61	第7号住居跡出土遺物（縮尺1/2）	41
62	第7・8号住居跡	41

63 第8号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	42
64 第9号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	42
65 第9号住居跡実測図（縮尺1/60）	42
66 第9号住居跡	42
67 第9号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	43
68 第9号住居跡出土遺物（縮尺1/2）	43
69 第11号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	44
70 第10・11号住居跡実測図（縮尺1/60）	45
71 第10・11号住居跡	45
72 第12号住居跡実測図（縮尺1/60）	46
73 第12号住居跡	47
74 第12号住居跡	47
75 第12号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	48
76 第12号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	49
77 第12号住居跡出土遺物（縮尺1/2）	49
78 第1号遺物包含地	50
79 第1号遺物包含地出土遺物実測図（縮尺1/3）	51
80 第1号遺物包含地出土遺物（縮尺1/3）	52
81 第1号遺物包含地出土遺物実測図（縮尺1/2）	52
82 第1号遺物包含地出土遺物（縮尺1/1・1/2）	52
83 第2号遺物包含地	53
84 第2号遺物包含地出土遺物実測図（縮尺1/3）	54
85 第2号遺物包含地出土遺物（縮尺1/3）	55
86 第3地点	56
87 第3地点	56
88 第3地点遺構図（縮尺1/100）	57
89 第13・14号住居跡	58
90 第13号住居跡実測図（縮尺1/60）	59
91 第13号住居跡	59
92 第13号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/1）	60
93 第13号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	60
94 第14号住居跡	61

95	第14号住居跡	62
96	第14号住居跡	62
97	第14号住居跡実測図（縮尺1/60）	折り込み 62-63
98	第14号住居跡遺物出土状況	63
99	第14号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	64
100	第14号住居跡出土遺物（縮尺1/3）	65
101	第14号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	66
102	第14号住居跡出土遺物（縮尺1/3）	66
103	第14号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	67
104	第14号住居跡出土遺物（縮尺1/2）	67
105	第15号住居跡	68
106	第15号住居跡実測図（縮尺1/60）	折り込み 68-69
107	第15号住居跡	69
108	第15号住居跡	69
109	第15号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）	70
110	第15号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）	70
111	出土土器観察表	71
112	出土土器観察表	72
113	出土土器観察表	73
114	出土土器観察表	74
115	出土土器観察表	75
116	出土土器観察表	76
117	出土土器観察表	77
118	出土土器観察表	78
119	出土土器観察表	79
120	出土土器観察表	80
121	出土土器観察表	81
122	出土土器観察表	82
123	出土土器観察表	83
124	出土土器観察表	84
125	出土土器観察表	85
126	出土土器観察表	86
127	出土土器観察表	87
128	出土土器観察表	88

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

席田遺跡群における発掘調査は、福岡市都市計画局による東平尾総合運動公園の建設工事に先行して1975年より毎年実施し、1983年度までに9次におよんでいます。今回報告する中尾遺跡は、第4～6次の発掘調査に当ります。第1・2次分については、2冊の概報が出されており、第3次分については昨年度に『久保園遺跡』の本報告を発行しています。その『久保園遺跡』の報告書において記しているように、福岡市はかつてアジア大会の誘致を試み、主競技場として東平尾地区を候補地として計画していましたが、結局シンガポールに開催地が決定し、事業計画の見直しが図られ、国際競技場ではなく、市民のための総合運動公園が建設されることになりました。これに対応して文化課は、席田遺跡群発掘調査班を組織し、予定地内75haの分布調査を開始しました。この分布調査をもとに公園建設課との円滑な協議方法を整備し、両者ともに埋蔵文化財や緑の自然を保存していくように努めきました。しかし、この間反省することもありました。1977年頃から公園建設が一段落したり、文化課における事業量の増加に伴い専従していた発掘調査班も他の遺跡を担当せざるを得なくなり、先の協議事項が十分に守られなかつたことがあります。その一つが久保園遺跡における野球場建設であり、貝花尾2号墳の道路下への埋没です。さらに東平尾運動公園は、1990年の秋季国民体育大会の主会場とテニス会場に決定され、その基本計画書によると遺跡部分の造成回避が指摘されているものの、会場予定地の大部分が山間地となっているために、試掘調査などによる縦密な遺跡分布調査が必要となっていました。また中尾遺跡においては、当初の計画では谷部を地下鉄建設工事に伴う排土で埋め立て、管理棟と駐車場の「管理広場」の予定でしたが、途中変更され野球場も建設されています。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市都市計画局

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係

三宅安吉 古暮国生（事務担当）

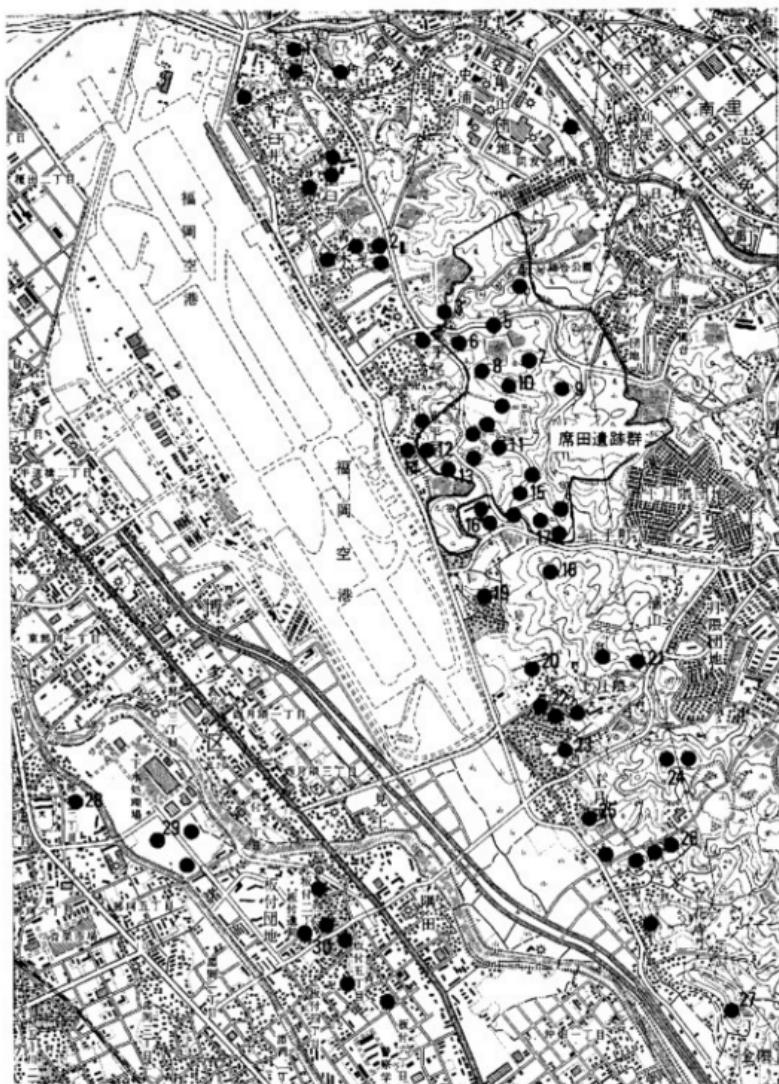
飛高憲雄 力武重治（発掘調査担当）

調査作業員 関アサ子 鶴田サヨ子 関加代子 安川初枝 山内タツ子 安川栄代 関政子

中山政子 江越初代 荒津孝治 実渕栄治 藤田太 河野徹也 武本延子

力武康次 溝口武司 安東昇 関久子

整理作業員 花畠照子 溝口博子 武原邦子 安武裕子 岩永真弓 藤たかえ 中村満代

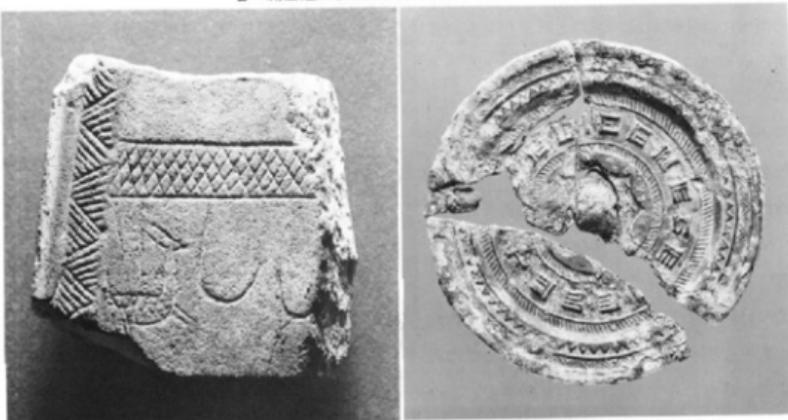


席田遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1 下白井塚古墳群遺跡 | 2 青木斐柳墓遺跡 | 3 席田北ノ浦1号墳 |
| 4 席田北ノ浦2号墳 | 5 塙原塚ノ上遺跡 | 6 席田中尾遺跡 |
| 7 席田新立表1号墳 | 8 席田貝花尾1号墳 | 9 席田新立表2号墳 |
| 10 席田貝花尾2号墳 | 11 席田大谷遺跡 | 12 席田久保園遺跡 |
| 13 席田赤尾ノ浦遺跡 | 14 席田林崎遺跡 | 15 席田丸尾古墳群 |
| 16 宝満尾遺跡 | 17 宝鏡山東遺跡 | 18 上ノ池古墳群 |
| 19 霊房古墳 | 20 下月隈天神森遺跡 | 21 下月隈古墳群 |
| 22 下月隈宮ノ後遺跡 | 23 上月隈櫛柄墓遺跡 | 24 上月隈古墳群 |
| 25 文殊谷古墳群 | 26 谷頭古墳群 | 27 金橋遺跡 |
| 28 那珂深ヲサ遺跡 | 29 那珂久平遺跡 | 30 板付遺跡 |



2 席田遺跡群航空写真（南から）



3 赤穂ノ浦遺跡出土の銅鏡鋳型片

4 宝満尾遺跡出土の青銅鏡



5 那珂久平遺跡航空写真（南西から）

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

公園建設課は、東平尾総合運動公園における管理棟と駐車場を公園入口に当る小字中尾堤ノ下と貝花尾の一部に建設することになりました。建設予定地は、月隈丘陵から西の福岡平野にのびる小丘陵に挟まれてY字形の谷となっており、その大部分は小字堤ノ下が占めています。昭和初期の地形図によると谷部の南側には平尾炭坑の坑口と社屋が見られます。敗戦後は米軍の基地となり荒地となっていました。谷北側の小字中尾は、都市計画道路の席田浦田線によって切断され、あたかも独立丘陵のような地形となっています。ここには第1・2次の分布調査や試掘調査によってすでに甕棺墓や住居跡などの遺跡が存在することが確認されていました。公園建設課の工事計画によると、現在の道路から深さ約3.5mある谷部を地下鉄工事の堆土によって埋め立て、さらに小字中尾の丘陵を削平するというものでした。遺跡のある小字中尾については保存を協議しましたが、地下鉄工事との関連もあり発掘調査による記録保存という最悪の状況を迎えることになりました。本調査は1978年2月より開始ましたが、谷部の小字堤ノ下では、数本設定した試掘溝によっても遺跡が確認されなかったことから、小字中尾に発掘範囲を限定しました。丘陵全域を調査するには、あまりにも範囲が広いことから3地点にわけて実施することにしました。



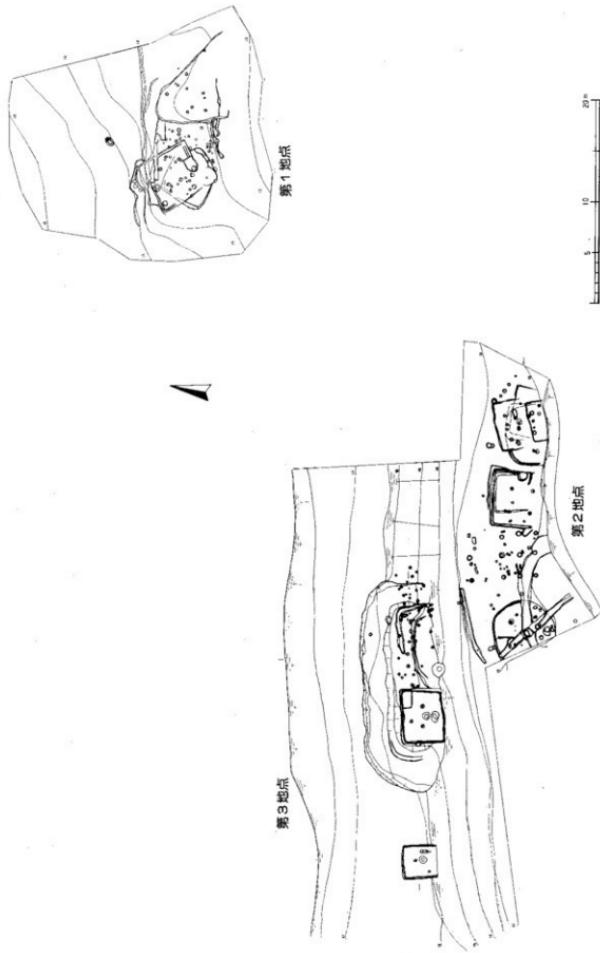
6 中尾遺跡第1地点（東から）

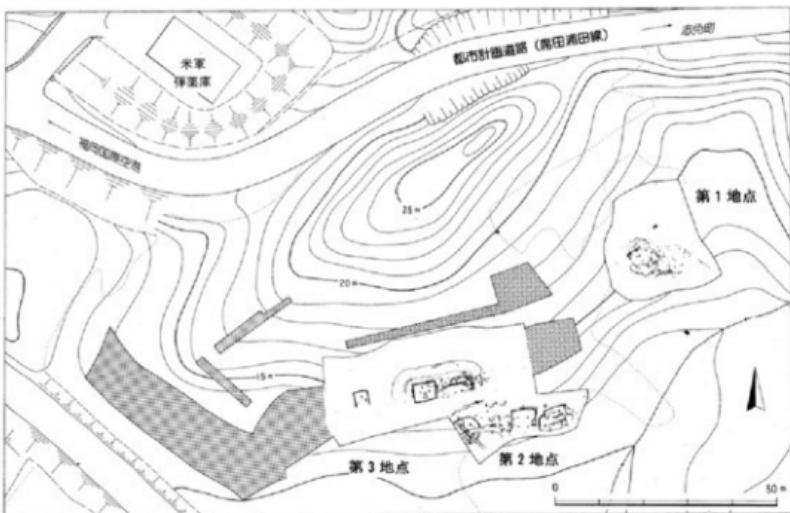


7 中尾遺跡第2地点（南から）



8 中尾遺跡第3地点（西から）





10 中尾遺跡地形図



11 中尾遺跡全景航空写真 (南東から)

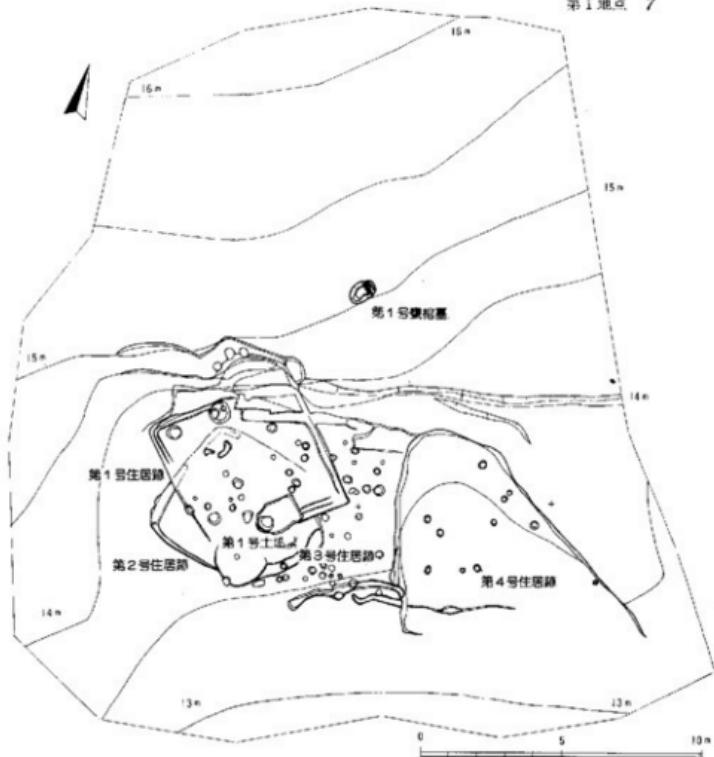
2. 遺構と遺物

1 第1地点 (12・13)

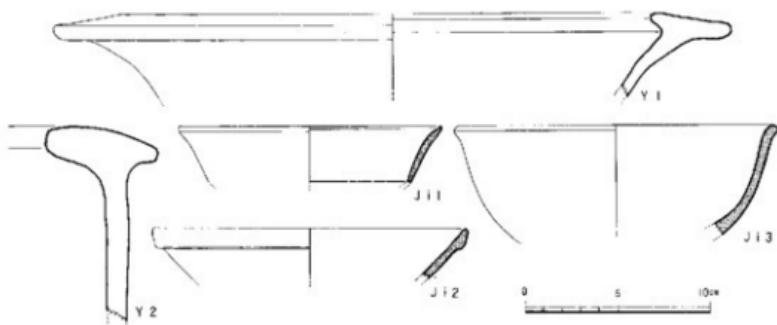
発掘調査は、公園建設課との協議により、谷部の埋め立て工事を先行させる関係から、早く埋没してしまう丘陵据部から着手することにし、谷部の奥より第1・2・3地点と呼ぶことにしました。第1地点は、丘陵がわずかに括れた部分に当り、約700m²を調査区に設定しました。標高は13~16mを測り、緩やかな南斜面をなしていますが、戦前は畠として利用されていたらしく14m標高線で段があり、また13m標高線より南側では急に落ちこみ谷となっていることが試掘溝によって確認できました。第1地点の東側に隣接する丘陵は、第1・2次の調査の際、豪棺墓が確認されており、すでに堤ノ上遺跡として登録されています。したがって第1地点では、豪棺墓の墓域の把握と、表採された弥生式土器（Y 1・2）や青磁類（J i 1・2・3）などから他の遺構の確認を主な目的として発掘調査をすすめました。この結果、豪棺墓1基、住居跡4軒、土坑1基を検出しました。これらの遺構について古い時期からではなく、新しい時期のものから、つまり上層のものから下層への順で記していきます。各遺構については、「久保園遺跡」と同じように実測図、写真とが対比できるように配置しています。



12 第1地点全景写真（東から）



13 第1地点遺構図(縮尺1/200)



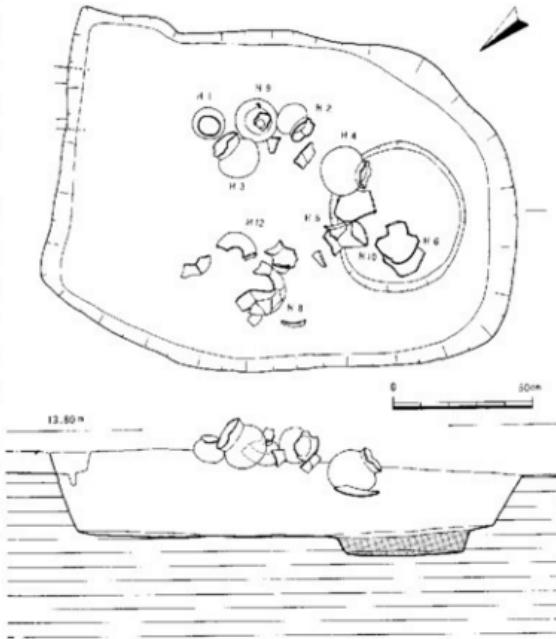
14 第1地点出土遺物実測図(縮尺1/3)

1. 土 塚

第1号土塁 (古墳時代) (15・16)

第1地点は、竹と雑木が繁茂しており、これらの伐採後、厚さ20~30cmの表土層を取り除くと遺構面が現われ、まず第1号土塁を検出しました。第1号土塁の平面形は、不整長方形を呈し、長辺は1.66m、短辺は1.25mを測ります。両長辺と東短辺は直線をなすものの西短辺は曲線をなしています。壁は垂直ではなく傾斜を持って掘りこまれており、塁底は平坦で、この塁底西寄りには深さ約8cmのピットが見られます。このピットは径49×54cmの円形で、ピット内の埋土は土塁内の上部の埋土とは異なり、焼土と炭化物混じりの土となっています。第1号土塁は第1号住居跡の南壁を切って掘りこまれていること、第1号土塁の塁底は第1号住居跡の床面とほぼ同じ面をなすことから、円形ピットは、第1号土塁ではなく第1号住居跡に伴うピットと考えられます。出土遺物には、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などがあり、これらはすべて埋土の上部より出土しました。保存状況はきわめて悪いものの、壺形土器は完形品が多く、あたかも塁内の上部に据え置いたような状況を示していました。しかし高杯形土器は、底部と脚部とが接合しない

ものが多く、各々が別個の破片である可能性が強いようです。第1号土塁は、第1号住居跡の壁と壁溝を切っていることから両者の先後関係は明らかですが、遺物の出土状況や、土塁内がある程度埋まつてから置かれていることなどから、住居跡廃絶後における祭祀行為などの結果と推測されます。しかし、後で記すように、第1地点が斜面のため上部が削平されており、どの面より掘りこまれたかは明確にできません。



15 第1号土塁実測図 (縮尺1/20)

出土遺物 (17・18 表111・112)

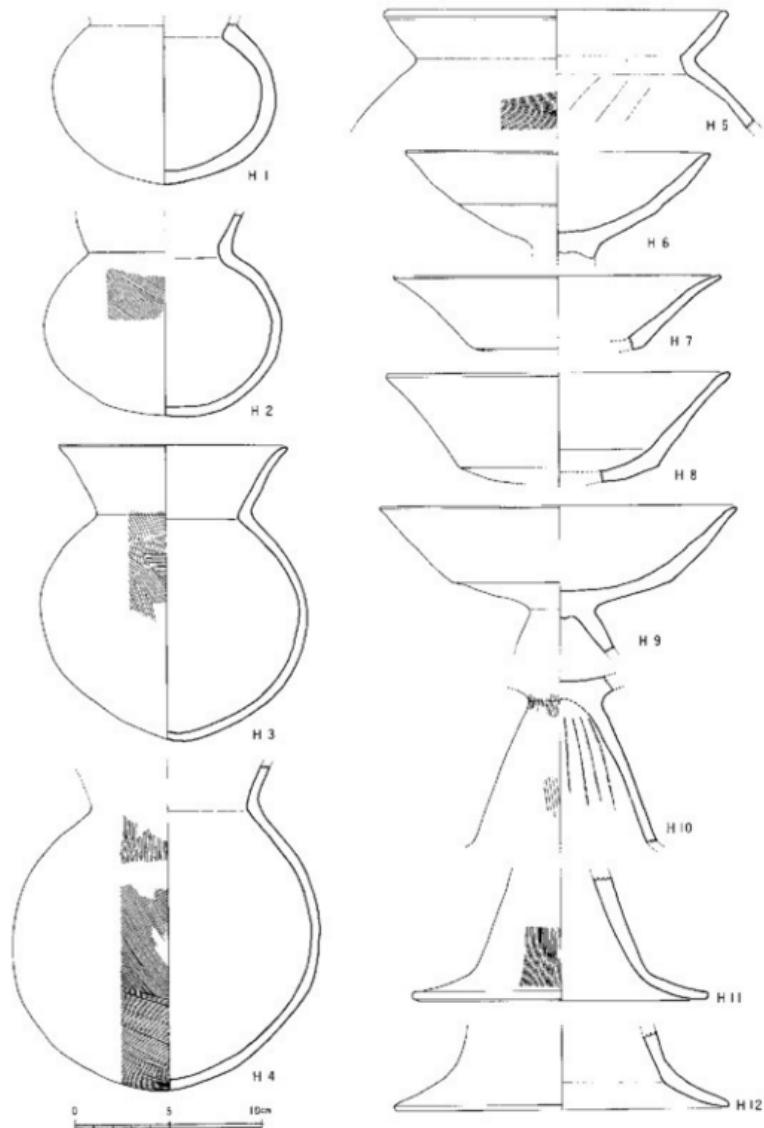
土器のみが土坑上面の中央部に集って出土しました。どれも保存状態が悪く薬品処理をして取り上げましたが、接合作業が困難なためにすべてを図化できませんでした。

土器 (H 1~12) 壺形土器 4 点のうち H 1、2 はいわゆる小型丸底壺と呼ばれているもので球形の胴部に小さく外反する口縁部がついています。頸部内面の屈曲は H 1 がわずかに稜を持つのに対して、H 2 は丸みが見られます。H 2 の胴部外面はハケ目調整が施され、器面の調整は丁寧ですが器形は歪が見られます。H 3、4 は器高が約 16~20cm の壺形土器で、最大径を中位に持つ胴部は球形をなすものの底部はわずかに尖り気味となっています。H 3 の口縁部は、微妙に湾曲しながら外反し、長い口縁部をなしています。H 3、4 とも胴部外面はハケ目調整で、H 4 はより細かなハケ目調整が全面に施されています。これらの外に小型の壺形土器が 1 点出土しています。H 5 の壺形土器は破片となり胴部より上部のみを図示しました。外反する口縁部は、わずかに外湾しており、口縁端部外面は弱く押して横ナデ調整をし、断面方形に近い形をしています。胴部外面は細かい横方向のハケ目調整、内面は右上りのヘラ削り痕が見られます。高杯形土器の杯部 4 点は各々特徴を異にしています。H 6 は杯部中位で屈曲し外湾しながらのび丸みのある口縁部をつくっています。H 7~9 は屈曲部下半が短かく、かつほぼ水平をなしており、口縁端部も小さく外反しています。H 10~12 は脚部で、八字形の裾部をなしています。H 10 の脚部は直線的でなく、わずかに脹らみが見られます。

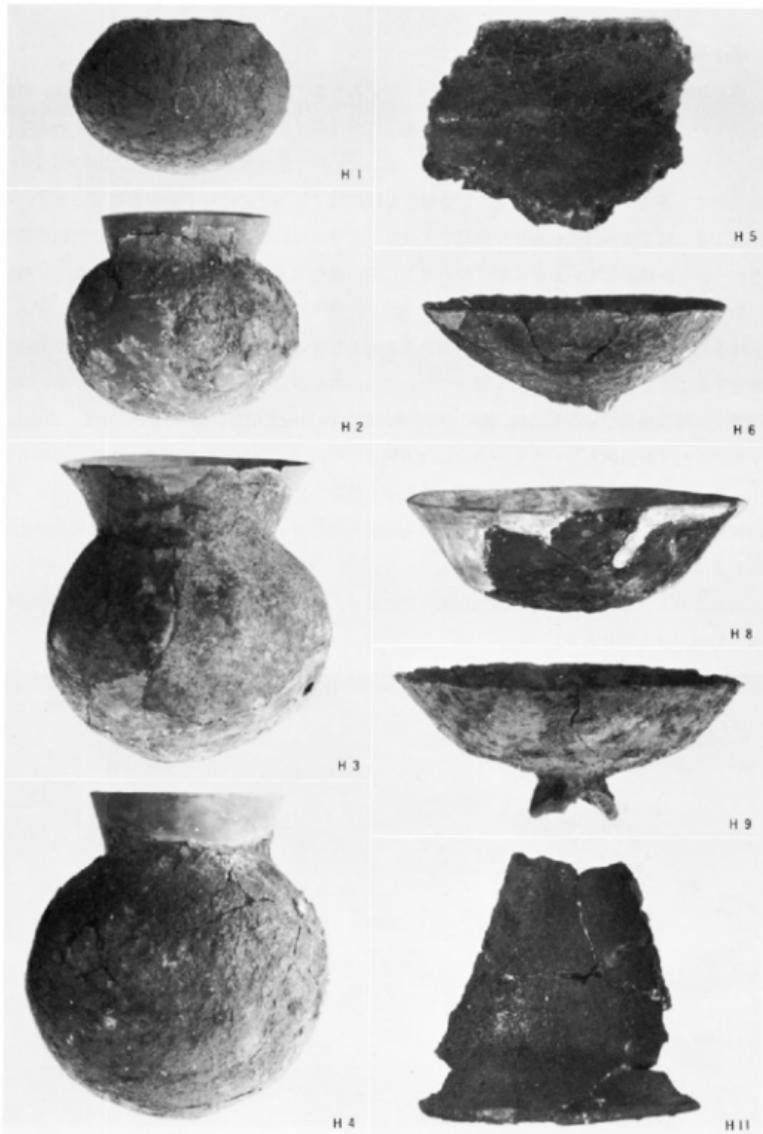


16 第1号土坑 (南から)

10 第1号土塙



17 第1号土塙出土遺物実測図（縮尺1/3）



18 第1号土坑出土遗物 (缩尺1/3)

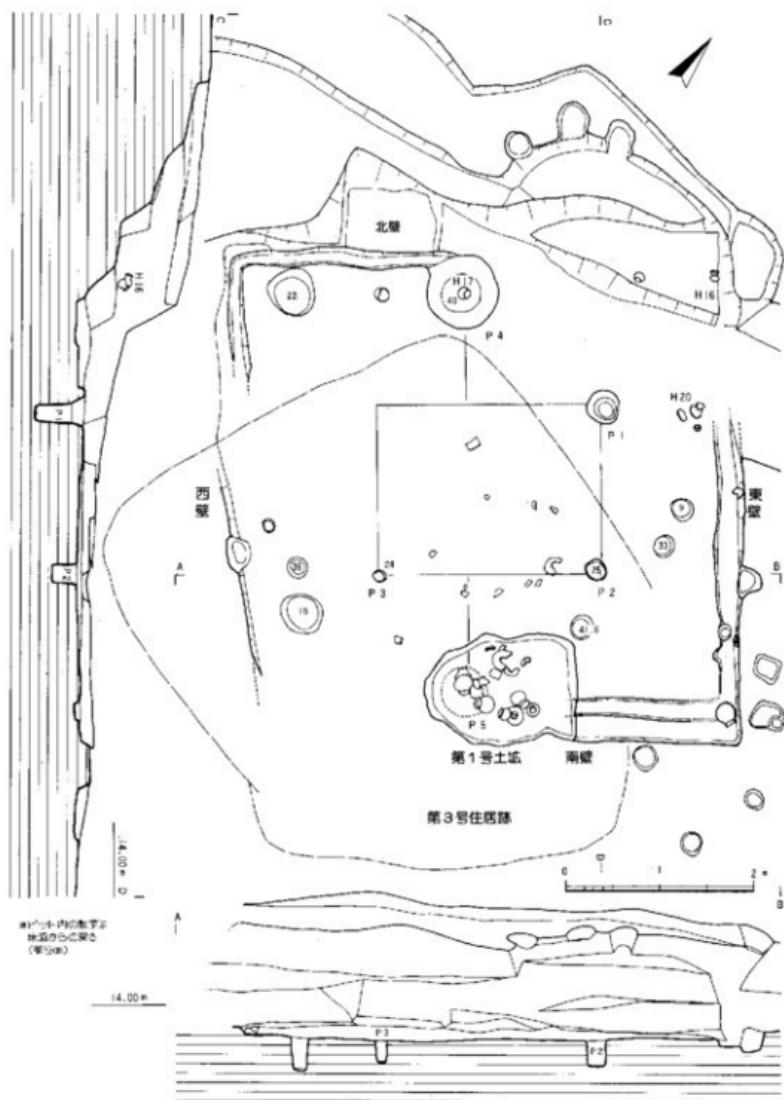
2. 住居跡

第1号住居跡 (古墳時代) (19・20)

第1地点は、標高14m付近に高さ約70cmの段があります。この東西方向にのびる段は、畑耕作のために整形されたものと思われ、この両端は不明瞭となり緩やかな斜面となっています。第1号住居跡は、第1号土塁の下部で検出しました。第1号住居跡の規模は、5.5m×5.4mの長方形で、各コーナーは丸みがなく、各壁とも直線的に正方形に近い平面形をしています。いま第1号土塁で切られている壁を南壁とすれば、北壁は段に接しています。西壁は樹根で破壊され一部しか確認していませんが、壁の高さは最も遺存のよい東壁でも約10cmしかなく、後世の削平が大きかったことを物語っています。ただ北壁の一部が段の崖面となっており、床面より高さ約40cmで平坦となり、小型丸底壺が2個出土していますが、この部分を第1号住居跡の壁とすることも考えられます。4壁には幅約20cmの溝が巡っています。この壁溝は、北、東、西壁では壁に接しているものの、南壁では中央に約20cm寄った位置に掘られています。床面は、中央部がわずかに窪んでいるものの、ほぼ平坦で12個のピットが見られます。これらのうちP1、2、3を主柱穴として4本柱の竪穴住居跡を想定しましたが、北西側のもう一つのピットは検出できませんでした。またH17の小型丸底壺を出したP4と第1号土塁の塙底部で検出したP5は、住居跡の中心線にほぼ合うことから、これらも主柱穴に加えるべきかもしれません。床面には焼土、炭化物など炉と思われる痕跡は認められませんでした。第1号住居跡の床面積は、約29.7m²を測ります。



19 第1号住居跡 (東から)

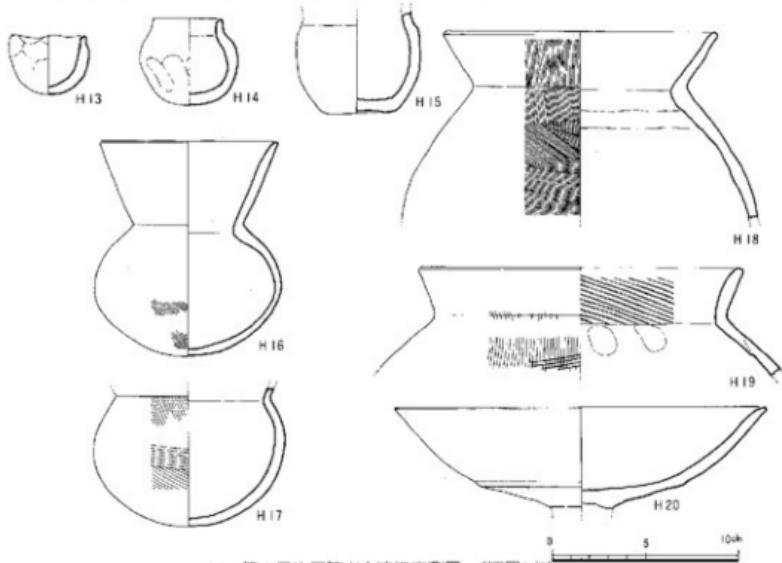


20 第1号住居跡実測図（縮尺1/60）

出土遺物 (21~23 表113)

遺物は床面やピット、壁溝から出土しました。発掘当初は第1号住居跡の下に第2、3号住居跡が存在することが確認できなかったために、同時に取り上げる結果となりましたが、整理時に区別しています。北壁の崖面で出土した遺物は、第1号住居跡の上部にさらに別の住居跡が重なっていたことも考えられますが、ここでは一括して図示しました。

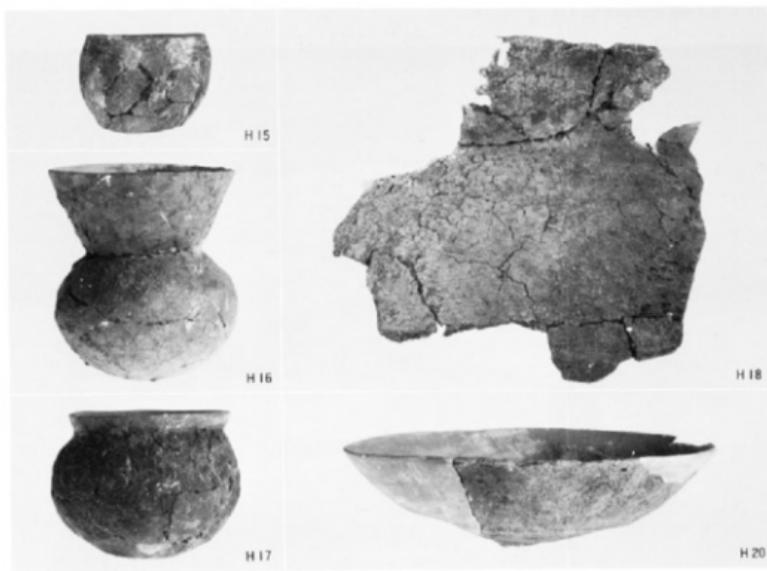
土器 (H13~20) H13~15の3点は小型の手捏ね土器です。H13は半球状の体部上端を強く横ナデして小さな口縁部をつくっています。H14の体部は球形に近くなり、口縁部は同じように横ナデして直立しています。H15は口縁部を欠いていますが、やや大きくH13、14のように丸底ではなく、平底をなしています。H16、17は小型丸底壺で、H16は完形品です。H16の頸部はよくしまり、口縁部は直線的に外反しています。これに比べH17は胸部最大径の位置が上位にあり口縁部も大きく開いています。H18は襲形土器で、胴上半部の破片です。頸部内面の屈曲は、わずかに棱があり、直線的に外反する口縁部の端部は丸くおさめています。外面は細かいハケ目調整で口縁部はさらに横ナデを加えています。H19は、壺形土器としたが襲形土器との区別は困難です。器形はやや大きく、短かい口縁部は直立ぎみなつくりで、頭部内面には指押え痕が見られます。高杯形土器のH20は脚部との接合部で折れています。杯部下位の屈曲はにくく、緩やかに外湾しながらのび、口縁部は小さく外反しています。



21 第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)



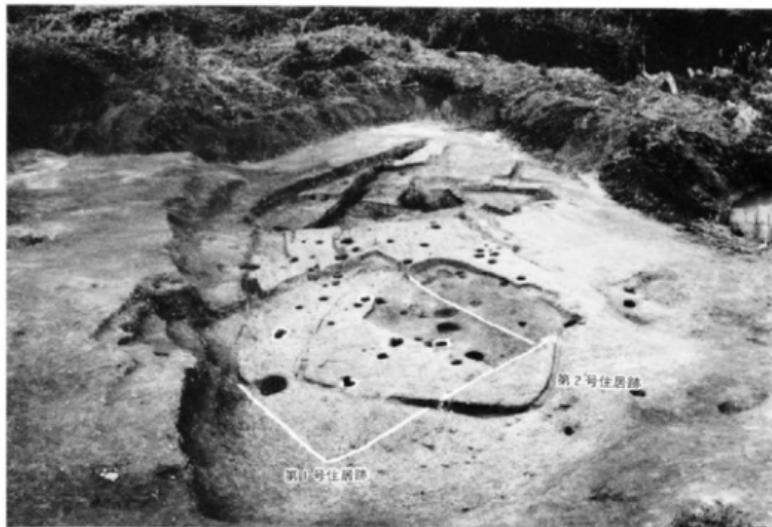
22 第1号住居跡遺物出土状況（北壁の段）



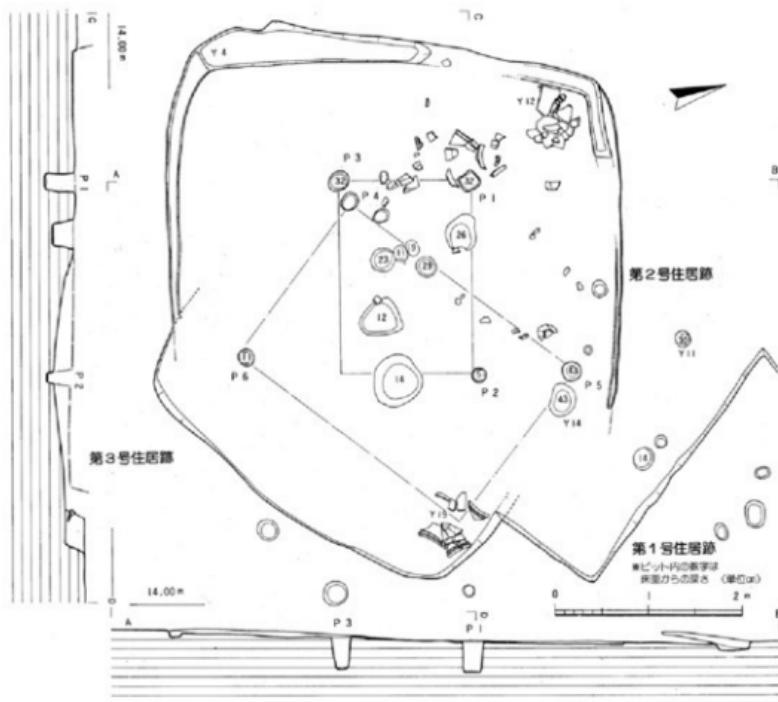
23 第1号住居跡出土遺物（縮尺1/3）

第2号住居跡（弥生時代）（24~26）

第2号住居跡は第1号住居跡の下部で検出したもので、住居跡の中軸線は第1号住居跡とはほぼ直交する位置関係となっています。西側部は第1号住居跡の南壁で切られ、さらに下部にある第3号住居跡とも重なっているために不明瞭で検出できませんでした。したがって検出確認できたのは北、南、西側の3壁で、平面形は長方形を呈しています。各コーナーは直角でなく丸みがあり、各壁もわずかに外側に張らています。西壁は完全に残っており長さは4.3mを測ります。壁溝は3壁ともに見られるものの、北壁では幅5cmと細く、深さも2cm足らずの浅い溝となっています。西、南壁では幅20~30cmと一定ではなく、深さも同じではありません。西壁と南壁とのコーナーでは、床面から17cmを測り最も深くなっています。床面では10数個のピットを検出しました。家屋構造は、ピットの位置からP1、2、3を主柱穴とする4本柱構造が考えられますが第1号住居跡と同じようにあと1個のピットは検出しませんでした。第2号住居跡の規模は、完全に残っている西壁の長さが4.3mであることから、北、南壁ともこれと同じ長さの方形に近い平面形を考えました。主柱穴に想定したP1、2、3の位置関係からすれば各ピット間の距離はP1~2が206cm、P1~3が140cmと東西方向に長く、この比とともに北、南壁がさらにのびることも考えられますが、第1、3号住居跡との切り合い関係からしても先の推定規模が妥当のようです。



24 第2号住居跡（西から）



25 第2、3号住居跡実測図(縮尺1/60)



26 第2号住居跡遺物出土状況



27 第3号住居跡遺物出土状況

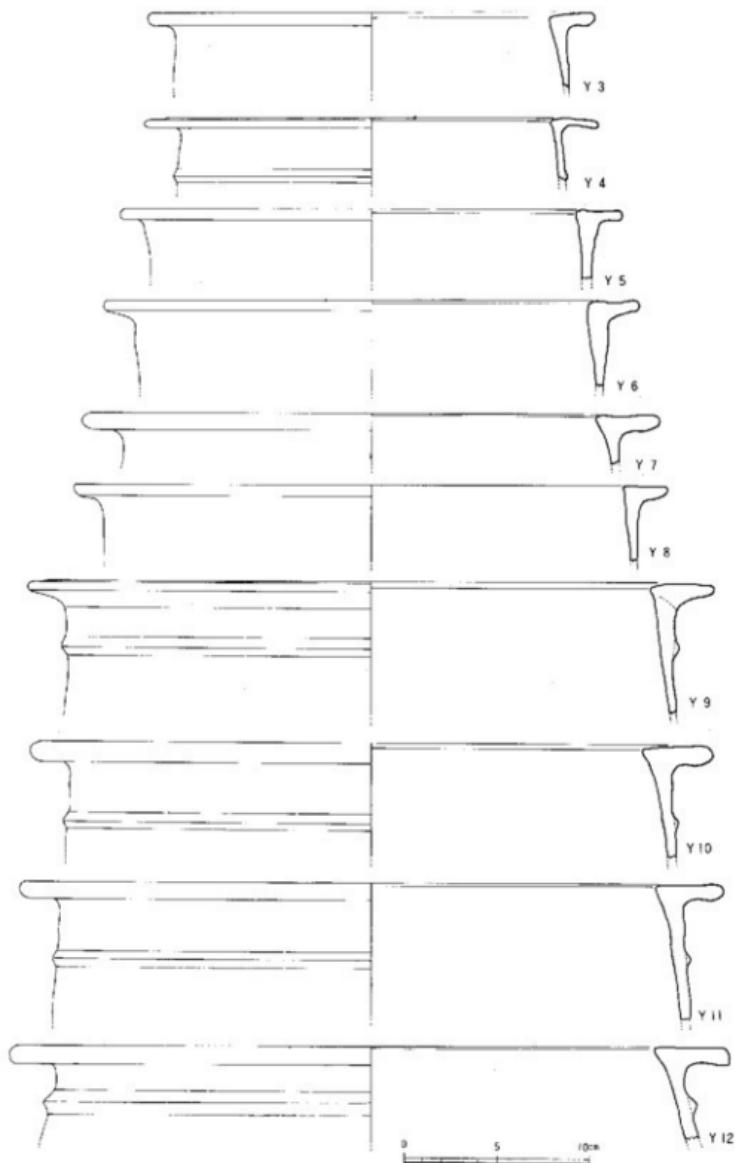
第3号住居跡（弥生時代）（25・27）

第2号住居跡の東壁を検索中に、東壁推定線より南東側約1mの位置に別の壁が現われ、これを第3号住居跡としました。第3号住居跡の床面は、第2号住居跡と差がなく、大部分が第1、2号住居跡によって切られているために、検出したのは東壁と北、南壁の一部にすぎません。東壁の長さは3.6mを測り、第1、2号住居跡に比較してさらに小さくなっています。主柱穴はP4、5、6が考えられますか、各ピット間の距離はP4とP5が3.0m、P4とP6が2.0mあります。主柱穴間の比は第1、2号住居跡に比べ最も大きく主柱穴は横長の位置関係と言うことができます。P4、5と並行する東壁の長さとも大差がないので壁に接近した4本柱構造の家屋が推定されます。これらのことから第3号住居跡の規模は、東壁3.6m、北壁4.0mで隅丸長方形の平面形と考えられます。

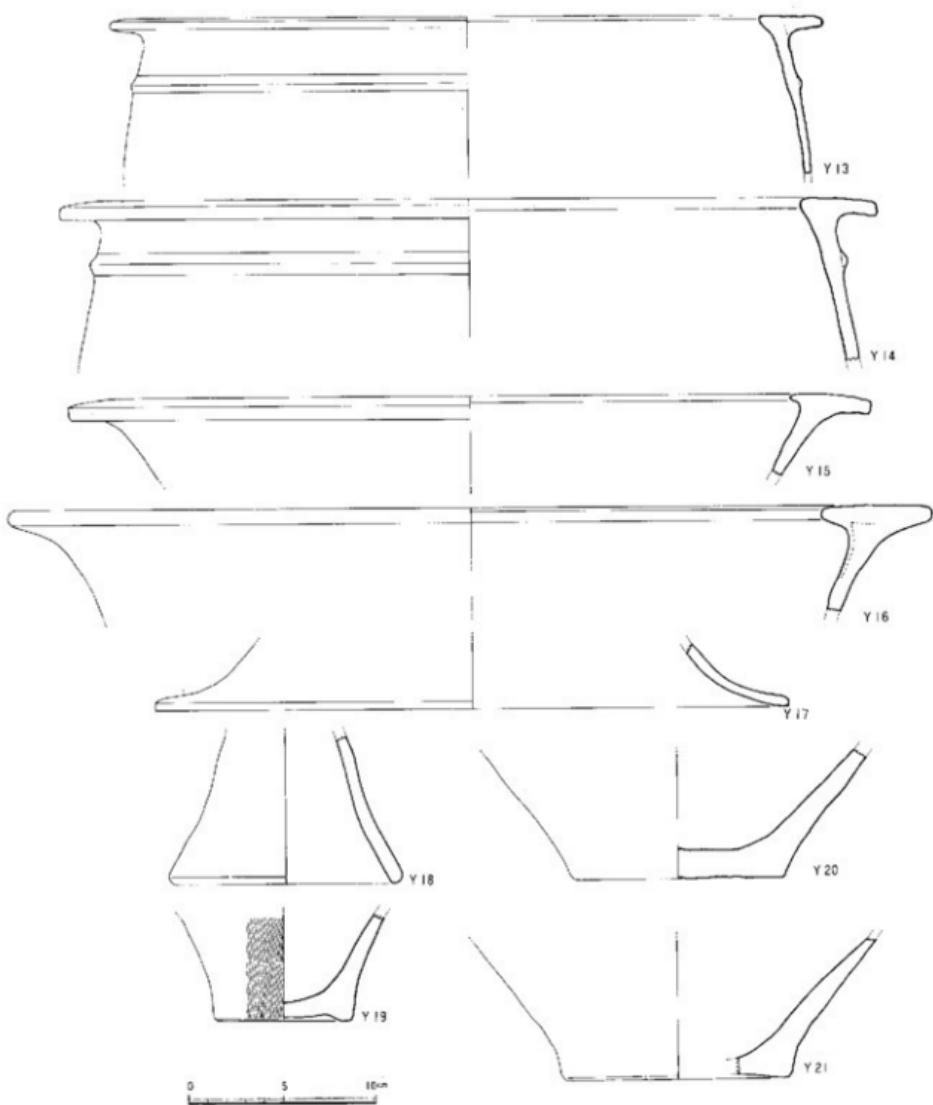
出土遺物（28~32 表113~115）

第2号住居跡の床面には、中央部より北西コーナーにかけて土器が出土しました。土器の多くは破片となっていますが、大型の破片が多く、特に北西コーナーでは集中して出土しました。第3号住居跡の床面は、第2号住居跡の床面とはほぼ同じ高さであり、さらに第2号住居跡よりも古いことから床面遺物の出土はわずかでしたが、南西コーナーでは壺形土器が押し潰れた状態で出土しました。土器の外には埋土より石製穂摘具の未製品と石鏃の2点が出土しました。

土器（Y3~21） 第2、3号住居跡より出土した上器のうち壺形土器12点、壺形土器2点、器台形土器1点と脚部1点、底部3点を図示しました。Y3~14は壺形土器で、口縁部はいずれもL字形となっていますが、口径の大きさから2群に分けられます。一つはY3~8で口径は24.0~32.0cmを測ります。Y9~14は37.0~44.0cmとやや大きめの器形となっています。Y3の口縁部上面はわずかに内側に傾斜しており、胴部最大径の位置は中位よりやや上にあります。Y4はY3に比べ胴部に張りがなく、口縁部は逆に外側に傾いており、口縁下には断面3角形の小さな突帯を1条巡らしています。Y5、6とも胴上半部はほぼ直立しており、口縁部との接合部はふく厚い器壁となっています。Y7の口縁部上面は水平なつくりで、内側に丸く突出しています。口径の大きいY9~14は口縁下に1条の断面3角形の突帯を巡らしています。Y9はY8と同じように胴部上半は直立していますが、口縁部上面は他のほとんどが凹状となっているのに対して上方に膨らんでいます。Y10、11の口縁部は内側に小さく突出し、外側は丸みのある断面となっています。胴部は口縁部近くでわずかに内傾しているものの胴部に張りはありません。Y11~14の口縁部は内側への突出がさらに大きくなり、胴部上半の内傾も強くなっています。Y15、16は広口の壺形土器の口縁部です。Y15は砂粒の少ない精良な胎土が用いられています。口縁部内側への突出は小さく、上面はわずかに外傾しています。Y16の口径は50cmを測り、大型の壺形土器が考えられます。口縁部上面は水平で、内側への突出は大きく



28 第2・3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



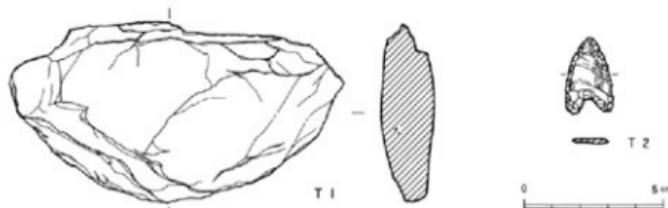
29 第2・3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/8）



30 第2、3号住居跡出土遺物（縮尺1/3）

幅広の口縁部となっています。器面は丁寧な横ナテ調整が施されています。Y18は器台形土器で全面が削離しており、脚端部も丸くなっています。Y17の底径は34.0cmを測り、大きく開いた器形となっていますが、上部を欠いているために全形を知りえません。Y19~21は底部で、Y19はわずかに上げ底状となっています。外面は細かいタテのハケ目調整で、焼成も良好です。Y20、21は平底の底部より直線的に胴部に聞く同じような器形となっています。これらの土器のうちY10、19は第3号住居跡床面より出土したもので、Y3、6、17は第2号住居跡の床面より出土しました。実測が可能な破片についてはすべて実測しましたが、壺形土器、器台形土器に対し壺形土器の占める率が圧倒的で、これは単に器壁が厚かったために保存状態がよかつたという理由によるものかは速断できません。

石器（T1、2） T1は石製穂摘具の未製品です。石材は輝緑凝灰岩で、原石を両面削離して厚さ約19mmに扁平にしています。さらに背を直線に、刃部を半月形にするいわゆる外湾刃半月形石庖丁と呼ばれる形にしようとしていたことがうかがわれます。T2は黒曜石製の石鎌で、石刃状剥片を用いたいわゆる剥片鎌です。鎌長は27mmを測ります。



31 第2、3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）



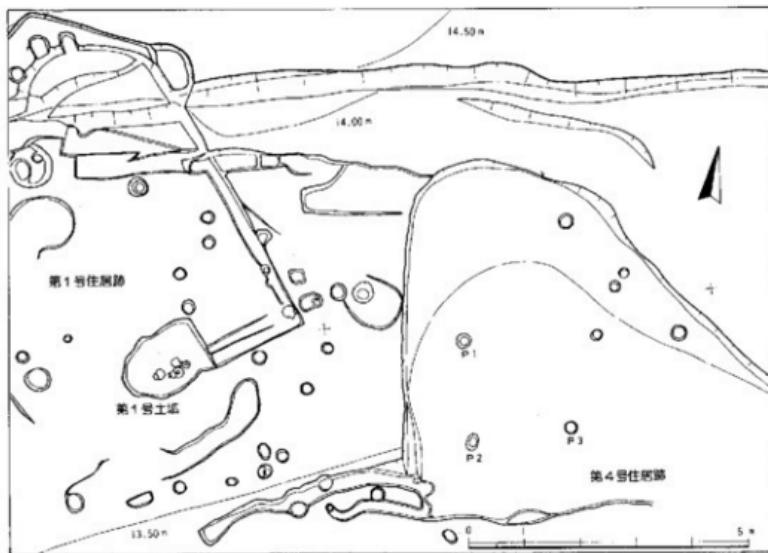
32 第2、3号住居跡出土遺物（縮尺1/1 1/2）

第4号住居跡 (弥生時代～古墳時代) (33～35)

第4号住居跡は第1号住居跡の東側約1.7mの位置で検出しました。第4号住居跡は第1号住居跡と同じ赤茶色の地山面の落ちこみで当初は埋土も同じであったことや、土師式土器、弥生式土器や石器の遺物も見られたことから住居跡と考えました。まず畑耕作時の段の南側約1.5mより南側にのびる壁を確認しました。この壁の南端は削平されて不明瞭となっていますが全長5.4mを検出しました。壁は住居跡と同じようにほぼ垂直に掘りこまれています。北端側は丸く湾曲して東西南方向にのびており、先の壁と直角をなしていません。これは住居跡が重複し違った壁であることも考えられるために埋土観察用の帶を残しながら発掘を進めました。壁上面より深さ約25～30cmで8個のピットが現われP1～3は直角に並んでいます。このピット検出面より約20cmの深さではY25、31、34などの遺物がまとまって出土しましたが、住居跡の床面という確認はできませんでした。また地山面でもなかったことからさらに約60cm掘り下げた状況が挿図35の実測図です。この面でも数個のピットを検出ましたが、住居跡の主柱穴と考えるには壁との関係を明確にする必要があり、結局は埋土の堆積観察においても住居跡の重複としては把握できない結果に終りました。しかし、遺物は水平位置にまとめて出土すること、壁は垂直に近いことなどから、自然の落ちこみに遺物が堆積していったとは考えられずここでは住居跡として扱っておきます。

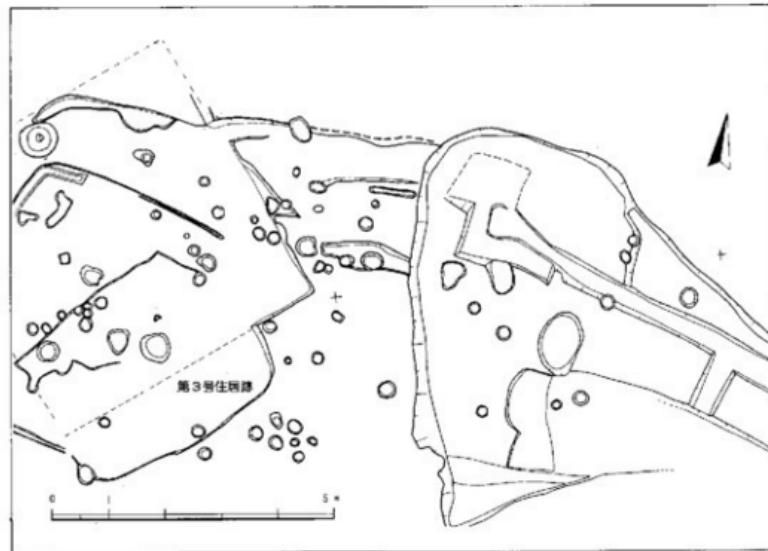


33 第4号住居跡（北東から）



▲ 34 第4号住居跡1面実測図(縮尺1/100)

▼ 35 第4号住居跡3面実測図(縮尺1/100)



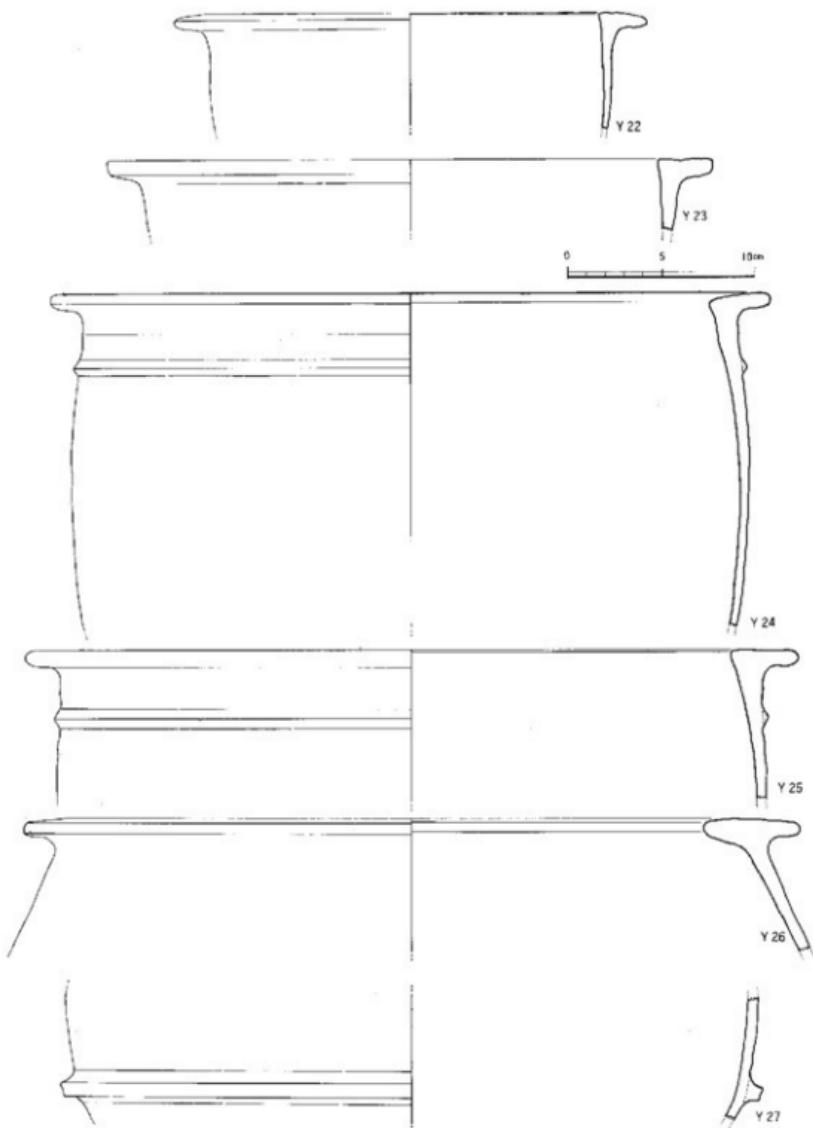
出土遺物 (36~42) (表115~117)

弥生式土器19点、土師式土器2点と石器5点を図示しましたが、Y28、29、37、39、T3、5、6は住居跡の周囲より出土したものです。住居跡内における遺物の出土は先にも記しているようにピットを検出した1面、遺物がまとまって出土した2面、地山面の3面に分けられます。住居跡としての確認はできませんでしたが、土師式土器は1~2面に多く、弥生式土器は2~3面より出土するという傾向がありました。

土器 (Y22~39 H22, 23) Y22~26は壺形土器です。Y22の口径は25.2cmを測り、L字形の口縁部は外端が下方に垂れています。胴部には張りは見られません。Y23はL字形口縁部の破片で、口縁部上面はわずかに窪んでいます。全面が剥離しており調整痕は観察できません。Y24とY25は口縁部下方に同じような断面3角形の突帯を1条巡らしていますが、Y24は口縁部が内傾し、胴部に張りがあるのに対し、Y25は水平な口縁部となり、胴部に張りはなく直線的に下方にのびています。Y26は口縁部内側への突出が大きく幅広の口縁部をつくっています。胴部上半は強く内傾しており、張りのある倒卵形の胴部になるものと思われます。胴部はナデ調整、口縁部は強い横ナデ調整のために胴部との境に段が見られます。Y27は胴部突帯部のみの破片のために全形を知りえませんが、二重口縁を持つ壺形土器の胴部と思われます。突帯は断面台形ですが横ナデ調整で上面が窪み口唇形に近い断面となっています。Y28~35は底部で、



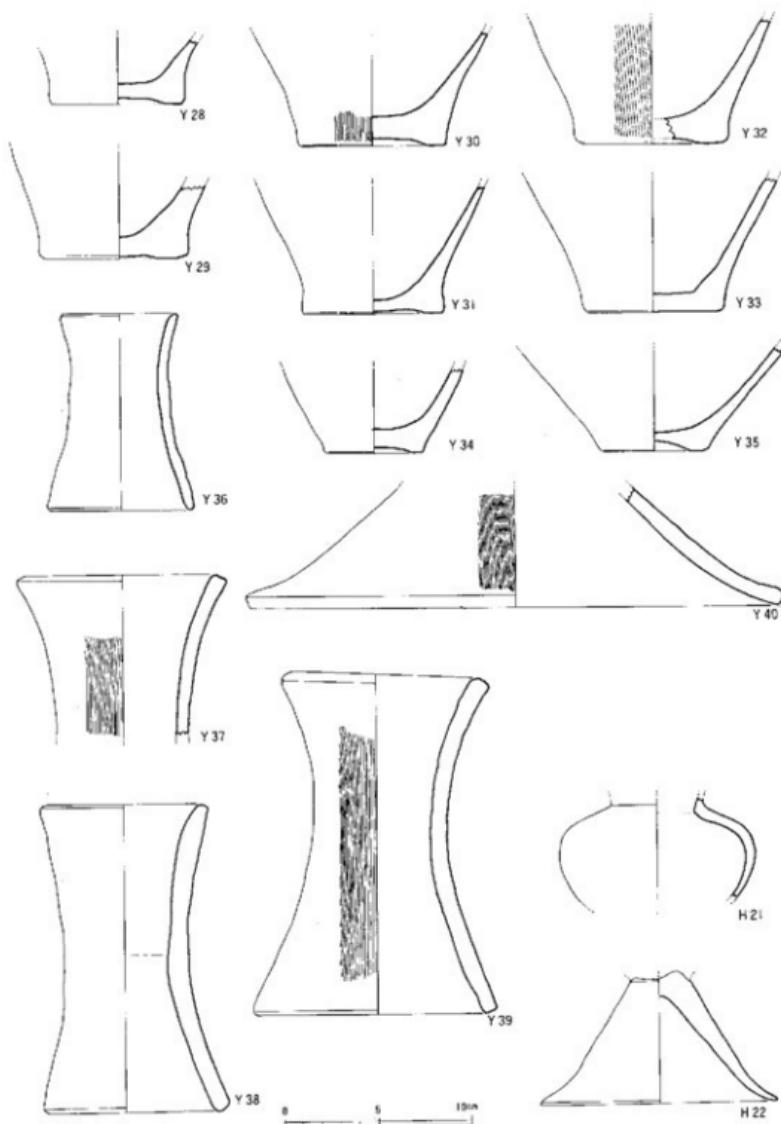
36 第4号住居跡遺物出土状況



37 第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



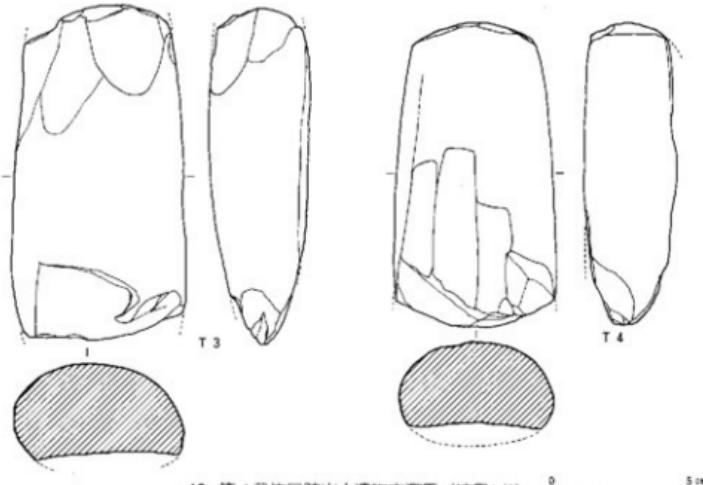
38 第4号住居跡出土遺物（縮尺1/3）

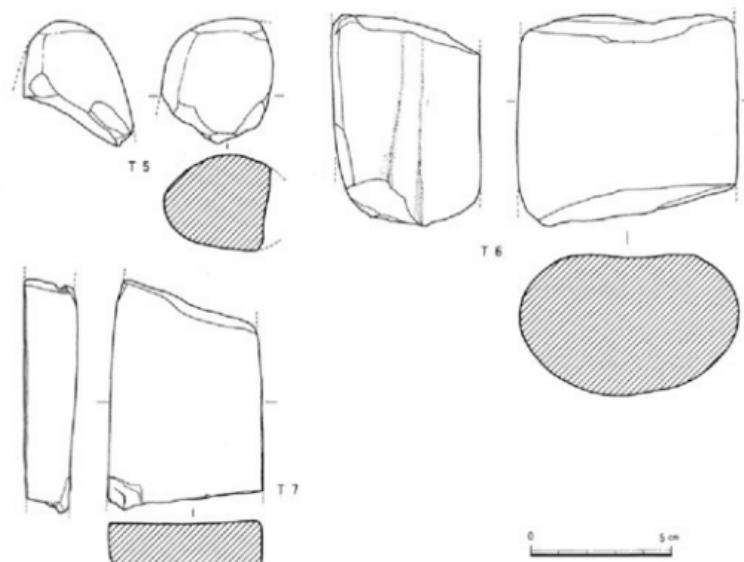


39 第4号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)

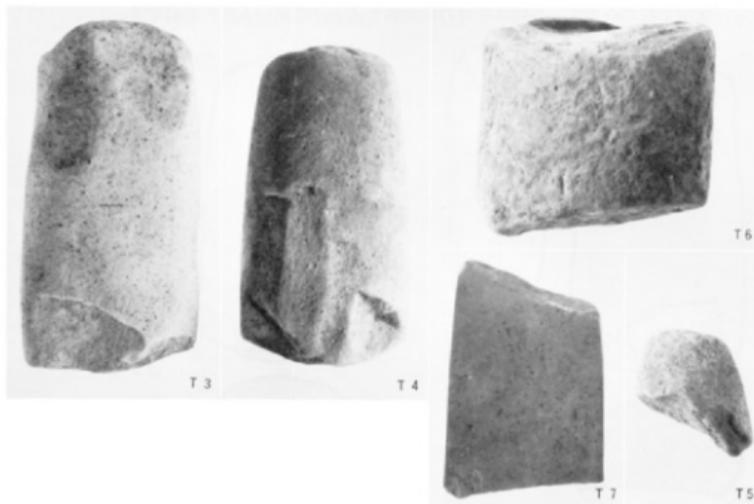
Y33以外は上げ底となっています。底部端はすべてに丸みがあり、ほぼ直線的に胴部にのびています。外面はナデ調整されるものが多く、Y30、32は縦方向のハケ目調整が施されています。Y34、35は調整も丁寧で壺形土器の底部の可能性があります。Y36～39は器台彫土器です。Y36は器高10.6cmの小さな器台で、全面剥離しているために調整痕は見られません。Y37、39は第1号住居跡と第4号住居跡の間より出土しました。Y39は完形品で、いずれも砂粒の少ない胎土が用いられています。外面は縦方向のハケ目調整で上下端部は横ナデ調整されています。Y38は第2面よりY24、31、34などと出土しました。Y40は第2号住居跡床面より出土したY17と同じように大きく開いており、直線的にのびて笠状をなすことから脚部としてではなく蓋と考えられます。H21、22は土師式上器で1面より出土しました。H21は小型丸底壺で、胴部は球形をなさずに上位に強い張りが見られます。H22は高杯彫土器の脚部で杯部との接合部がよく観察できます。

石器 (T3～7) T3～6は玄武岩の石斧で、T7は粘板岩の砥石です。これらのうちT3、5は第1地点の覆土より出土しました。T3、4は刃部、基端部の一部を欠損しているものの、いわゆる始刃石斧であることがわかります。基部断面は楕円形で、13cm前後の長さが復原できます。T5は基端部の破片で、よく調整されています。T6は第4号住居跡の南側斜面で出土したもので、基部の一部です。断面形は78×55mmの楕円形で側縁も丸く研磨調整されており、T3、4よりさらに大型の石斧と思われます。T7の砥石は両端を欠いていますが、砥面は4面ともに使用されています。石材は硬質の粘板岩で仕上げに用いられた砥石です。





41 第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）

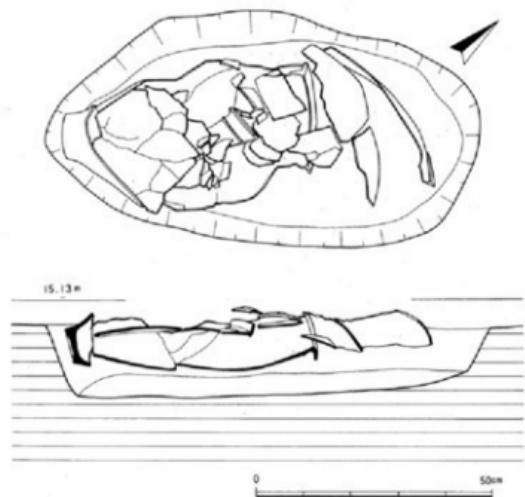


42 第4号住居跡出土遺物（縮尺1/2）

3. 甕 棺 墓

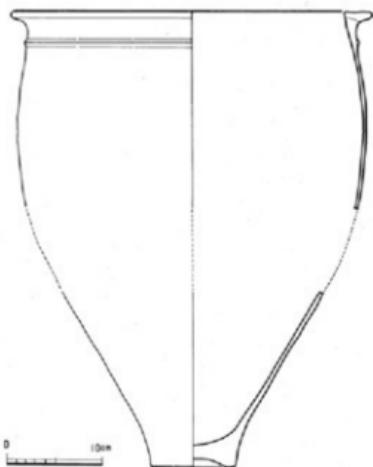
第1号甕棺墓（弥生時代）(43~45 表117)

第1号甕棺墓は、第1号住居跡の北側約3.6mに位置しています。49×93cmの楕円形の墓坑



43 第1号甕棺墓実測図（縮尺1/12）

に中型の甕形土器と大型の甕形土器の胴部片とを組み合わせて埋置しています。土圧で検出時には潰れていましたが、その断面から中型の甕形土器が下棺でこの口を胴部破片で覆ったことがわかります。甕形土器は口径38.6cm、器高48.4cmを測ります。L字形の口縁部はややぶ厚いつくりで、口縁部下方に断面三角形の突帯が巡っています。胴部最大径の位置は上半部にあり倒卵形となっています。底部も厚いつくりで上げ底となっています。



44 第1号甕棺実測図（縮尺1/6）

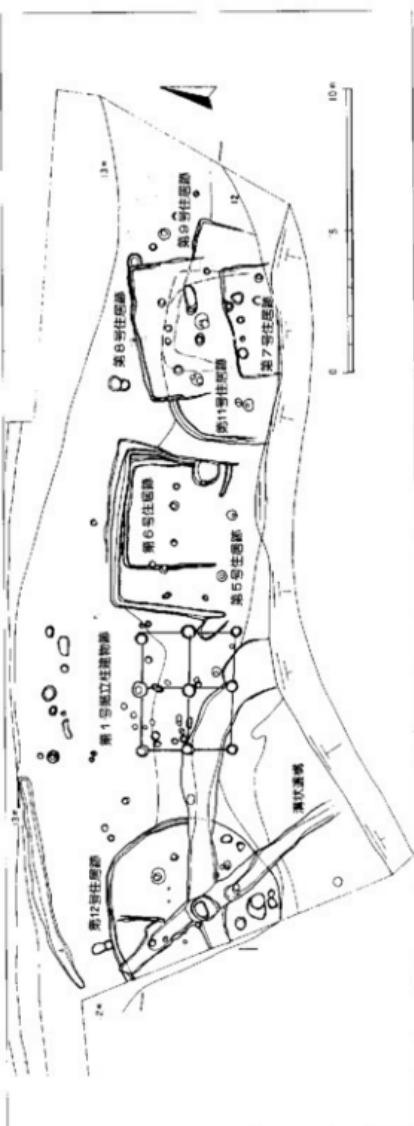


45 第1号甕棺墓（西から）

2 第2地点 (46・47)

第2地点は、1978年度の第1地点に引続いて発掘調査を実施しました。第1地点では調査期間が短期間で約700m²の発掘調査に終ったために丘陵南側斜面の大部分と丘陵頂部について未調査でした。第2地点は丘陵南斜面に当り、西に開く谷に面しています。この南斜面もかつて畑に開墾されて高さ約2mの段がつくられており、下段を第2地点、上段を第3地点としました。

第2地点の東、西、南側は低い崖となっているために、南北約9m、東西約30mの細長いテラス状の地形となっています。発掘作業は細竹の伐採から開始し6月に終了しました。第1地点ですでに経験していたことですが、遺構の埋土の識別が困難で、しかも検出遺構のほとんどが重複し切り合っていることによって慎重にならざるを得ず多くの時間を費やしました。また5月24日には福岡県文化課の上野精志技師がローリング・タワー上で撮影中に、タワーが倒れるという事故があり、強い衝撃を受けました。どの発掘現場でも同じタワーを用いており、すぐに倒壊防止のためのテストが繰り返され、その講習会も実施されました。前年の前川威洋技師の事故とともに決して忘れてはいけない事故でした。第2地点で検出した遺構は弥生・古墳時代の住居跡、掘立柱建物跡、溝状構造などです。住居跡については、重複切り合いの新しいものから古い順で記していきます。



46 第2地点遺構図 (縮尺1/200)

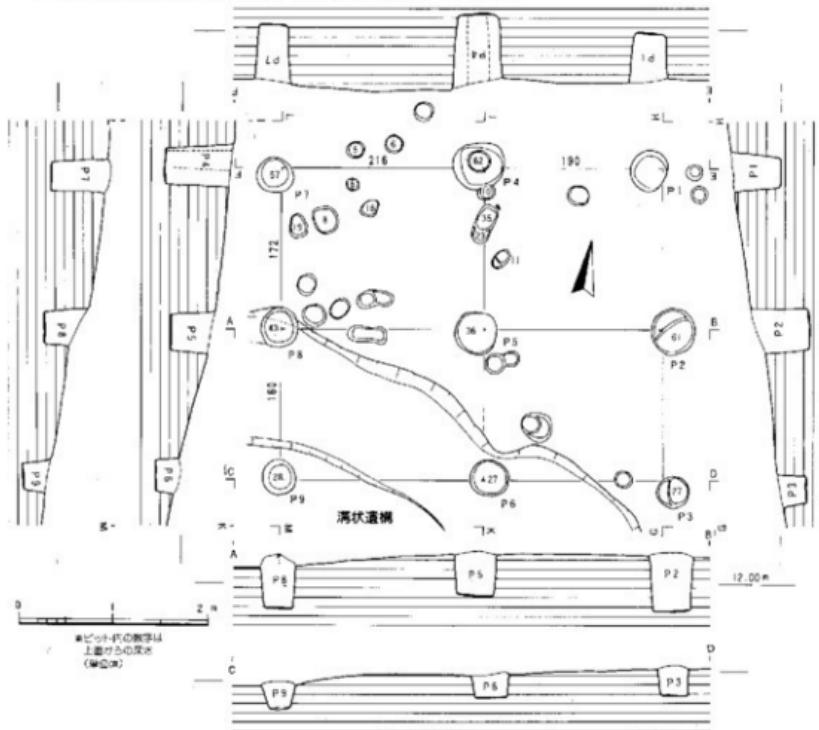


47 犬2地点全景写真（南西から）

1. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（古墳時代）（48~50）

第1号掘立柱建物跡は、第2地点発掘区の中央よりやや西寄りで検出しました。桁行2間×梁行2間の総柱建物ですが、桁行は4.06m、梁行は3.32mを測り方形ではなく長方形の建物となっています。柱間距離は桁、梁とともに等間隔ではなく、桁は西より2.16m、1.90m、梁は北より1.72m、1.60mを測ります。掘立柱穴は径35~54cmの円形でP4では柱痕跡が見られました。各掘立柱穴の深さは、桁では3列ともに大きな違いはないものの、梁では崖側に向かって深く掘られています。特にP7とP9の差は21cmもあり、斜面の傾斜に応じて掘りこまれたものと思われます。掘立柱穴より弥生式土器の細片が出土しましたが時期決定には至りませんでした。ただ弥生時代中期の第12号住居跡廃絶後に掘られた溝状遺構をさらにP6、8が切っていることから上限の時期については押えることができます。



48 第1号掘立柱建物跡実測図（縮尺1/60）



49 第1号掘立柱建物跡（南東から）

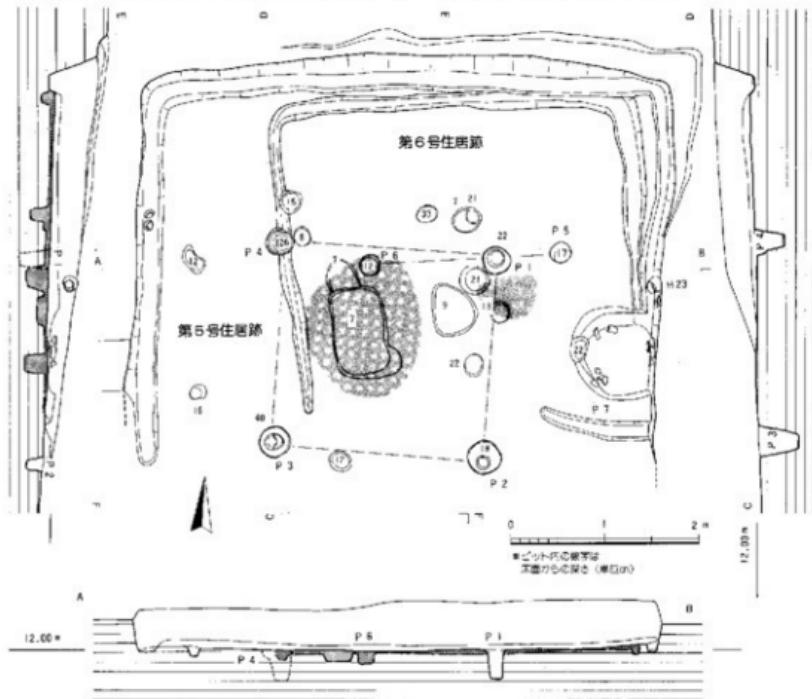


50 第1号掘立柱建物跡（南東から）

2. 住居跡

第5、6号住居跡（古墳時代）(51~53)

第1号掘立柱建物跡の東側約30cmに近接して位置しています。崖側の壁は削平されているために北、東、西の3壁を検出しました。北壁の高さは床面から約53cmを測り、東・西壁に比べ垂直ではなく斜めに掘りこまれています。床面には7個のピットがあり、P1~4が主柱穴と考えられます。幅広の壁溝は3壁にあり、東壁では壁より直角に小さな溝が見られます。また東壁には径95cmの不整円形のピットがあり、土器片が集中していました。床面の中央部付近には炉跡と思われる焼土と炭化物が認められました。主柱穴の位置や全形が残っている北壁の長さなどから、第5号住居跡は隅丸長方形の平面形で、6.0×5.6mの規模が考えられます。床面の焼土を取り除くと、さらに方形の住居跡が現われ、これを第6号住居跡としました。第5号住居跡床面の北東側に片寄ってはいるものの、お互いが壁を共用しているわけではありません。規模は4.0×4.0mの隅丸方形で、主柱穴はP5、6の2本柱構造と思われます。



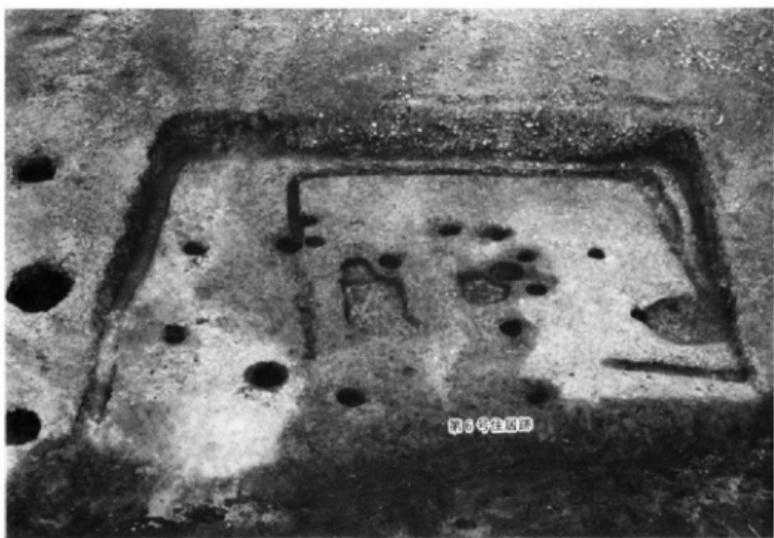
51 第5・6号住居跡実測図（縮尺1/60）

※A-Bは第5号柱跡の位置



第5号住居跡

52 第5号住居跡（南から）



第6号住居跡

53 第6号住居跡（南から）

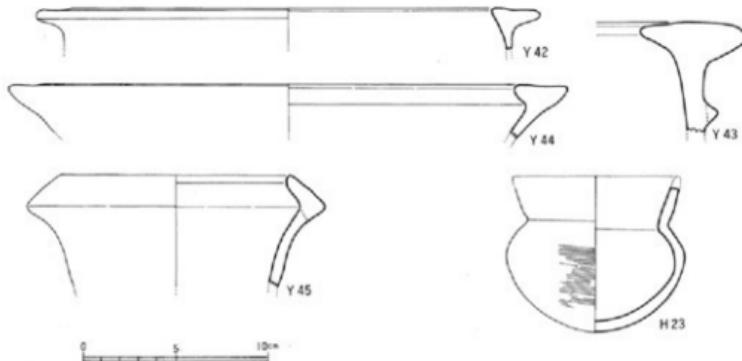
出土遺物 (54~56 表118)

第5号住居跡に伴なう遺物は主に壁溝とP5より出土しましたが、図化できたのはY42~45、H23の5点にすぎません。このうちY42~45の弥生式土器は埋土より出土したものです。

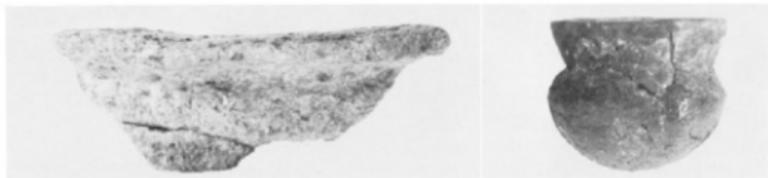


54 第5号住居跡遺物出土状況（西から）

土器 (Y42~45 H23) Y42は壺形土器の口縁部小破片です。L字形の口縁部は横ナデ調整されています。Y43はT字形をした壺形土器の口縁部で、口縁部下の突帯は断面三角形となっています。Y44、45は壺形土器の口縁部です。Y45の頸部はわずかに内済しながらのび、屈曲して内傾する口縁部がついています。屈曲部外面は丸みがあり、鋭い棱はありません。H23は東壁に接して出土した小型丸底の壺形土器です。胴部の最大径は中位よりやや上にあり、球形にはなっていません。外側は横のハケ目調整となっています。



55 第5号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



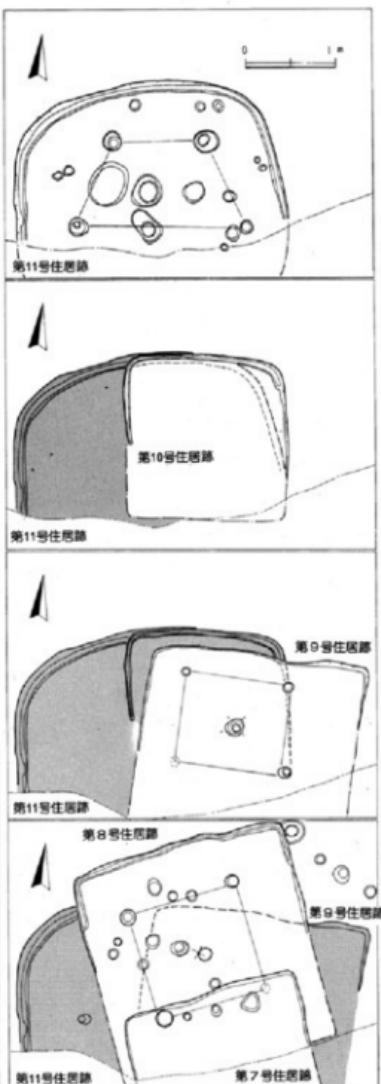
56 第5号住居跡出土遺物（縮尺1/3）

第7～11号住居跡（弥生時代～古墳時代）

第7～11号住居跡は、第2地点発掘区の最も東寄りに位置しています。検出順に番号をつけていきましたが、最終的には弥生時代から古墳時代の住居跡5軒が重複切り合っていることがわかりました。挿図58は各住居跡の切り合い模式図です。弥生時代に6本柱と思われる隅丸不整形の第11号住居跡があり、この北壁に重複して隅丸方形の第10号住居跡がつくられます。この住居跡は $3.5 \times 3.5\text{m}$ と小さく、床面は第11号住居跡と同じ高さとなっています。次に4本柱で方形プランの第9号住居跡が第10号住居跡の東壁を切ってつくられます。さらに5m方形の第8号住居跡が中軸方位を西に振ってつくられます。第8、9号住居跡とともに4本柱でその対角線の交点に主柱穴を加える構造のようです。第7号住居跡は第8号住居跡の南側に位置していますが大半が崖で残っていません。時代が新しくなるにつれ床面は高くなっています。



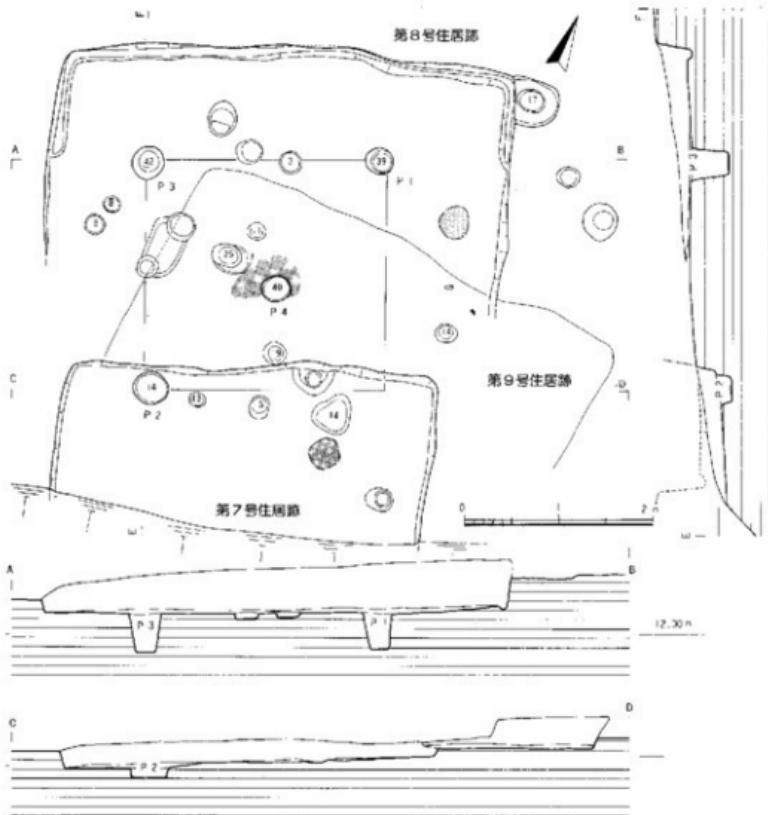
57 第7～11号住居跡（南から）



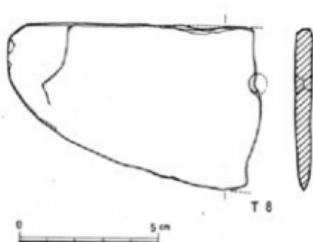
58 第7～11号住居跡切り合い模式図

第7号住居跡（古墳時代）(59・62)

第7～11号住居跡の重複する住居跡のうち最後につくられたのが第7号住居跡です。南側は崖となっているために北、東、西の3壁を検出したにすぎません。原形を知ることができる北壁の長さは3.9mで、壁の高さは22cmを測ります。壁隅はわずかに丸みがあるものの各壁は直線となっています。床面は第8号住居跡の床面より約35cm深くなっています。ピットは6個あります。これらは第8、9号住居跡のものと思われ、第7号住居跡に伴うピットは検出できませんでした。また壁溝は巡っていません。これらのことから第7号住居跡の規模は、 $3.9m \times 3.9m$ の方形プランが考えられます。北壁寄りでは径50cmの範囲で焼土痕が見られました。



59 第7、8号住居跡実測図（縮尺1/60）

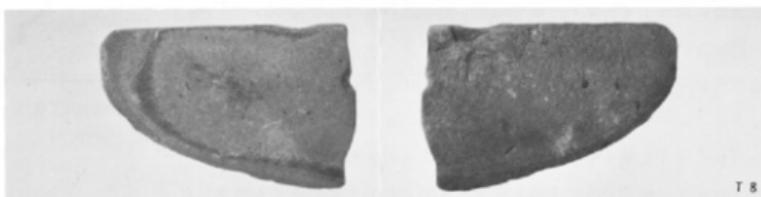


60 第7号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）

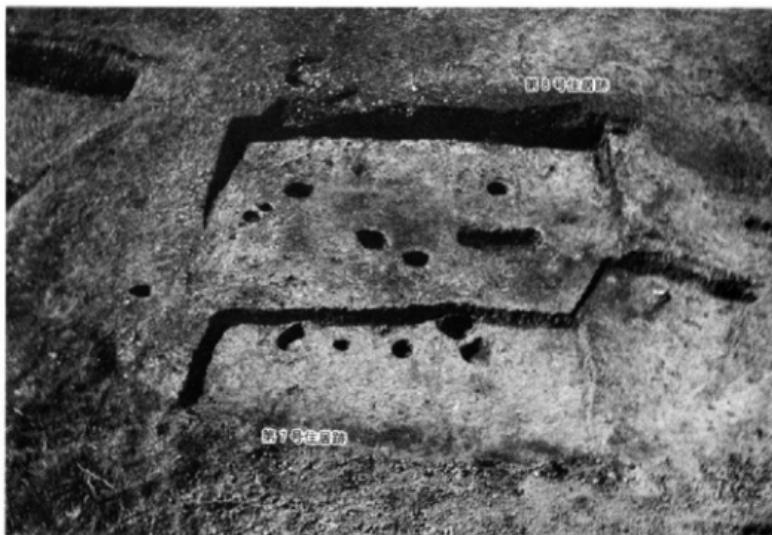
出土遺物（60・61）

床面の大半が削平されていることもあって遺物の出土はきわめて少なく、埋土より出土した石製穂摘具1点を図示したにすぎません。

石器（T8） T8は縫穴より縦に割れており、身の半分以上を欠いています。背は直線をなし、断面は面取りがなされ隅丸方形となっています。外湾する刃部は両面から研磨されているものの、あまり鋭利ではありません。石材は粘板岩です。



61 第7号住居跡出土遺物（縮尺1/2）



62 第7、8号住居跡（南から）

第8号住居跡（古墳時代）(59・62)

第8号住居跡は第7号住居跡の北側約3.5mに位置し、中軸方位はほぼ同じ向きをしています。検出したのは北壁と東・西壁の一部で、北壁の長さは4.8mを測ります。壁の高さは北壁で46cmで、東、西の両壁は南側に向かって削平されています。壁溝は北壁と東、西壁の一部に掘られており全周していません。床面は平坦をなし、10数個のピットがあります。これらのうち主柱穴と考えられるのはP1～3とこれらの中央に位置するP4で、床面から同じ深さで掘りこまれています。P2は第7号住居跡の埋土上ではなく床面で検出したことから両者の切り合い関係を決める一つの根拠としました。P3、4の延長上にあるべきピットは精査ましたが検出できませんでした。主柱穴は方形のコーナーと中央の5本柱と考えられます。中央のP4から折り返すと第8号住居跡の規模は4.8mの方形プランと推測されます。床面では中央部と東壁寄りの2か所で焼土が見られました。

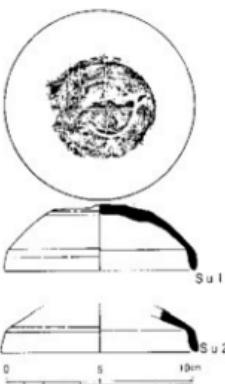
出土遺物（63 表118）

遺物は埋土より弥生式土器、土師式土器、須恵器が出上しましたが、いずれも細片で図化できませんでした。図示した須恵器2点は床面より出上しました。

須恵器（Su1、2） 2点とも杯蓋の破片です。Su1は口径10.2cm、器高3.6cmを測ります。やや扁平な天井部から直線的に体部に移行し、体部は垂直に近く屈曲しています。屈曲部の器壁は薄く、逆に体部は厚手のつくりで口縁部は丸くおさめています。屈曲部外面は明瞭な稜をなしていません。天井部におけるヘラ削りの範囲は全体の1/3弱を占めているにすぎません。また天井部にはヘラ記号が見られます。Su2は天井部を欠いていますが、同じように体部へ直線的にのび、体部への屈曲は丸みを持っています。胎土に小砂粒を含んでおり、焼成は良好です。

第9号住居跡（古墳時代）(65・66)

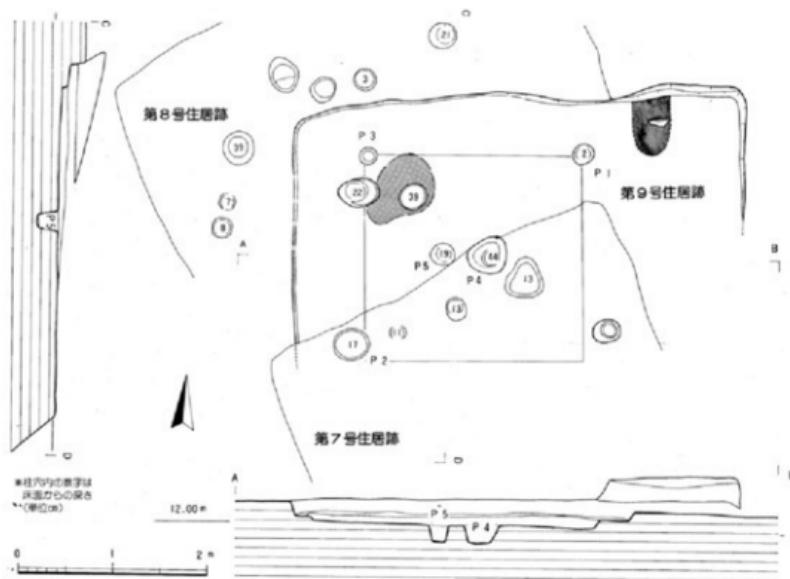
第9号住居跡は第7、8号住居跡のほぼ中間で検出しました。第7、8号住居跡が同じ中軸方位であったのに対し、第9号住居跡は第10、11号住居跡の中軸方位と同じ向きとなっています。壁は北、東、西の3壁を検出しましたが、東・西壁は削平されて2.2m程度が残っているのみです。北壁も第8号住居跡によって切られているために壁の高さは10～13cmとなっていますが、切り合いのない北東コーナーでは30cmを測ります。北壁の長さは4.8mでコーナーは丸みがありま



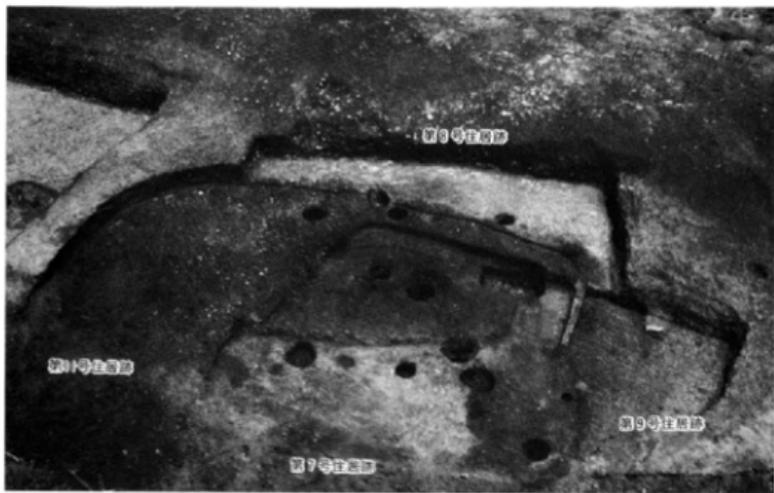
63 第8号住居跡出土遺物
実測図（縮尺1/3）



64 第9号住居跡出土遺物
実測図（縮尺1/3）



65 第9号住居跡実測図（縮尺1/60）



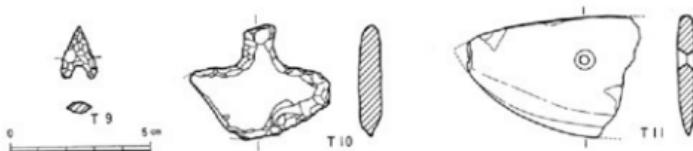
66 第9号住居跡（南から）

す。主柱穴は第8号住居跡と同じように方形に配された4個と中央の1個の計5個による構造と思われますが、これらは床面の西側に片寄っています。

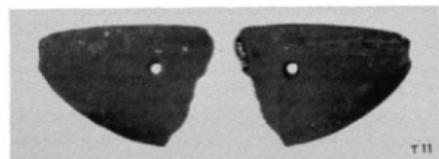
出土遺物 (64・67・68 表118)

土器 (Y46) Y46は弥生式土器の底部で、厚手の器壁をなし上げ底となっています。この他にも弥生式土器、土師式土器が出土していますが細片で図化できませんでした。

石器 (T9~11) T9は凹基無茎式の打製石鏃で、良質の黒曜石が用いられています。T10は横長の石匙状石器で、つまみと身の一部に自然面を残しています。T11は粘板岩質の石材を用いた穂摘具で、両面研磨による外湾刃ですが背は直線ではなく、わずかに湾曲しています。



67 第9号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)



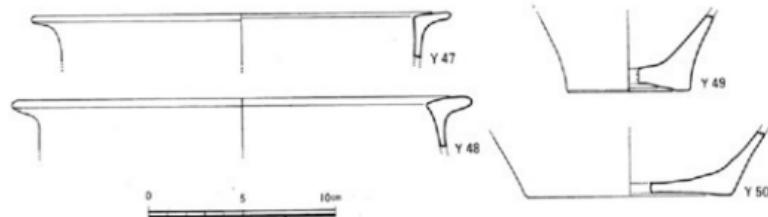
68 第9号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)

第10、11号住居跡 (弥生時代)
(69~71 表118)

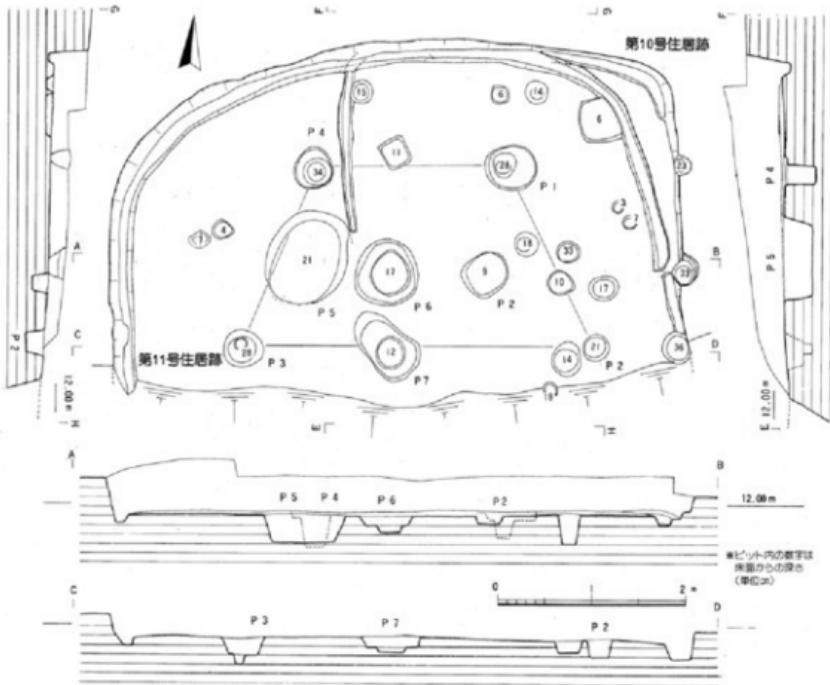
第10号住居跡は第11号住居跡の北東側で切り合っています。壁溝は北、西壁に見られ、3.5m方形の規模が考えられます。

第11号住居跡は第7~11号住居跡の中では最も古い時期のもので、床面も最も深く掘りこまれています。主柱穴はP1~4が考えられ、P2~3を中心軸とすれば6角形に配されていたことになり6.0×6.4mの隅丸不整方形のプランが推定されます。

土器 (Y47~50) 図示した4点は埋土より出土しました。Y47、48はL字形の小さな口縁部を持つ菱形土器です。Y49は上げ底の底部で、Y50は平底で底径は10.6cmを測ります。



69 第11号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)



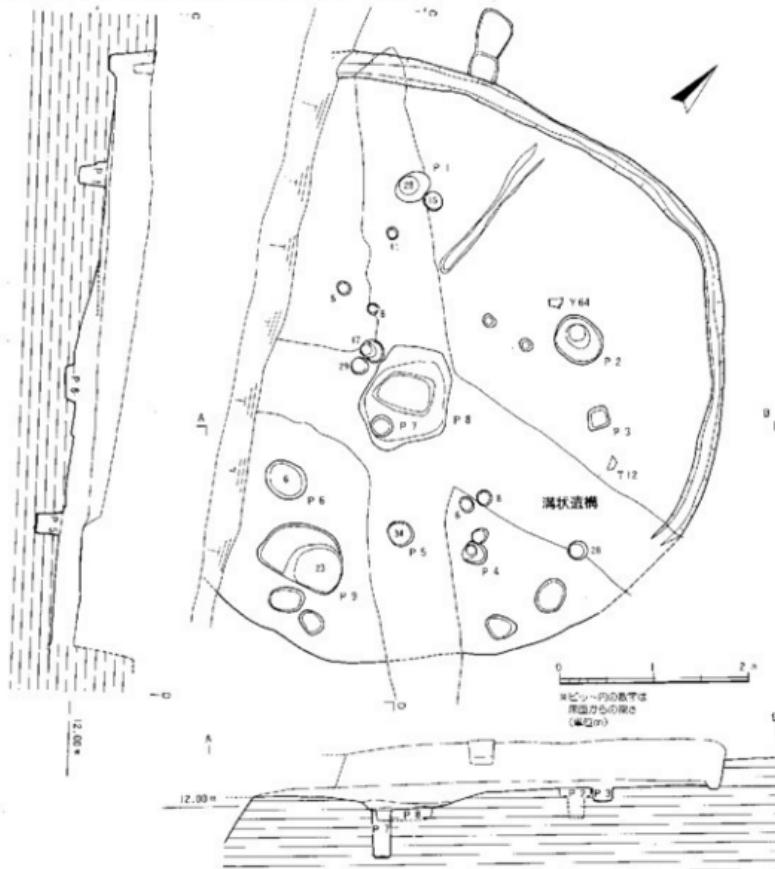
70 第10、11号住居跡実測図 (縮尺1/60)



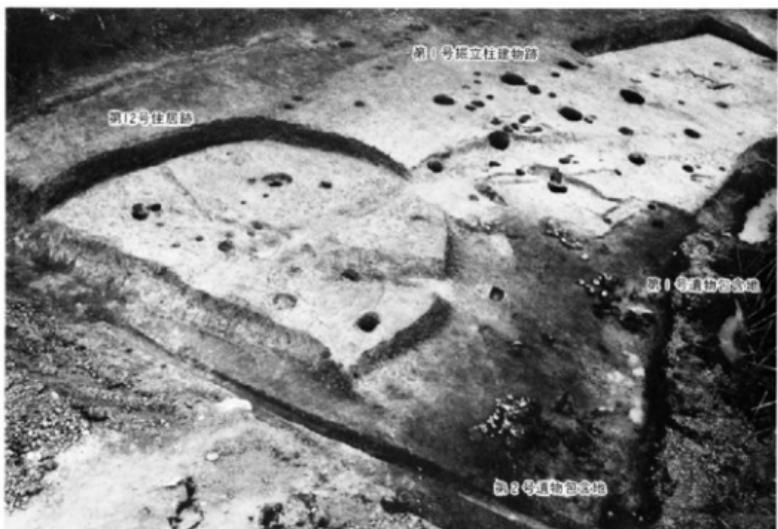
71 第10、11号住居跡 (南から)

第12号住居跡（弥生時代）(72~74)

第12号住居跡は第2地点の西端で検出したもので、西側は崖によって全体の約3分の2が失われています。第12号住居跡が完全に埋上で覆われた後に十文字に交叉する溝状遺構が掘られており、この溝状遺構が埋没してからさらに第1号掘立柱建物がつくられていることからお互いの先後関係がわかります。平面形は不整円形で、壁の高さは残りのいい北側で46cmを測ります。壁は南側に向かって削平され不明瞭となっています。壁溝も同じように東側で途切れていますが、本来は巡っていたものと思われます。床面の南側寄りでは、地山の赤茶色土とは違う土を貼っ



72 第12号住居跡実測図（縮尺1/60）



73 第12号住居跡

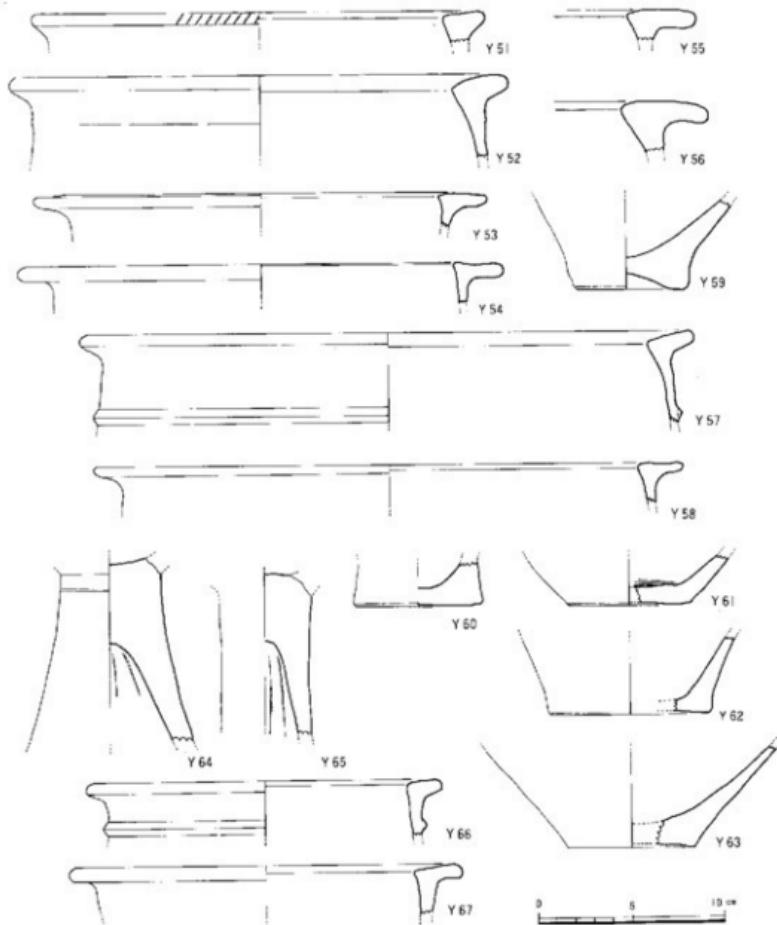


74 第12号住居跡（南西から）

ています。これは斜面を住居跡の占地としたための結果だと思われます。20数個検出したピットのうち主柱穴と思われるものはP 1～6などで壁にそって円形に並んでいます。また中央部には90×115cmの大きいピットが掘りこまれています。

出土遺物 (75～77 表119・120)

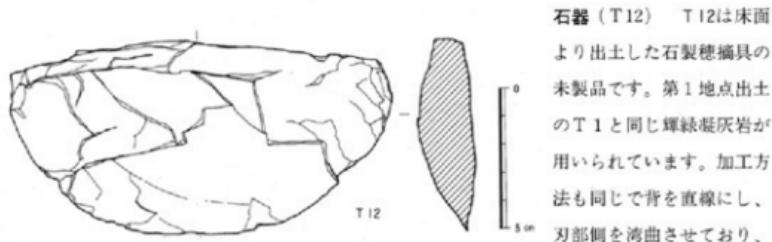
遺物は埋土、床面、ピットから出土しました。西側の崖からもY62、63、66、67などが出土



75 第12号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)

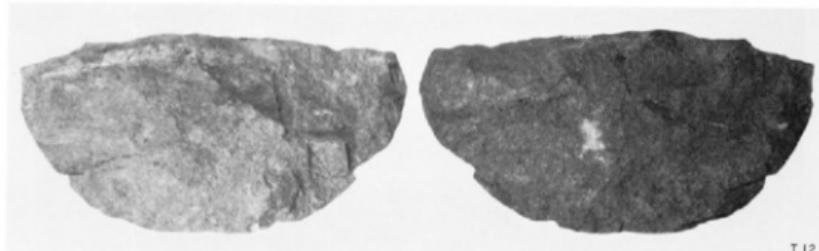
し、ここでまとめて記しておきます。

土器（Y51～67） Y53、61、64の3点は床面より出土し、Y52、56、57、59はP9より一括して出土しました。Y51～58はL字形を呈する壺形土器の口縁部です。Y51は厚手のつくりで口縁端部の外側への突出は小さく、端部は丸くおさめています。外端部には斜行する刻み目を施しています。Y52も厚手の口縁部で、内傾はさらに強くなっています。胴上部にわずかに張りが認められます。全面剥離しており調整痕は観察できません。Y53の口縁部は水平をなし、内端部は小さく突出し、するどい後となっています。Y54も同じように水平な口縁部でその上面は凹状を呈しています。Y58も同じような特徴を持つ口縁部で、口径は31.6cmと大きくなっています。Y55、56の口縁部上面は逆に丸みがあり、胴部上半は直立せず内傾しており倒卵形に近い器形になるのでしょうか。Y57は厚手の内傾する口縁部下に断面3角形の突帯を1条巡らしています。Y66の口径は19cmを測り、小さなL字形口縁部は厚手で、端部は断面は丸ではなく方形となっています。Y64、65は高杯形土器の脚部です。Y65が円柱状をなすのに対し、Y64は湾曲しながら外に開いています。Y59～63の5点は底部で、上げ底と平底の2種があります。Y61は壺形土器の底部と思われるもので、砂粒の多い胎土ながら器面は丁寧なナデ調整が施されています。Y63も丁寧なナデ調整で底部近くに黒斑が見られます。



76 第12号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）

石器（T12） T12は床面より出土した石製穂凝具の未製品です。第1地点出土のT1と同じ輝緑凝灰岩が用いられています。加工方法も同じで背を直線にし、刃部側を湾曲させており、すでに刃部は両面からの剥離で尖らせています。



77 第12号住居跡出土遺物（縮尺1/2）

遺物包含地

第1号遺物包含地（弥生時代）(78)

第12号住居跡の床面の南寄りでは、貼床をして水平な床面をつくっていることは前に記した通りですが、第12号住居跡の床面を掘り下げたところ次のようなことがわかりました。第12号住居跡と第1号掘立柱建物跡の南側5×10mの範囲では地山の傾斜が強く、第12号住居跡がつくられる以前にすでに土砂が堆積しており、土器、石器などの遺物が混在しています。このため第12号住居跡床面は軟弱となっておりさらに土を加え整地する必要があったものと思われます。したがって斜面にできた遺物包含層より第12号住居跡は新しい時期につくられたことになります。この遺物包含層は5×10mの範囲がほぼ同一時期に形成されたと考えられますが、各遺構との先後関係を知るために、第1号掘立柱建物跡の南側を第1号遺物包含地とし、第12号住居跡の南側を第2号遺物包含地とします。

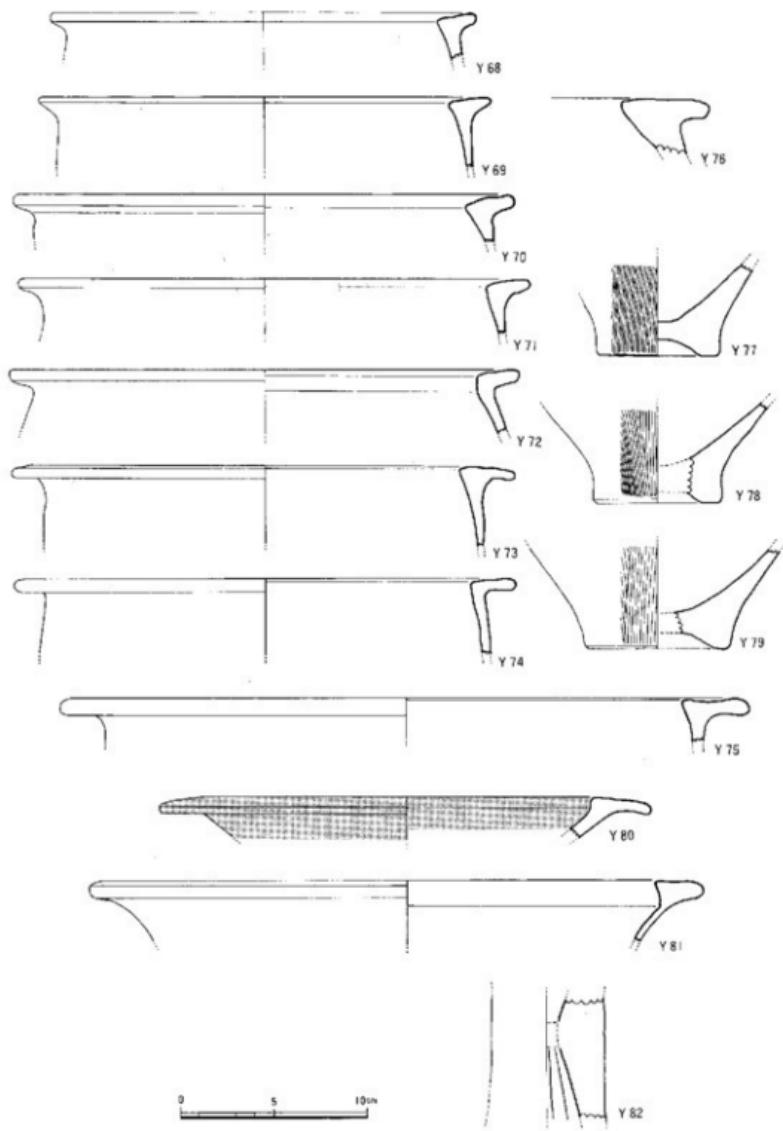
第1号遺物包含地では、地山傾斜面の直上で遺物がまとまって出土しました。その多くは弥生時代中期ごろの土器で、底部の数が多いのが目立ちました。

出土遺物（79～82 表121・122）

土器（Y68～83） 完形土器は1点もなくすべて細片となっています。Y68～76は彫形土器の



78 第1号遺物包含地（南から）



79 第1号遺物包含地出土遺物実測図（縮尺1/3）

口縁部でL字形を呈しています。Y68の口縁部幅は短かく内傾しています。口縁部上面には平行する条痕が見られ横ナデ調整で消されています。Y69の胴部上半は直立気味にのび内傾する口縁部ができます。口縁部内端は小さく突出しており、外端は先細りとなっています。Y70の胴部上半の内傾はさらに強く、口縁部外端は丸くおさめられています。胴部外面は縦のハケ目調整で、その後に口縁部を強く横ナデしています。このためその境には段が見られます。Y72も同じように内傾する胴部で、口縁部内端は棱がなく平坦なつくりとなっています。胴部外面は細かな縦のハケ目調整が施されています。Y73、74は口縁部上面が水平となっているもので、Y73の口縁部外端は下方にわずかに垂れ気味となっています。胎土はいずれも砂粒を多く含んでいます。Y75の口径は26.4cmと大きく、口縁部上面は凹状となっており内端は丸くにぶい棱となっています。Y76は中型壺形土器と思われるもので胴部上半は強く内傾しています。Y80は高杯形土器の杯部で口径26.6cmを測ります。外面は剥離しているために内面のみに丹塗り痕が認められます。が本来は全面に丹が塗付されていたのでしょう。Y81は壺形土器で、頭部は外に大きく開き広口となっています。Y82は高杯形土器の円柱状脚部で内面にしづら痕が見られます。Y77~79は上げ底の底部で、いずれも外面はハケ目調整です。

石器 (T13、14) T13は黒曜石製の打製石錐で、錐長は3cmを測ります。T14は粘板岩質の石材を用いた他道具です。外湾刃の刃部は両面から研磨されています。



80 第1号遺物包含地出土遺物（縮尺1/3）



81 第1号遺物包含地出土遺物実測図（縮尺1/2）



82 第1号遺物包含地出土遺物（縮尺1/1 1/2）

第2号遺物包含地（弥生時代）(83)

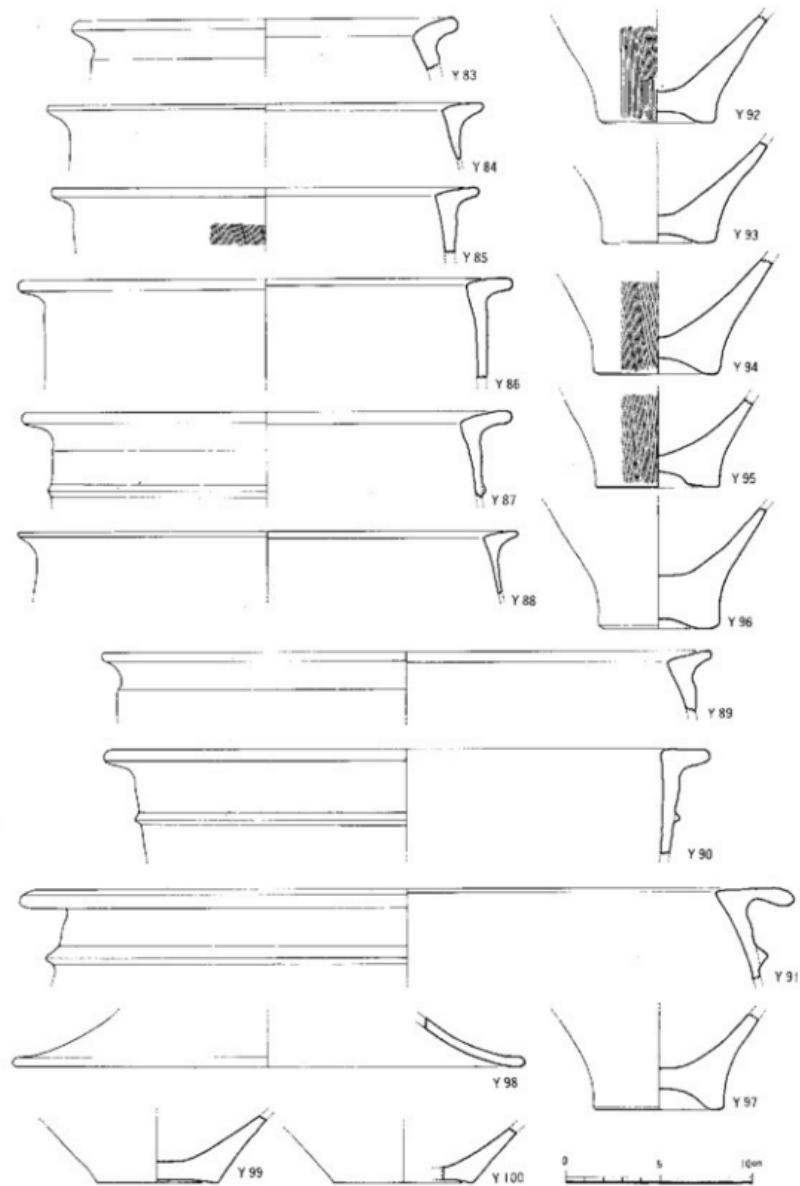
第2号遺物包含地は第12号住居跡の南側に位置し、第2地点では最南西隅に当ります。ここでも土器がまとまって出土しました。当初は住居跡の存在も考えたのですが、土層の観察でも貼床されている可能性もなく、また遺物のはほとんどが地山斜面にそって出土していることから単なる遺物包含地と判断しました。

出土遺物 (84・85 表122~124)

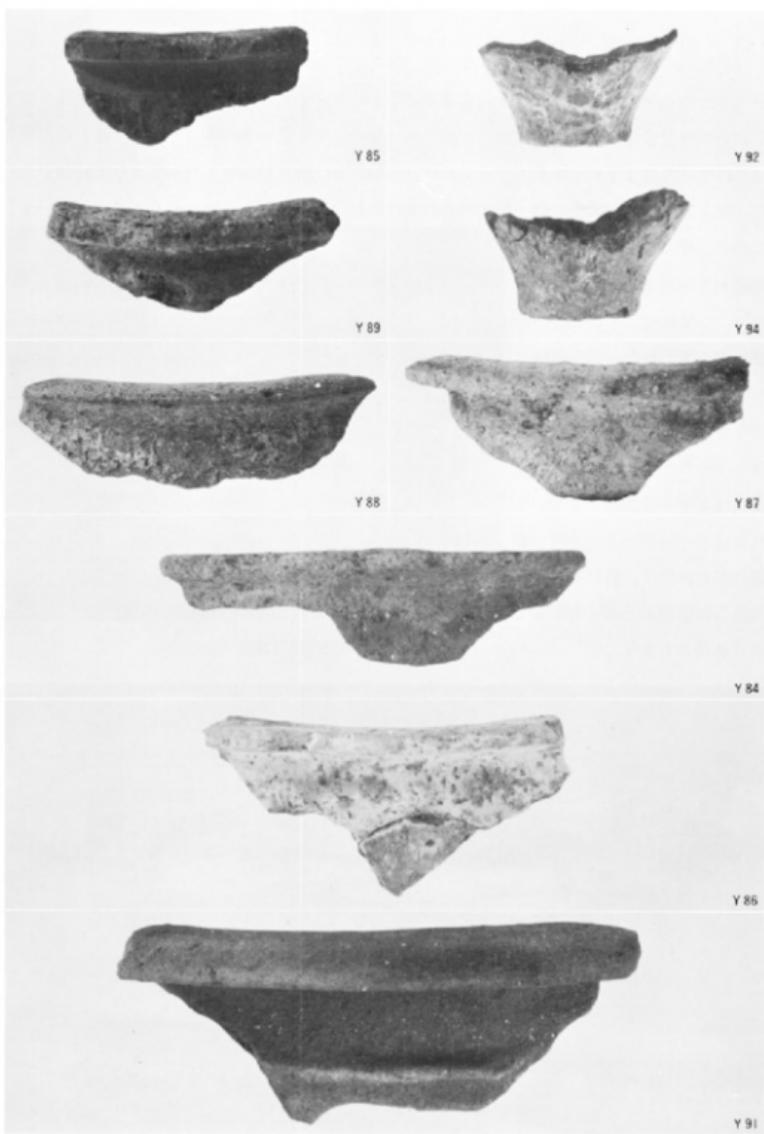
土器 (Y83~100) Y83~91の9点は壺形土器で、口縁部が内傾するY83~89と水平なY90、91の2つに分類できます。Y83~86の口縁部は幅広くなく外端は断面方形に近いつくりをしており、さらに強い横ナデで口縁部下に小さな段を持つのが特徴です。Y89は口径が32.6cmと大きいものの同じ特徴を持っています。Y90の胴部には張りがなく口縁部下に小さな突帯を1条巡らしています。Y91の胴部上半は強く内傾し、背の高い突帯を貼付しています。口縁部は中ほどが薄くなり外端は下方に垂れ気味に丸くおさめています。Y98は蓋形土器で、精良な胎土を用いています。Y92~97は壺形土器の底部で、5~11mmの上げ底となっています。Y92、94、95の外面は縦のハケ目調整が施されています。Y99、100は平底でいずれも砂粒の少ない密な胎土で、外面のナデ調整は特に丁寧です。壺形土器の底部でしょう。



83 第2号遺物包含地（南西から）



84 第2号遗物包装地出土遗物实测图(缩尺1/3)



85 第2号遺物包含地出土遺物（縮尺1/3）

3 第3地点 (86~88)

第3地点の発掘調査は1980年2月より開始しました。他遺跡の報告書作成の時期に当り充分な調査期間を確保できずに年度末の2か月間に集中して作業を進めることになりました。第3地点は第2地点より約2m高くなっています、幅約10m、長さ約70mを発掘区として設定しました。第2地点の発掘調査の際、第2地点の上段においてすでに住居跡の存在を確認していましたので、先に谷開口部に近い南西斜面を調査することにしました。ここではピットがいくつか検出できましたが、出土遺物はなく、大きさも不統一であることなどから柱穴とは考えられませんでした。第3地点における遺構は3軒の住居跡のみで、これらは10m×30mという狭い範囲に見られます。特に第14、15号住居跡は斜面を広く整形しており注目されました。

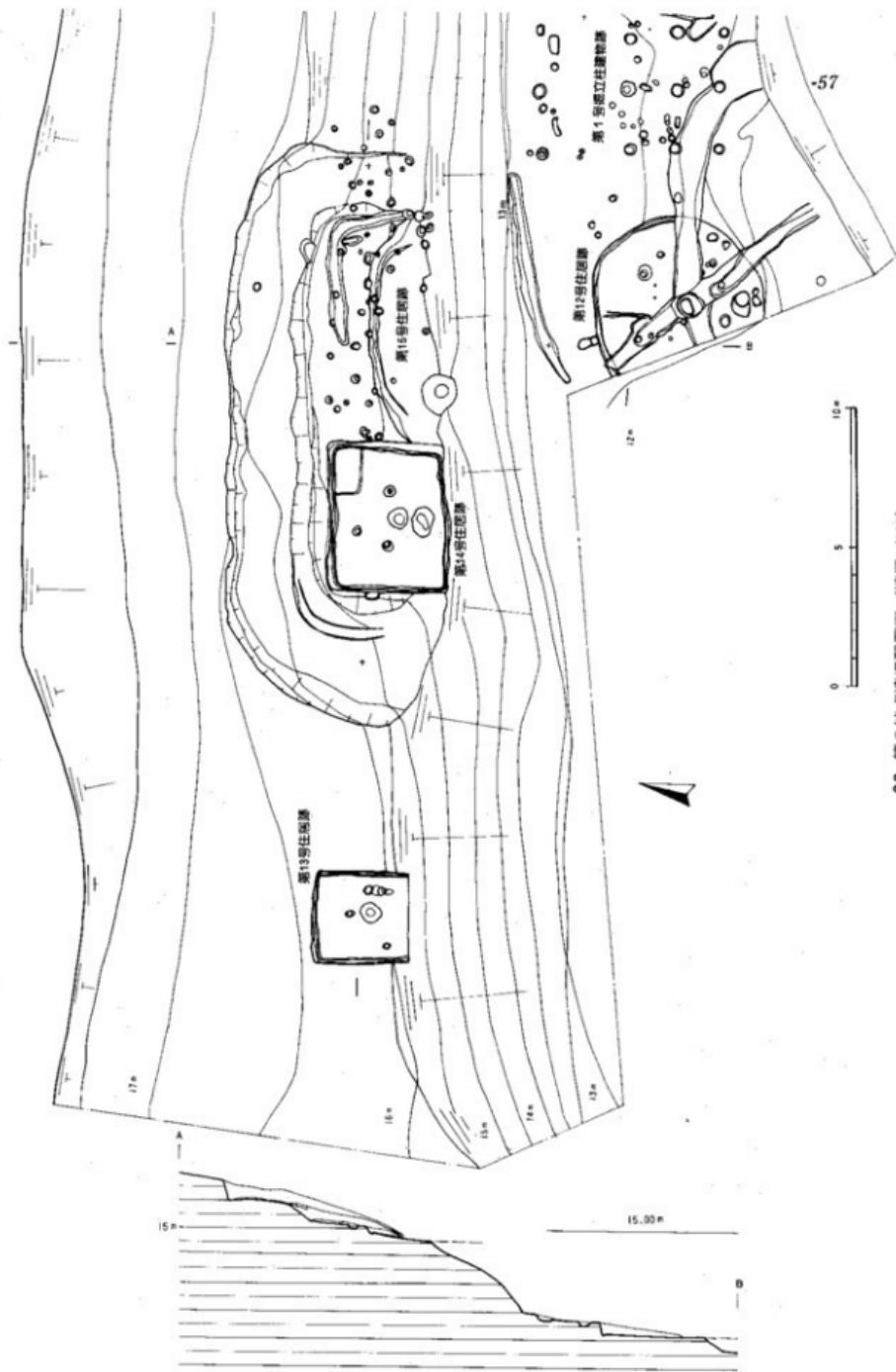


86 第3地点(西から)



87 第3地点(南から)

88 第3地點遺構配置圖 (縮尺1/100)



第13号住居跡（弥生時代）（89～91）

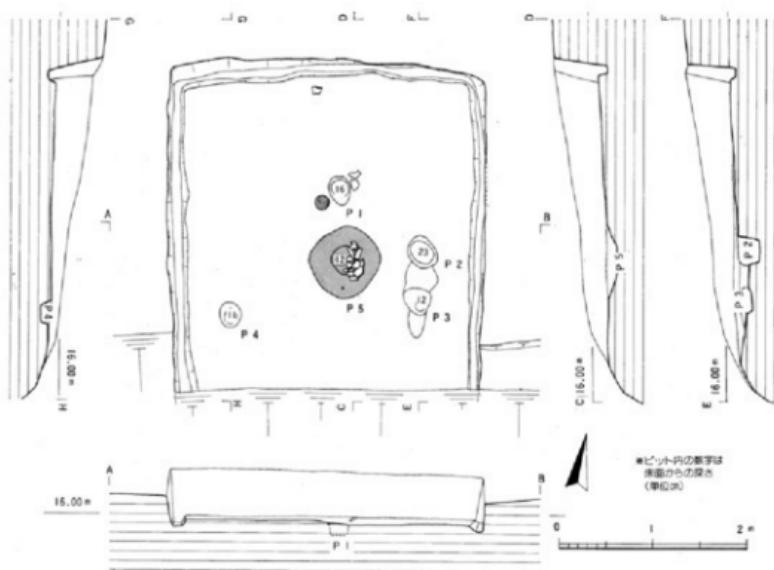
第13号住居跡は第3地点発掘区の西寄りにあり、第14号住居跡の西10mに位置しています。検出したのは北、東、西の3壁で、南壁は崖で失われています。北壁は完全に残っており、長さは3.35mを測ります。東、西壁も同じ長さであることから方形プランとも考えられますが、主柱穴をP 1～4とすればやや南に片寄っており、東、西壁はさらに長かった可能性もあります。3壁には壁溝が巡っており、その底部は南壁側に向かって低くなっています。床面も平坦ではなく、同じように南壁側に傾斜しています。主柱穴と考えたP 1～4の床面からの深さは11～23cmで他の住居跡に比べあまり深くありません。中央の不整円形のピットは76×77cmを測り、埋土には炭化物や焼土が多く含まれており炉跡と考えました。北壁近くの床面より10cm高い所では板状の炭化物が細長く見つかりました。また住居跡の埋土も炭化物が多かったことなどから第13号住居跡は火を受けたものと推測されます。

出土遺物（92・93 表124・125）

出土遺物には弥生式土器と玉類があります。これらは床面と直上の埋土より出土しました。土器（Y101～109） Y101、107～109は床面直上から、Y104、105はP 1から出土しました。またY105は炉と考えたP 5の上部で出土しました。Y101は大きめの壺形土器の脛部破片で、



89 第13、14号住居跡（南から）



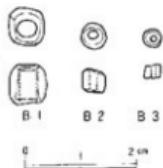
90 第13号住居跡実測図 (縮尺1/60)



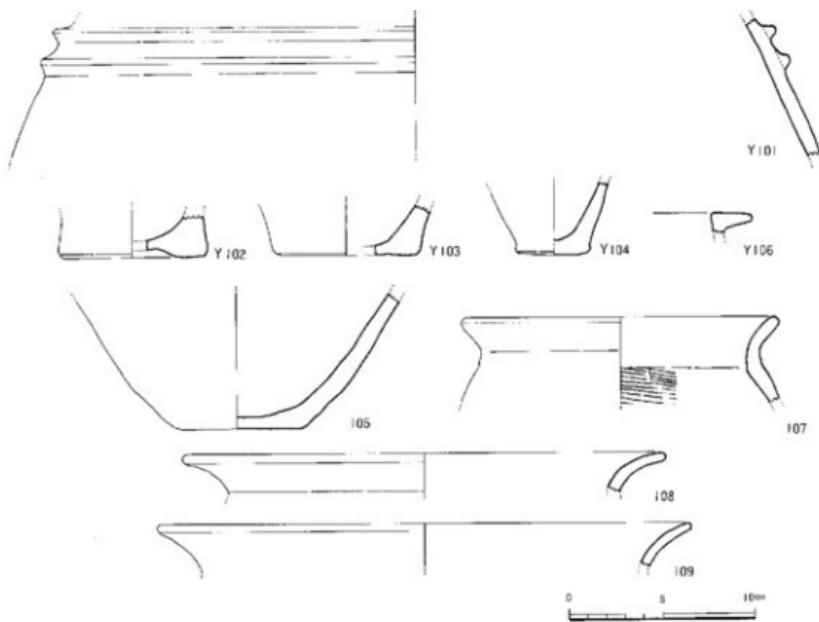
91 第13号住居跡 (南から)

断面台形の突帯が2条巡っています。胎土は小砂粒が混入しているものの密で精良です。Y102～104は底部で、Y102は深さ4mmの上げ度となっています。Y103は平底で、Y104は平坦でなく凸状をなす底部で外縁は丸く突出しています。Y105は平底ながら外縁から胴部への移行があまり明瞭でなく丸みを持っています。またその立ち上りの角度も緩やかなために丸底のような形状となっています。Y106はL字形口縁部の細片です。Y107は17.2cmの口径で、口縁部はく字形に外反し壠部は丸くおさめています。口縁部から胴部外面は横ナデ、胴部内面には粗い横ハケ目調査が施されています。胎土は小砂粒を混じえており茶色を呈しています。Y108、109の口縁部は同じようにく字形の口縁部で、内湾しながら外反しています。胴部への屈曲はあまり明瞭ではありません。

小玉（B1～3） 墓土より3点の玉が出土しました。B1はガラス製で淡緑色を呈しています。径約6.7mm、高さ6.8mm。B2は緑色したガラス製小玉で両端は平行になっています。B3は石製の淡赤茶色をした径約3mm、高さ2.5mmの小玉です。石材は不明。



▶ 92 第13号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/1）



93 第13号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）

第14号住居跡（弥生時代）（94～98）

第14号住居跡は第13号住居跡と第15号住居跡の中間に位置しています。第3地点の南斜面は東側の第1地点寄りほど傾斜が強くなっています。第14、15号住居跡がつくれられている部分での傾斜角度は約30度を測ります。このような斜面に竪穴住居をつくるには、その壁の高さに関係し、単に水平な床面をつくるだけであれば掘り越こす土の量は少なくてすみますが、谷側の壁をある程度の高さにしようとすれば、多量の土を掘り起こすことが必要となってきます。また山側からの雨水、土砂の流入を防がなくてはいけません。第14、15号住居跡ではこの対策として、まず斜面を幅約8m、長さ約21mの範囲で約40cmの深さに掘りこみ平坦面をつくっています。これだけでは平坦面の面積は狭いために、この2m内側でさらにもう一段掘りこみ、竪穴住居2軒分の面積を確保しています。また山側からの排水施設として2段目の掘りこみ部分に浅い溝を掘っています。

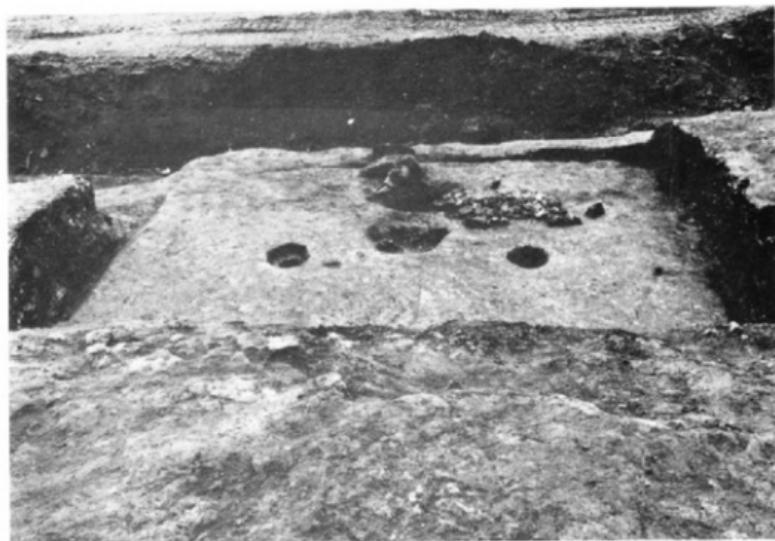
第14号住居跡の南壁は崖で削り取られていますが、壁溝は残っているために住居跡の規模は推定できます。北壁長は5.35m、西壁長は4.4mで長方形の上面プランとなっています。山側である北壁の高さは約80cmを測ります。床面の北東隅にはベッド状遺構があります。このベッド状遺構は長さ170cm、幅100cmの長方形で、12cmの高さに削り出されています。床面には4個



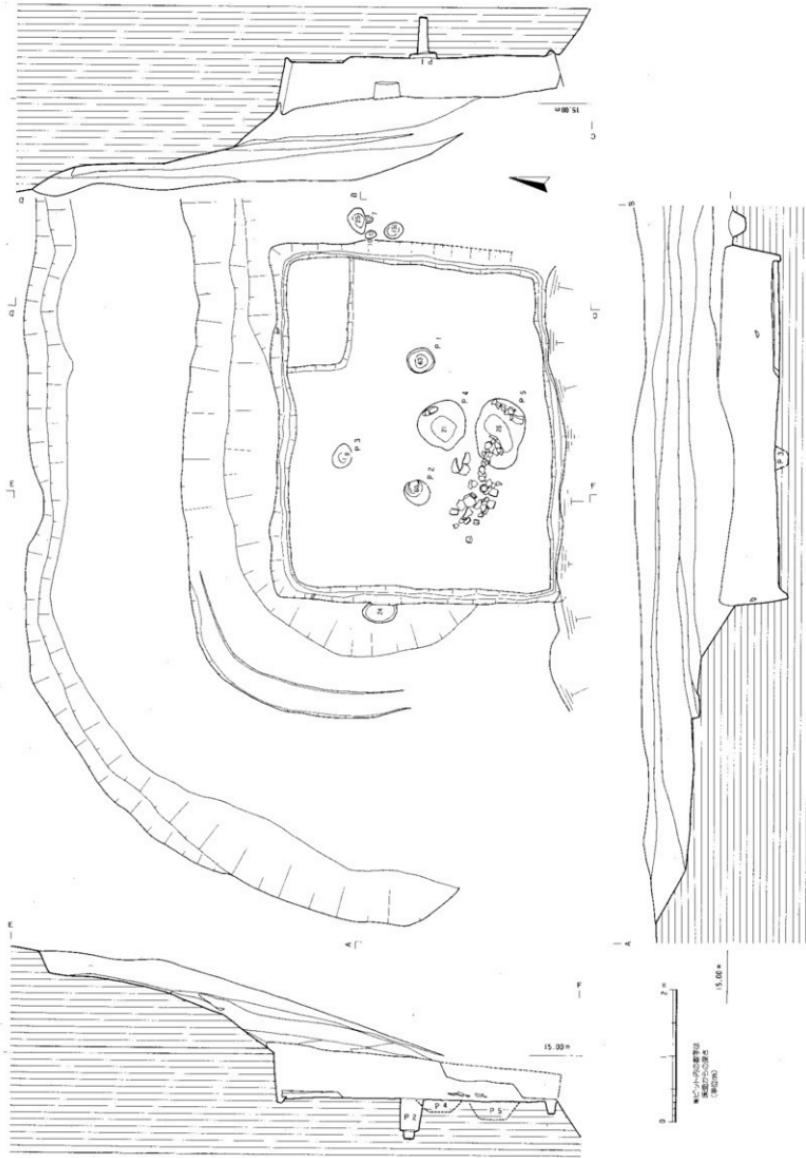
94 第14号住居跡（西から）



95 第14号住居跡（南から）



96 第14号住居跡（北から）



97 聖堂學生宿舍測圖 (縮尺1/80)

のピットがありますが、ほぼ同じ深さであるP 1、2が主柱穴と考えられます。P 2の南側からP 4にかけて土器がまとめて出土し、その下には炭化物が多く見られました。

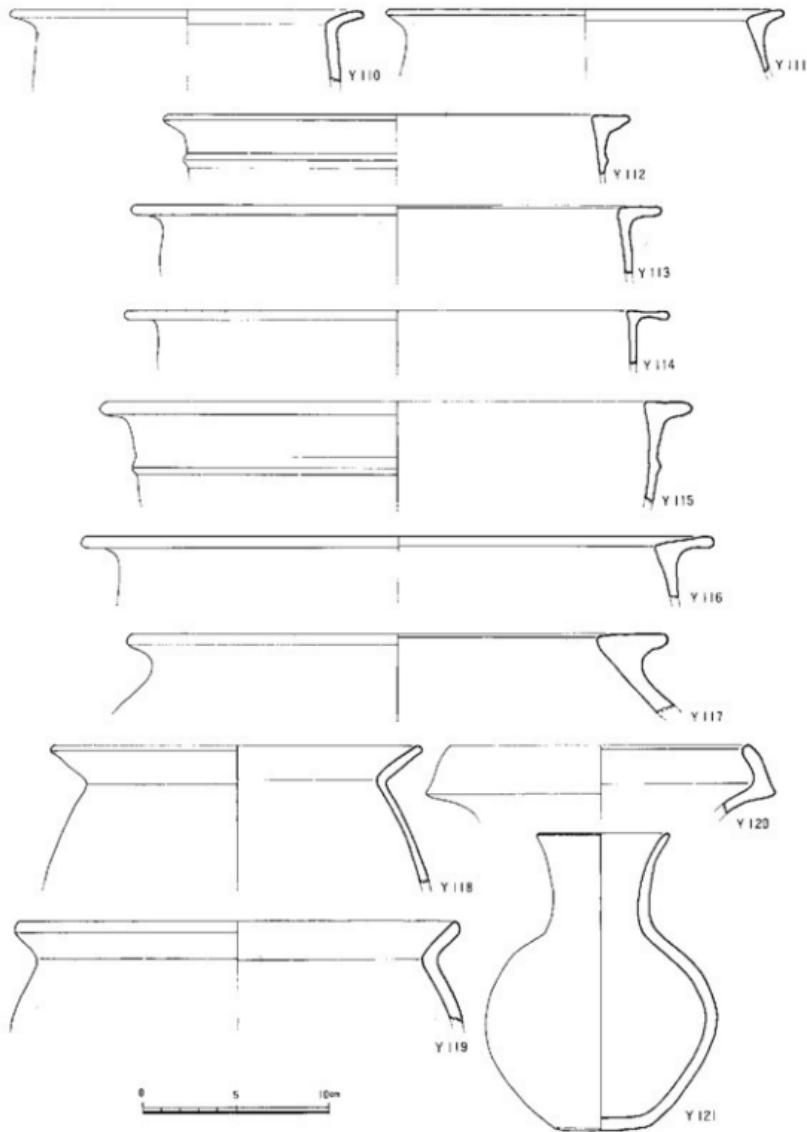
出土遺物 (98~104 表125~127)

弥生式土器と石器が出土しました。住居跡埋土からY117、118、121、123、125~126、129、132~134、137と石製穂摘具3点が出土し、P 3からはY120、130、135が出土しました。この他の土器はP 2の南側で一括出土したものです。

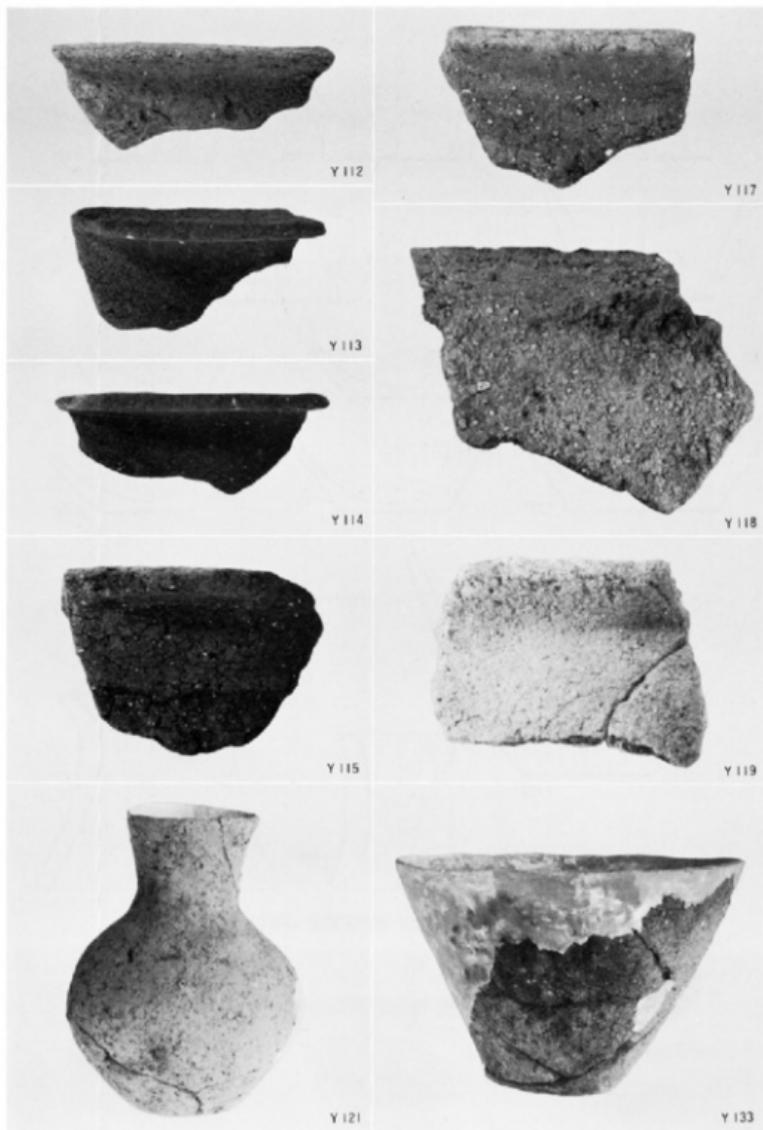
土器 (Y110~137) 弥生時代中期と後期の土器が混在しています。Y110はく字形に近い口縁部ですが胴部に張りはありません。Y111はL字形口縁で上面は内傾しています。Y112~115は口縁部が水平をなすもので、いずれも微小砂粒を含む胎土が使われています。Y112とY115の口縁部下方には断面3角形の突帯が1条巡っています。Y116の内傾する口縁部の外端は丸くおさめられ、やや下方に垂れ気味になっています。Y117の胴上半部は強く内傾しており、水平な口縁部がついています。Y118はく字形の口縁部を持つ壺形土器で、直線的に外反しています。屈曲部は内外面とも丸みがあり鋭利な稜となっています。Y119も同じようなく字形口縁で、口縁部内面は横ハケ目調整か。Y120はいわゆる二重口縁部を持つ壺形土器で、屈曲部外面は小さく突出しています。Y121は頭部の長い壺形土器で、胴部は球形に近く、底部外縁は丸みを持っています。Y122~133は底部で上げ底、平底、丸底気味のものなどがあります。Y134は鉢形の小さな手捏ね土器で、外面には指圧痕がよく残っています。Y135は小破片のため全形を知りえませんが、高杯形土器の脚部と考えられます。Y136とY137は器台形土器で、Y136



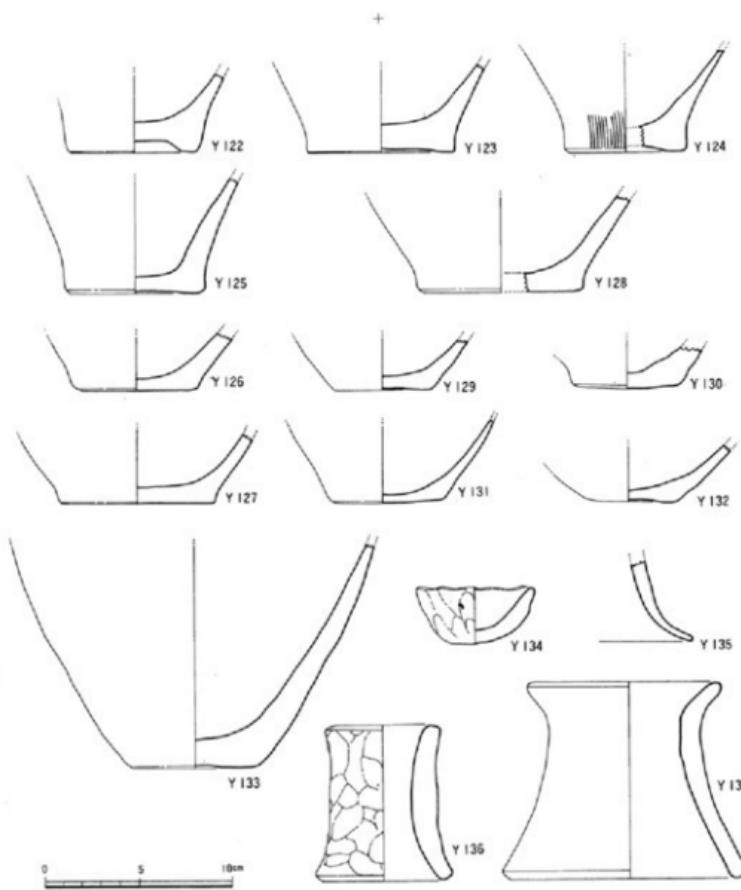
98 第14号住居跡遺物出土状況（南から）



99 第14号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



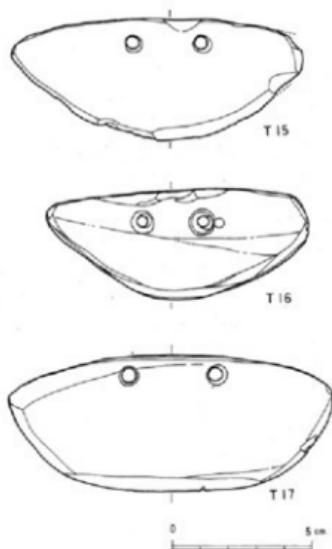
100 第14号住居跡出土遺物（縮尺1/3）



101 第14号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



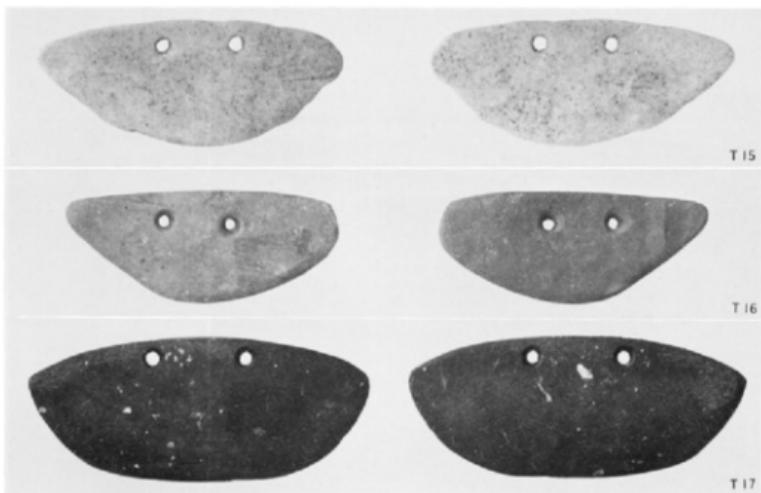
102 第14号住居跡出土遺物（縮尺1/3）



103 第14号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）

の外面は指揮え後にナデ調整を加えています。

石器（T15～17） 3点の石製穂摘具は埋土より出土したもので、T15、16は壁溝上約40cmで発見しました。T15は背が直線ではなく湾曲しており、2個の紐穴は両面より穿孔されており間隔は2.3cmを測ります。全面風化が進んでおり研磨痕は見られません。砂質の石材が用いられています。T16は粘板岩製で外湾刃の刃部は鋭利に研ぎ出されています。2個の紐穴の外に穿孔途中の痕跡があります。T17は輝緑凝灰岩製で、背、刃部とも湾曲しており、刃部中程は直線になっています。2個の紐穴は背に近い所に片寄って穿孔されており、丁寧な研磨が全体に施されています。長さは11.6cm、幅4.9cm、厚さは8mmを測ります。



104 第14号住居跡出土遺物（縮尺1/2）

第15号住居跡（弥生時代）（105～108）

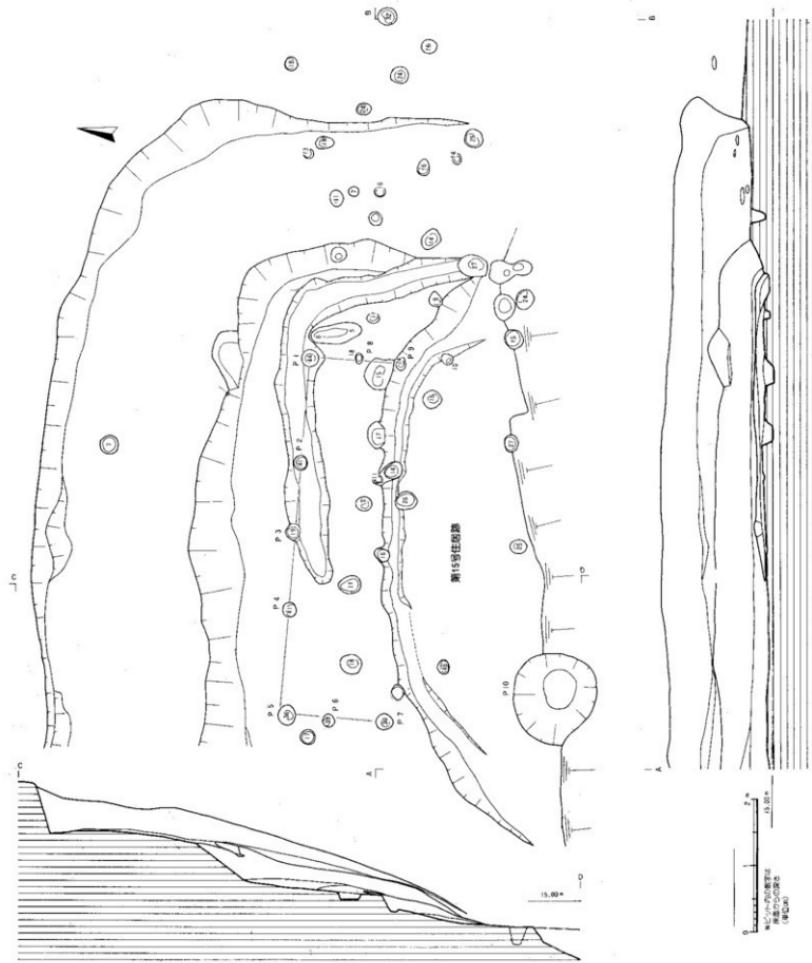
第15号住居跡は第14号住居跡の東に隣接しており、その西端部は第14号住居跡によって切られています。前に記したように住居跡2軒分のスペースを斜面を整形してつくり出していますが、この整形は2段掘りで谷側に向かってコ字形をしています。2段目には幅約60cm、深さ約10cmの排水溝と思われる溝がL字形に掘られています。この南側（谷側）1mの位置に弧状の段があり、この部分を第15号住居跡としました。弧状の段下にはその段にそって壁溝と思われる溝が見られますが、床面は水平ではなく谷側に傾斜しており、主柱穴と思われるピットもありません。また壁溝も他の住居跡に比較すると幅広く掘られています。また弧状の段から平面形を推定すると長径約7m、短径約5mの楕円形の大型の住居跡になります。第2地点の第12号住居跡が崖直下にあることからすれば、両住居跡の時期は違うものの第2地点と第3地点の間にある崖は垂直に近かったことになりや不自然です。2段目の平坦面にはピットが多く、柵状に列をなすものがあります。また住居跡の崖縁には径約1.5m、深さ2.5mの井戸状のピットがありますが、どちらの住居跡に伴うものか明らかにできませんでした。

出土遺物（109・110 表128）

遺物の出土は多くなく、図示した土器5点と石器1点は埋土より出土したものです。床面で



105 第15号住居跡（南から）





107 第15号住居跡（南から）

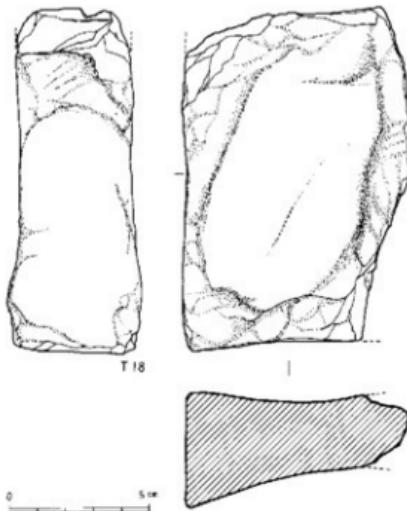


108 第15号住居跡（東方から）

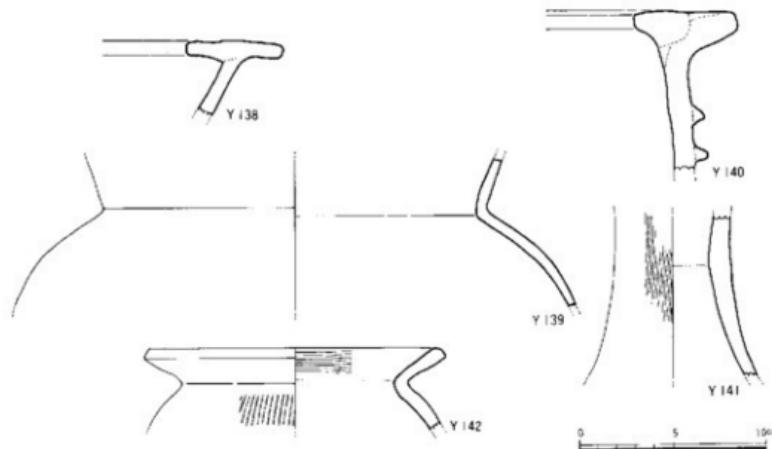
は遺物の出土はありませんでした。

土器 (Y138~142) Y138は壺形土器の口縁部で、頸部から直線的に開き幅の広い水平な口縁部がついています。器面は横ナテ調整されており、口縁部の接合がよく観察できます。Y139は壺形土器の胴、頸部の破片で、頸部への屈曲は丸みを持っています。砂粒の少ない密な胎土が用いられ、ナテ調整も丁寧です。頸部上半を欠いていますが、Y138のような口縁部がつくものと思われます。Y140は大型の壺形土器で、T字形の口縁部の下方には突帯が2条這っています。Y141は器台形土器で外面は縦ハケ目調整です。Y142は小型の壺形土器で、字形口縁部の先端は肥厚し丸くおさめています。

石器 (T18) 砂岩製の砥石で、長、短側面の5面が砥ぎ面となっています。



109 第15号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）



110 第15号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）

3. 出土土器観察表

凡例

- 本文中に掲載した遺物のうち土器については、ページ数の開拓から詳しい記述をしていませんので各遺構ごとに土器の観察結果を表にしました。
- 番号欄の1段目は本報告書における遺物番号で遺物が真番号と一致しています。2段目は整理時の登録番号で実測原寸と土器に記入してあります。3段目は実測寸の持回番号で、4段目は遺物写真の持回番号になっています。
- 遺構欄は伴開跡を併せて、七城を基に、遺物包含地を省略しています。またこの欄に地點を記しました。
- 注意欄は口径、体、底、高は底径、高は器高の略です。
- 備考欄は胎土を始、焼成を経、色調を表、その他のを添としました。

第1地点覆土

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y 1 185 F14 P-	第1地点 覆土	甕	口. 36.6 体. 底. 高.	●広口腹の口縁部で鋸歯状をなす。ただし内端の突出部は丸くおさめている。	●全面削離が進んでいるが、部分的に横ナギ痕が見られる。	胎. 精良 燒. 普通 色. 明茶色 地.
Y 2 186 F14 P-	第1地点 覆土	甕	口. 66.6 体. 底. 高.	●直立気味にのびた斜上部にT字形の口縁部がつく。 ●口縁部上面は外傾し内面は肥厚している。	●外縁は削離刃形に近く、わずかに後を持っている。 ●内面はナデ調空。	胎. 小砂粒を含む 燒. 普通 色. 茶褐色 地.
J1.1 183 F14 P-	第1地点 覆土	甕	口. 14.2 体. 底. 高.	●白磁の小破片のため口徑不正確、白底底とした。体部は内凹気味にのび口縁部は小さく直立する。見込み下半に彫曲がある。	●口縁部は削り無釉。内面には、やや大きめの買入がある。外面には見られない。	胎. 白 燒. 良好 色. 白(にごる) 地.
J1.2 182 F14 P-	第1地点 覆土	甕	口. 17.0 体. 底. 高.	●丘線の口縁部を持つ白釉甕。 ●玉縁は重ね気味で下方に底を持つ。	●全面に施釉される。 ●内面には幅のせよい削り枚が見られる。	胎. 白 燒. 良好 色. 白(にごる) 地.
J1.3 181 F14 P-	第1地点 覆土	甕	口. 17.4 体. 底. 高.	●青磁甕。 ●底部より外側しながらのび、口縁部で小さく外反し縁部は丸くおさめている。	●胎は口縁部がやうすいが、全体に均一にかかる。 ●内外ともに細かい質感がある。色. 淡紫紺色 地.	胎. 広輪色 燒. 良好 色. 淡紫紺色 地.

第1号土塗

H 1 145 F17 P18	第1地点 塗1	甕	口. 11.9 体. 底. 高.	●小型丸底甕で口縁部を欠く。 ●粗面内部は丸みがあり、球形の調整をなす。 ●底部は丸底であるが、その中心はわずかに尖っている。	●腹部付近はハケ月後にナデ調整を加える。 ●全体的に残り悪く調整痕不明顯。	胎. 砂利少なし 燒. 普通 色. 水茶色 地.
H 2 143 F17 P18	第1地点 塗1	甕	口. 8.9 体. 12.6 底. 高. 12.3	●小型丸底甕ではほぼ平行である。 ●球形の割型に直線的に外反する口縁部がつく。 ●縁部は内外面ともに丸みを持つ。	●口縁部は横ナギで調整。 ●斜上部はハケ月調整。斜下部はハケ月をナデ消す。	胎. 小砂粒を含む 燒. 普通 色. 茶褐色 地.

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
H 3 142 F 17 P 18	第1地点 塙1	壺	口、12.2 体、14.3 底、15.9	●わずかに尖った底部に球形の 頂部がつく。 ●肩部はよくしりり。内面は棱 を持つ。 ●口縁部は強く外反し、端部で さらに屈曲する。	●口縁部は外面ともに楕ナナ子調 整。 ●肩上半部はハケ目調整。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 他。
H 4 144 F 17 P 18	第1地点 塙1	壺	口、 体、16.2 底、 高、	●中位に最大径のある肩部は、 やや長めとなっている。 ●口縁部の一帯を残しているが 直線に外反するのである。	●口縁部は楕ナナ子調整。 ●肩部外面は細かいハケ目調整を 施す。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、赤褐色 他。
H 5 13 F 17 P 18	第1地点 塙1	壺	口、18.6 体、 底、 高、	●頂部の粗面は強く、口縁部は外 折気味にのび、端部は平面 方形に近い形をなす。	●肩上半部は細かい横のハケ目調 整。 ●口縁部は楕ナナ子調整。 ●肩部内面のへら割りは右上りで 肩曲部より約1cm下方より行な っている。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、赤茶色 他。
H 6 139 F 17 P 18	第1地点 塙1	壺	口、16.6 体、 底、 高、	●高杯の肩部のみで肩部との後 合部で取れている。 ●肩部の粗面は中位にあり、に ぶく。疣状をなす。	●加曲部より上方は楕ナナ子調整。 ●杯部中位には黒斑が見られる。 ●肩部との接合部は山形をなす。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、赤茶色 他。
H 7 94 F 17 P -	第1地点 塙1	高杯	口、17.6 体、 底、 高、	●杯底曲部より上半分の小瓶古 ●肩部は強く、肩上半部は東側的 にのび、口縁部でさらに小さく外 反する。	●口縁部は楕ナナ子調整。 ●口縁部端は丸くおさめているが 傾くなっている。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、赤茶褐色 他。
H 8 95 F 17 P 18	第1地点 塙1	高杯	口、18.6 体、 底、 高、	●杯底曲部は中位より上方にあり、 深い肩部をなす。 ●杯上半部は、わずかに外湾し ながらのび。口縁部はそのまま 丸くおさめている。厚みがある。	●全体的に剥離溝み、調整痕不明 顯となる。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、赤茶褐色 他。
H 9 126 F 17 P 18	第1地点 塙1	高杯	口、19.2 体、 底、 高、	●脚柱部より下方を欠く。脚柱 部はやや崩らんでおり、H10 と同じような脚部をなすので ある。 ●杯底の黒斑は中位より下にあり、 明顯な棱となっていない。	●肩上半部はわずかに外湾しなが らのび、口縁部でさらに小さく 外反する。 ●杯上半部は楕ナナ子調整か？ 全体的に剥離している。	胎、砂粒含む 焼、普通 色、茶色 他。
H 10 100 F 17 P -	第1地点 塙1	高杯	口、 体、 底、 高、	●高杯の脚部はあるが、脚柱部 を欠く。柱脚部はハ字形に広 がり、やや崩らんでいる。	●脚柱部は細かいハケ目後にナナ 子調整を加えて削している。 ●内面にはしばり痕が見られる。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他。
H 11 12 F 17 P 18	第1地点 塙1	高杯	口、 体、 底、 高、15.8	●脚柱部の上部を欠く。脚柱部 には底らみなく、脚柱部は大き くハ字形に開く。	●脚柱部はわずかに上向きに丸く おさめている。 ●外側の調整は楕のハケ目で、き かめて細かい。	胎、砂粒少なく粘良 焼、普通 色、赤茶色 他。
H 12 151 F 17 P -	第1地点 塙1	高杯	口、 体、 底、 高、18.0	●脚柱部が小瓶古のため、底径 細きともに不正確。脚柱部の 基部は底やかだか内面には明 瞭な棱を持つ。	●内外面とも剥離溝み調整痕無 き。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他。

第1号住居跡

番号	出土区 域	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
H13 155 F21 P-	第1地点 住1	手 指 ね 土 器	口、4.0 体、 底、 高、3.2	●手端の土器で外面には指押と 痕がある。 ●口縁部は強く押え、へこむ。 ●体部は半球形をなす。	●丸底の底部付近は、ナナ調整。	胎、砂粒少ない 燒、普通 色、茶褐色 性。
H14 153 F21 P-	第1地点 住1	手 指 ね 土 器	口、3.6 体、5.3 底、 高、4.8	●球形に近い形態に直立する小 さな口縁部がつく。 ●底部の凹部は丸みがある。	●口縁部は横ナナ調整。 ●脚下半部は底の指押と板が見ら れる。	胎、砂粒少ない 燒、普通 色、赤茶色 性。
H15 147 F21 P23	第1地点 住1	手 指 ね 土 器	口、 体、6.3 底、 高、3.3	●平底から外側しながら削部が のび、底部はわざかに段がつ く。 ●底部はわざかにへこむ。	●底部から脚下半部はナナ。上半 部は横ナナ調整。	胎、小砂粒を含む 燒、普通 色、外：茶褐色 内：赤茶色 性。
H16 140 F21 P23	第1地点 住1 柱穴	壺	口、9.6 体、10.0 底、 高、	●いわゆる小型丸底壺。球形の 胴部に外に聞く長い口縁部が つく。 ●口縁部は直線的で長い。 ●胴部は球形に近い。	●口縁部は横ナナ調整で、底部は 先細くなっている。 ●脚下半部には細かい歯のハケ 目が見られる。	胎、砂粒少ない 燒、普通 色、茶褐色 性。
H17 146 F21 P23	第1地点 住1	壺	口、 体、10.4 底、 高、	●口縁部を欠く。胴部を球形で あるが、最大径の位置は中位 よりわざかに上にある。 ●脚部はあまりしまらず、屈曲 部も丸みを持つ。	●削部内面はナナ調整か。外面は 粗いハケ目で下半部はナナ消し している。	胎、砂粒少しが焼色では ない 燒、普通 色、外：茶色 内：茶褐色 性。
H18 167 F21 P23	第1地点 住1	壺	口、14.6 体、19.0 底、 高、	●胴部は中位より下半を欠く。 胴上部は渦曲しながら内張 する。渦部はよくしまり、外 反するハネ部がつく。 ●口縁部は後ろに渦曲しながら のり溝部は丸くおさまる。	●胴部内面はナナ上げ、外面は頭 部より下方に複ハケ目、横ハケ 目の順。 ●口縁部外面は複ハケ目を横ナナ で消している。	胎、砂粒なし 燒、良好 色、茶褐色 性。
H19 89 F21 P-	第1地点 住1	罐	口、17.6 体、 底、 高、	●肩上半部と口縁部の破片。肩 上部の内張は強く、口縁部 は内張気味に外反する。 ●口縁部は、直線的にのび、短 かい。	●頭部より肩上半部は範ハケ目。 ●口縫部の内面は横の粗いハケ目 後にナナを加える。外面は横ナ ナ調整。	胎、砂粒少ない 燒、良好 色、外：茶色 内：茶褐色 性。
H20 99 F21 P23	第1地点 住1 床面	高 杯	口、20.0 体、 底、 高、	●頭部の接合部で削離してい る。 ●頭部の頭曲は中位より下方に あり、丸みがある。 ●杯下部は外側しながら長く のびる。	●杯外周は横ナナ調整で、さわ めて丁寧である。 ●内面は削離のため観察できな い。	胎、砂粒少ない 燒、良好 色、茶色 性。

第2、3号住居跡

Y 3 57 F28 P-	第1地点 住2 床面	口、24.0 体、 底、 高、	●L字形の口縁部上面はわざか に内斬する。 ●肩上部は直線的にのびやや 内斬している。	●口縫部は横ナナ調整、内張部は 破があり、その直下はわざかに へこんでいる。	胎、1**大の砂粒 燒、普通 色、或茶色 性。
Y 4 25 F28 P30	第1地点	口、24.4 体、 底、 高、	●肩上部は直線的にのび、L 字形の口縫部がつく。 ●口縫部端部は丸くおさめられ 、やや下方に垂れる。 ●口縫部の突唇は背抜く小さい。	●全体に削離し調整部は観察でき ないが、本来うすい厚壁をなす ものと思われる。	胎、編良 燒、良好 色、茶色 性。

番号	出土区 道 橋	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y 5 90 F28 P30	第1地点 住2	甕	口. 27.4 体. 底. 高.	●肩上部は直立してのび、L字形の口縁部がつく。 ●口縁部上面は水平をなすが、中央部がへこむ。	●口縁部は厚いつくりをなす。 ●横ナチ調整。	胎、砂粒少ない 後、良好 色、赤茶色 他。
Y 6 58 F28 P30	第1地点 住2 床面	甕	口. 28.8 体. 底. 高.	●Y5と同じようなつくりをなす。 ●口縁部はぶ厚いつくりで外端部は丸くおきめる。	●全面削離のため調整板不明。	胎、砂粒少ないが精良で ない 後、普通 色、茶色 他。
Y 7 81 F28 P—	第1地点 住2	甕	口. 31.0 体. 底. 高.	●L字形の口縁部は内側へ小さく突出している。	●口縁部は横ナチ調整、上面はわすかにへこむ。	胎、砂粒少ない 後、良好 色、茶色 他。
Y 8 67 F28 P30	第1地点 住2	甕	口. 32.0 体. 底. 高.	●口縁部内側への突出はないが、強く後をなす。	●全面削離で器底の調整板不明。	胎、2~3mmの砂粒 後、普通 色、茶色 他。
Y 9 76 F28 P30	第1地点 住2	甕	口. 27.0 体. 底. 高.	●L字形の口縁部上面はわずかに内傾しており、内側への突出も大きくなない。	●口縁部から突審落にかけて横ナチ調整。	胎、砂粒少ない 後、良好 色、茶色 他。
Y10 104 F28 P—	第1地点 住3 床面	甕	口. 27.0 体. 底. 高.	●口縁部上面はわずかに内傾しており、内側部の突出は丸みがある。 ●全体的に器壁が厚い。	●口縁部はいびつなつくりで正円をなさない。 ●口縁部外面は横ナチ調整。 ●突審部は削離し小さくなっている。	胎、砂粒多いが粗ではない 後、普通 色、茶褐色 他。
Y11 60 F28 P—	第1地点 住2	甕	口. 28.0 体. 底. 高.	●Y12に比べ肩上部の内傾は強くなく直立気味にのびる。 ●口縁部下の突審は磨耗のためか背が低く小さい。	●突審部は強く横ナチし、その下側はわずかにへこむ。	胎、砂粒少ない 後、良好 色、外: 黄茶色 内: 茶褐色 他。
Y12 77 F28 P	第1地点 住2	甕	口. 28.8 体. 底. 高.	●肩上部は内傾し、水平な口縁部と鋭角をなす。 ●口縁部内側は小さく突出し器底の口縁部をなす。 ●口縁部下に突筋をめぐらす。	●口縁部から突審部にかけては横ナチ調整。内側は削離のため不明。	胎、密 地、良好 色、茶褐色 他。
Y13 61 F29 P30	第1地点 住2	甕	口. 38.6 体. 底. 高.	●Y13に比べ器壁厚く、口径もさらには大きい。 ●口縁部はY12ほど水平で、内側への突出が薄い。	●全面削離し突審も小さくなっている。	胎、砂粒多い 後、普通 色、赤茶色 他。
Y14 78 F29 P30	第1地点 住2	甕	口. 44.0 体. 底. 高.	●Y13に比べ器壁厚く、口径もさらには大きい。 ●口縁部の外張がやや崩れ気味で内側への突出はわずかである。	●口縁部外縁は丸みがある。横ナチ調整。 ●口縁部内側は左→右へのナチ調整。	胎、密 地、良好 色、茶褐色 他。

番号	出土区 層	器種	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y15 64 F29 P-	第1地点 住2	壺	口: 43.0 体: 底: 高:	●頸部は直線的に開き、上端に 頸部の水平な口縁部がつく。 ●口縁部外端は下方にやや垂れ 気味で底部は断面方形をなす。	●全面削離すみ調整痕不明。	胎: 精良 燒: 普通 色: 茶色 他:
Y16 79 F29 P-	第1地点 住2	壺	口: 50.0 体: 底: 高:	●口径の大きい広口壺の口縁部 で内側への張り出し強い。上 面は平坦となる。	●口縁部は横ナデ調整。 ●底部外端は底のナデ調整でいす れも丁寧である。	胎: 精良 燒: 良好 色: 淡茶色 他:
Y17 59 F29 床面 P-	第1地点 住2 (床面)	脚壺	口: 体: 底: 34.0 高:	●蓋あるいは脚部と考えられ るが、上部を欠いているので 全形を知りえない。 ●蓋にはさち上りが強く脚 部にしては器壁がうすい。	●全面削離しており調整痕は観察 できない。	胎: 精良 燒: 普通 色: 外: 黄色 内: 茶色 他:
Y18 135 F29 P-	第1地点 住3	漆壺	口: 体: 底: 12.4 高:	●体部の括りは強く、下半部は ハ字形に開く。	●底部は消耗し丸くなる。 ●全面削離し調整痕不明。	胎: 精良 燒: 普通 色: 茶色 他:
Y19 133 F29 床面 P-	第1地点 住3 (床面)	壺	口: 体: 底: 6.4 高:	●底部は平底であるが、幅約7 mmの外縁を残して中央は約2 mmの深さをなす。	●外縁は細かい握のハケ目。内面 はナデ調整。	胎: 砂粒少ない 燒: 良好 色: 茶褐色 他:
Y20 174 F29 P-	第1地点 住2 (底部)	口: 体: 底: 13.4 高:	●底の表面から直線的に大き く開き底部へつながる。 ●底部、胴下部とも器壁は厚 い。	●胴下半部内面はナデ、外縁はナ デ調整。	胎: 砂粒少ない 燒: 普通 色: 茶褐色 他:	
Y21 66 F29 P	第1地点 住2 (底部)	口: 体: 底: 12.0 高:	●径の大きい底部で外縁は丸 みがある。大きく開きながら斜 面へのびている。	●全面削離しているために調整痕 観察できない。	胎: 2~3mm大の砂粒 燒: 普通 色: 明茶色 他:	

第4号住居跡

Y22 180 F37 P	第1地点 住4	壺	口: 25.2 体: 底: 高:	●L字形の口縁部外端は下方に 垂れ気味となる。 ●内縫の突出はないが、するど い棱をなす。	●口縁部は横ナデ、胴部内面はナ デ調整。 ●残りはきわめて悪い。	胎: 砂粒少だが白でない 燒: 普 色: 茶褐色 他:
Y23 103 F37 P	第1地点 住4	壺	口: 32.4 体: 底: 高:	●口縁部は水平をなすが、上面 はわずかにへこむ。 ●口縁部の器壁は厚く、外縁は 断面方形に近い。	●口縁部は横ナデ調整。	胎: 小砂粒を含む 燒: 普通 色: 赤茶色 他:
Y24 160 F37 P-	第1地点 住4 2面	壺	口: 48.8 体: 36.6 底: 高:	●胴下部を欠く。 ●颈部に裂けなく、上半部は 外溝しがらみのび、内側する L字形の口縁部がつく。 ●断面三角形の突堤1条。	●底部を欠くが大きな板片。	胎: 小砂粒多い 燒: 普通 色: 茶褐色 他: 中位に黒斑

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y25 80 F37 P38	第1地点 住4	甕	口. 41.6 体. 底. 高.	●口縁部は水平で腹溝ともに丸みを持つ。 ●口縁部下方の突唇は背が低い。	●口縁部は横ナナメ調整か? 全面削離すむ。	胎. 小砂粒少ない 焼. 普通色. 茶色化。
Y26 179 F37 P-	第1地点 住4	甕	口. 41.8 体. 底. 高.	●口縁部内端は大きく突出しており、幅広で水平なつくりをなす。 ●胴部は強く直線的に内傾している。	●胴部は内外面ともナナメ調整。この後山原部を横ナナメ調整しており、わずかながら段がつく。	胎. 小砂粒 焼. 普通 色. 茶色化。
Y27 81 F37 P-	第1地点 住4	甕	口. 体. 底. 高.	●肩下半周の側面で、断面口唇形の突唇が3条並んでいる。	●胴部内面はナナメ調整。外面は横ナナメ調整。 ●突唇部は強く横ナナメしており、突唇の後はするどい。	胎. 小砂粒少ない 焼. 良好色. 茶色化。
Y28 62 F39 P-	第1地点 住4 外	(底部)	口. 体. 底. 高.	●深さ3mmの上げ底をなす。 ●胴部への移行はあまり括れない。	●全面削離はげしい。	胎. 小砂粒少ない 焼. 普通色. 茶褐色化。
Y29 63 F39 P-	第1地点 住4 外	(底部)	口. 体. 底. 高.	●わざかに上げ底、外縁部は丸みを持つ。	●全面削離のため調整痕は観察できない。	胎. 小砂粒少ない 焼. 普通色. 茶褐色化。
Y30 136 F39 P38	第1地点 住4	(底部)	口. 体. 底. 高.	●深さ4mmの上げ底。	●底部に風靡。 ●底部外面はハケ目後にナナメ調整。底部付近にのみ細かいハケ目痕が残る。	胎. 砂粒少しが精良でない。 焼. 普通色. 茶褐色化。
Y31 134 F39 P38	第1地点 住4 2面	(底部)	口. 体. 底. 高.	●平底でわざかに折れてから胴部に移行する。	●全面削離し砂粒露出している。	胎. 砂粒多い 焼. 普通色. 赤褐色化。
Y32 157 F39 P-	第1地点 住4	(底部)	口. 体. 底. 高.	●上げ底で外縁部は丸みがあり、あまり括れず胴部に移る。 ●底部穿孔孔(底成後)。	●外面は底のハケ目調整。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通色. 赤褐色化。
Y33 131 F39 P38	第1地点 住4	(底部)	口. 体. 底. 高.	●平底から直線的にのび胴部につながる。	●外面はナナメ調整か? ●内向は削離で調整痕不明。	胎. 砂粒少ない 焼. 普通色. 茶褐色化。
Y34 101 F39 P-	第1地点 住4 2面	(底部)	口. 体. 底. 高.	●小さな底部は上げ底をなす。	●外面はハケ目後にナナメ調整。	胎. 小砂粒少ない 焼. 普通色. 基色化。

番号	出土区 器 造 構 構 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y35 132 F39 P38	第1地点 住4 (蓋 部)	口. 体. 底. 高.	●上口底の底面から括れずにそのまま大きく開く。	●内面は剥離。 ●外表面はナゲ調整。	胎. 小砂粒を含む 燒. 普通 色. 茶褐色 他.
Y36 158 F39 P-	第1地点 住4 器 蓋	口. 6.2 体. 底. 高. 10.6	●小さな脇台で体部の括れは中位よりやや上にある。	●全面剥離して凹凸が目立つ。	胎. 砂粒少ない 燒. 普通 色. 茶色 他.
Y37 152 F39 P-	第1地点 住4 器 蓋	口. 11.2 体. 底. 高.	●下半部を丸く。上半部は内側気味に外反する。	●体部外表面は脇のハケ目調整。上端部は横ナゲ調整。	胎. 砂粒少ない 燒. 普通 色. 茶色 他.
Y38 150 F39 P38	第1地点 住4 器 蓋	口. 8.9 体. 底. 高. 16.6	●上. 下端の脇はほぼ同じで体部の括れは裏者ではない。	●全面剥離し凹凸が目立つ。調整痕不明。	胎. 小砂粒多い 燒. 普通 色. 茶褐色 他.
Y39 149 F39 P38	第1地点 住4 器 蓋	口. 11.0 体. 底. 高. 13.1 18.3	●体部の括れは中位にあるか括れは強くない。	●体部外表面は脇のハケ目調整。 ●上・下端部は横ナゲ調整。	胎. 小砂粒を含む 燒. 普通 色. 茶色 他.
Y40 86 F39 P-	第1地点 住4 器 蓋	口. 体. 底. 28.4 高.	●上半部を欠いているために全形を知りえないが、脚ではなく山笠形の蓋とした。 ●全体的に器壁は厚い作りをする。	●塔部は丸くおさめ、内面は脇のナゲ調整か？外表面は脇の細かいハケ目調整。	胎. 燒. 色. 他.
H21 159 F39 P38	第1地点 住4 器 蓋	口. 体. 10.4 底. 高.	●小型丸底盤であるが小破片のため後、傾き不正確。 ●頭部周囲内面は明瞭な後をなす。 ●胴部中位よりやや上に最大径がある。	●頭部外表面はナゲ調整か。 ●残りきわめて忠い。	胎. 砂粒少ない 燒. 普通 色. 茶褐色 他.
H22 148 F39 P38	第1地点 住4 器 蓋	口. 体. 底. 高. 13.2	●杯部との接合部が剥離している。脚部はハート形に開き柱状をなさない。	●全面調整痕不明。	胎. 砂粒少ないが精良で ない 燒. 普通 色. 茶褐色 他.

第1号壺棺墓

Y41 F44 P-	第1地点 第1号 壺棺墓	口. 38.6 体. 36.6 底. 9.0 高. 48.48	●厚みのある底盤は上口底で、胴部への移行は括れがない。 ●胴部最大径は中位より上にあり、やや後引がある。 ●口縁部は手形で下面は幅広くなく同じように厚みのあるつくりをなす。	●剝離は全面剝離しており、器壁ははうすくなっている。調整痕不明。 ●残りが悪く器高は復原値である。	胎. 砂粒少ない 燒. 普通 色. 茶褐色 他.
------------------	--------------------	--	--	--	-----------------------------------

第5号住居跡

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y42 3. F55 P-	第2地点 住5	甕	口. 27.0 体. 底. 高.	● L字形の口縁部は、わずかに外傾する。内壇への突出は弱いが、わりにするといえます。	●外面は横ナデ、内面はナデ調整。	胎、砂粒少ない 境、普通 色、赤茶色 他。
Y43 7. F55 P56	第2地点 住5	甕	口. 体. 底. 高.	●大型甕の口縁部でL字形をなす。 ●内壇は強く張り出している。	●口縁部より内壇までは甕ナデ調整。 ●内面はナデか? ●口径は小破片のため不明。	胎、小砂粒多い 境、普通 色、明茶褐色 他。
Y44 5. F55 P-	第2地点 住5	甕	口. 31.2 体. 底. 高.	●広口の頸部に内壇に粘土を貼りつけ水平な口縁部をつくる。 ●口縁部上面は平底で両端は丸みがある。	●外面にわざかに調整底が認められる。 ●横ナデ調整。	胎、小砂粒多い 境、普通 色、外: 赤茶色 内: 茶色 他。
Y45 2. F56 P-	第2地点 住5	甕	口. 12.4 体. 底. 高.	●いわゆる袋状の二重口縁で、 底曲部の外側にはふい縫となる。 ●口縁部は断面方形ではなく、丸くおさめる。	●底曲部の粘土接合がよく観察できる。 ●底曲部は内外とも横ナデ調整。	胎、砂粒少ない 境、普通 色、黄茶色 他。
H23 141 F55 P56	第2地点 住5 東壁	甕	口. 9.0 体. 9.6 底. 高. 8.4	●底部は球形ではなくやや肩があり底部は尖り気味。 ●口縁部は直線的に外反するが、外側は張らんとおり外溝しているように見える。	●口縁部は横ナデ調整。 ●肩部外側は横ハケ目が残る。 ●底曲部内面は丸みがあり、明瞭な縫をなさない。	胎、砂粒少ないが粘度ではない 境、普通 色、褐色 他。

第8号住居跡

Su2 138 F63 P-	第2地点 住8	甕	口. 10.2 体. 底. 高. 3.6	●天井部は扁平で、直線的に体部へのび、体部は背が低く直立している。	●天井部の横ナデ前りは約5%で、他の部分は直線横ナデ。 ●天井部には?本綱による井形状のヘラ記号あり。	胎、小砂粒を含む 境、普通 色、紫灰色 他。
Su2 137 F63 P-	第2地点 住8	甕	口. 10.6 体. 底. 高.	●体部外側と天井部内面は削板横ナデ。天井部外側ナデの主。	●口縁部の小破片で天井部を欠くが複雑な縫合はなさずであろう。 ●体部はSu1に比べてわざかに八字形に開く。 ●口縁部は丸くおさめ、天井部のヘラ削り見られない。	胎、小砂粒を含む 境、良好 色、灰色 他。

第9号住居跡

Y46 17 F64 P-	第2地点 住9	(蓋部)	口. 体. 底. 高. 5.6	●上げ底の底部は厚いつくりで背の高い形をなす。	●全面磨耗しているために調整痕不現。	胎、砂粒少ない 境、普通 色、外: 赤茶色 内: 茶色 他。
------------------------	------------	------	--------------------------	-------------------------	--------------------	--

第11号住居跡

Y47 161 F69 P-	第2地点 住11	甕	口. 22.4 体. 底. 高.	●口縁部はL字形でわずかに内傾する。 ●内壇の突出はない。	●口縁部は横ナデ調整、内壇は丸みがある。 ●肩部は削離し砂松露出する。	胎、小砂粒含む 境、良好 色、黄茶色 他。
-------------------------	-------------	---	---------------------------	----------------------------------	--	--------------------------------

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y48 173 F69 P-	第2地点 住11	縦 体 底 高	口. 24.6	●Y47に比べ口縁部はさらに内傾し、内張も小さく突出する。さない。	●全面削離しており調整痕跡で	胎、小砂粒多い 焼、青油 色、明茶色 他
Y49 162 F69 P-	第2地点 住11	（直 縦） （直 横）	口. 体. 底. 高.	●底部は上げ直して括れずに斜部へ移行する。	●外縁はナナ調整か？	胎、小砂粒多い 焼、良好 色、赤茶色 他
Y50 171 F69 P-	第2地点 住11	（直 縦） （直 横）	口. 体. 底. 高.	●平底から直線的に斜部につながる。 ●底部、斜面の脛壁は同じ厚さをなす。	●全面削離し砂粒露出している。	胎、砂粒多い 焼、青油 色、茶色 他

第12号住居跡

Y51 35 F75 P-	第2地点 住12	縦 体 底 高	口. 24.2	●厚手のつくりで幅のせまい口縁部です。 ●外縁部に斜行する刻み目を施す。	●口縁部は横ナナ調整。	胎、小砂粒多いか粗ではない 焼、良好 色、赤茶色 他
Y52 21 F75 P-	第2地点 住12 柱穴	縦 体 底 高	口. 26.6	●L字形の口縁部は非常に内傾する上面は上方に張らんでいる。 ●内張の突出はないが、にじみ現れる。	●口縁部は横ナナ調整で斜面との境は段をなす。 ●斜面は砂粒露出する。	胎、砂粒少しが粗 焼、悪い 色、黄茶色 他
Y53 23 F75 P-	第2地点 住12 床面	縦 体 底 高	口. 24.2	●内張が小さく突出する口縁部で外縁側へわずかに傾く。	●口縁部は横ナナ調整で、上面はわずかにへこむ。	胎、砂粒少ない 焼、青油 色、淡茶色 他
Y54 32 F75 P-	第2地点 住12	縦 体 底 高	口. 26.0	●L字形口縁部の上面は、ねば水半をなし、内張への突出は丸みを持つ。 ●外縁は丸くおさめる。	●全面削離しており、調整痕不明。	胎、精良 焼、青油 色、淡茶色 他
Y55 11 F75 P-	第2地点 住12	縦 体 底 高	口. 体. 底. 高.	●口縁部の小破片のために口底不明。 ●口縁部上部は平坦であるが内張は下方に曲れる。 ●部壁は厚いつくりをなす。	●口縁部は横ナナ調整で、外縁は面取り状の施ナナをなす。	胎、精良 焼、青油 色、茶色 他
Y56 23 F75 P-	第2地点 住12 柱穴	縦 体 底 高	口. 体. 底. 高.	●口縁部の小破片で残りはきわめて悪い。 ●Y55に比べ外縁はさらに下方に垂れ胴上半部の内傾も強い。	●全面削離しているために調整痕観察できない。	胎、砂粒含む 焼、普通 色、黄茶色 他
Y57 22 F75 P-	第2地点 住12	縦 体 底 高	口. 32.8	●胴上部は直立気味にのが、口縁部近くで内傾する。 ●口縁部は内傾し、外縁は断面方形に近い。	●口縁部下方には突起の削離痕が見られる。	胎、砂粒少ないが精良でない 焼、青油 色、淡茶色 他

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y58 1 F75 P-	第2地点 住12	甕	口: 31.0 体: 底: 高:	●全面削離しているためか器壁 うすいづくりをなす。 ●口縁部はし寸形で上面は水平 をなす。	●口縁部は複ナテ開墻。内湯の突 出は小さく丸みを持つ。 ●全体に砂利露出する。	胎、砂粒含む 燒、普通 色、灰黃茶色 他。
Y59 24 F75 P-	第2地点 住12 柱穴	(底部)	口: 体: 底: 高:	●底部は約9mmの深さの上汀底 で、やや傾て脚部へ移行す る。	●全面削離しており、器面の調整 痕見られない。	胎、砂粒少ないが焼直 ない。 燒、普通 色、外: 黄茶色 内: 赤茶色 他。
Y60 52 F75 P-	第2地点 住12	(底部)	口: 体: 底: 高:	●底部のみの破片であるが外湯 は近ハ字形をしており、胴部 へは剥離してから移行するので あろう。	●外面はナテ調整。	胎、小砂粒多 焼、普通 色、外: 赤茶色 内: 茶色 他。
Y61 9 F75 P-	第2地点 住12 床面	(底部)	口: 体: 底: 高:	●平底の外縁は丸みがあり、接 やかに外湯しながら脚部への びがる。	●外面はナテ調整。 ●底部内面には素瓦が見られる。	胎、1mm大の砂粒が多い 焼、普通 色、茶色 他。
Y62 14 F75 P-	第2地点 住12	(底部)	口: 体: 底: 高:	●平底の底部から直立して立ち 上がり、外反して脚部に移行す る。	●全面削離して調整痕不明。	胎、2mm大の砂粒 焼、普通 色、灰茶色 他。
Y63 15 F75 P-	第2地点 住12	(底部)	口: 体: 底: 高:	●近部は平底であるが、わずか にへこむ。 ●近部から直線的にひび脚部へ 移行する。	●外面はナテ調整で丁寧である。 ●内面は焼死し不明。	胎、小砂粒多 焼、普通 色、灰灰茶色 他、底部に黒斑
Y64 102 F75 P-	第2地点 住12 床面	高杯	口: 体: 底: 高:	●ハ字形に尚曲しながら聞く脚 部である。 ●脚部合板部下に壺状にへこん だ所があり、あるいは支帯の 削離跡か?	●外面は丁寧なナテ調整を施す。 ●内面にはしづり痕が見られる。	胎、小砂粒多 焼、普通 色、赤茶色 他。
Y65 31 F75 P-	第2地点 住12	高杯	口: 体: 底: 高:	●高杯脚部で杯部接合部より剥 離している。 ●器底を大きく柱状をなす。	●外側の調整は倒離のため不明。 内面にはしづり痕が見られる。	胎、小砂粒含むが焼良 焼、普通 色、茶色 他。
Y66 16 F75 P-	第2地点 住12	甕	口: 19.0 体: 底: 高:	●Y67と同じように口縁部は内 傾し厚手のつくりをなす。 ●口縁部下方に断面V字形の突 部がつく。	●内湯の突出はなく、外湯の断面 は方形に近い。 ●口縁部は複ナテ調整。	胎、小砂粒多 焼、普通 色、赤茶色 他。
Y67 17 F75 P-	第2地点 住12	甕	口: 21.0 体: 底: 高:	●L字形口縁はふ厚いつくりで 上面はわずかに窪み、内傾す る。	●内湯へわずかに突出する。 ●内面はナテ調整、外湯は複ナテ 調整。	胎、砂粒少 焼、普通 色、外: 赤茶色 内: 灰茶色 他。

第1号遺物包含地

番号	出土区 遺構	器種	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y68 40 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 22.8 体: 底: 高:	●口縁部はL字形で外端は断面 方形に近い形状をなす。 ●口縁部の内側は強く、腹部も 上半部に張りを持つのである。	●口縁部は横ナナ子調整で上面には 横のを底が見られる。	胎: 小砂粒多い 燒: 普通 色: 赤茶色 他:
Y69 43 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 24.4 体: 底: 高:	●断上部にはほどんど張りが なく、ほぼ直立する。 ●口縁部はL字形で内巻は突出 が見られる。	●全面が削離しているために調整 法を知りえない。	胎: 砂粒少ない 燒: 普通 色: 淡黄茶色 他:
Y70 38 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 26.8 体: 底: 高:	●口縁部の器壁は厚く、上面は凹 凸があり、内傾する。 ●内巻は小さく突出する。	●腹部の細かい組ハケ目後に口縁 部を横ナナ子する。	胎: 精良 燒: 良好 色: 赤茶色 他:
Y71 44 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 26.6 体: 底: 高:	●L字形口縁部は内巻の突出な く外端は先鋒くおさめる。	●外面は横ナナ子調整。 ●内面は削離しない。	胎: 小砂粒多い 燒: 普通 色: 外: 茶色 内: 赤茶色 他: 胎内には黒茶色
Y72 45 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 27.4 体: 底: 高:	●L字形の口縁部であるが、則 上部の内巻が強く、しかも 内巻が面取りされたかのようにナ ギられてく字形に近い。	●器底の調整は①胴部外面を細か い底のハケ目②胴部内面をナナ子 ③口縁部外周を横ナナ子調整の順 である。	胎: 小砂粒含む 燒: 普通 色: 茶色 他:
Y73 39 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 27.0 体: 底: 高:	●剖面には張りはない。 ●口縁部内巻は後があり、外端 は丸くおさめ、下方に面れ氣 味である。	●口縁部と腹部外面は横ナナ子調 整。他は削離のため不明。	胎: 2mm大砂粒 燒: 良好 色: 茶色 他:
Y74 46 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 26.4 体: 底: 高:	●口縁部、腹部ともに唇壁は同 じ厚さでL字形をなす。 ●内巻の突出はない。	●横ナナ子調整は口縁部のみで、腹 部は内外面ともにナナ子調整。	胎: 砂粒多いが粗ではない 燒: 普通 色: 外: 黒褐色 内: 茶色 他:
Y75 42 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 37.2 体: 底: 高:	●L字形口縁部の中央はへこみ 外端は丸くおさめる。外端は 丸くに深い棱を持つ。	●剖面はげしいが、横ナナ子調整か ?	胎: 小砂粒多い 燒: 普通 色: 茶褐色 他:
Y76 49 F79 P-	第2地点 包1	甕	口: 体: 底: 高:	●口縁部の小破片。口縁部上面 は水平であるが、腹上部の 内巻は強い。 ●外端はわずかに口唇部に近い 形状をなす。	●全面削離し調整痕不明。	胎: 精良 燒: 良好 色: 茶色 他:
Y77 50 F79 P-	第2地点 包1	(瓦 部)	口: 体: 底: 高: 6.6	●厚手のつくりで頑強ではなく、 声弱的に剖面へのびる。 ●底部は深さ9mmの上げ底をな す。	●外面は細かい底のハケ目、下面 はナナ子調整。	胎: 砂粒少ない 焼: 良好 色: 赤茶色 他:

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y78 34 F79 P-	第2地点 包1	(底部)	口、 体、 底、 高、	●底部は上げ度で深さ約6mmを 測る。 ●胸部へはいったん括れてから 移行する。	●外表面はやや粗い板のハケ目調整。 内面は削ぎ。 ●底部外周は未調整のまま。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、外：赤茶色 内：赤茶色 他。
Y79 33 F79 P-	第2地点 包1	(底部)	口、 体、 底、 高、	●深さ約9mmの上げ度で外縁部 の幅は約7mmを測る。 ●胸部への移行にはほとんど括れ ていない。	●内面は縦方向のナナ調整。外周 は底のハケ目調整。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、外：赤茶色 内：黑色 他。
Y80 147 F79 P-	第2地点 包1	高杯	口、26.6	●高杯の底部のみの小破片。幅 広くつくられた底部は断面 が幾枚状をなすが、内溝の突 出は弱く小さい。外縁は下方 に重ね気味。	●全周削離しているが、部分的に 丹磨痕が認められるところから 全面に削離されていたものであろ う。	胎、精良 焼、普通 色、茶色 青唐り 他。
Y81 41 F79 P-	第2地点 包1	壺	口、32.0	●瓶頸状に大きめ開いた颈部上 部に断面3角形の粘土を貼り つけ、以降接着部をつくる。 ●口縁部は上厚いつくりで上面 は水平をなす。	●外表面は削離して調整痕不明だが、 内面は横ナナ調整。	胎、砂粒含む 焼、普通 色、淡茶色 他。
Y82 51 F79 P-	第2地点 包1	器	口、 体、 底、 高、	●円筒状の小さな器口で括れは ない。	●全周削離しており調査痕不明。 内面にしづら痕が見られる。	胎、1mm大の妙粒多い 焼、普通 色、赤茶色 他。

第2号遺物包含地

Y83 36 F84 P	第2地点 包2	壺	口、20.6	●口縁部はL字形をなすが、内 側後く厚手のつくりをなす。 ●外縁の断面は方形に近い。内 縫の突出ではなく、にぶい後を持つ。	●口縁部は横ナナ調整であろう。 ●残りきわめて薄い。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、淡茶色 他。
Y84 70 F84 P85	第2地点 包2	壺	口、23.6	●胴部の器壁はすうすい。瓶底部は 厚いが外縁は先鋒くなる。 ●内縫の突出はない。	●胴部は内外面ともに剥離のため 調整痕不明。 ●口縁部は横ナナ調整。	胎、小砂粒含む 焼、普通 色、赤茶色 他。
Y85 178 F84 P85	第2地点 包2	壺	口、23.0	●胴上半部には張りがなく直立 気味である。	●瓶底外面は縦の細かいハケ目。 この後口縁部は横ナナ調整する。 ●胴部内面も横ナナ調整。	胎、小砂粒含む 焼、真好 色、淡赤茶色 他。
Y86 129 F84 P85	第2地点 包2	壺	口、26.6	●Y85と同じように胴上半部は 直立しており。口縁部との接 合は段が月次つ。 ●口縁部上面は上方にふくらむ。	●胴部内面は丁寧なナナ調整。 ●口縁部は横ナナ調整。	胎、精良 焼、普通 色、赤茶色 他。
Y87 175 F84 P85	第2地点 包2	壺	口、26.4	●L字形口縁部の上面は丸く口 縁部下方に小さな底面三角形 の突筋がつくな。	●口縁部は強く横ナナアシテントと 境に段がつく。	胎、小砂粒含む 焼、普通 色、淡黄茶色 他。

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y88 69 F84 P85	第2地点 包2	甕	口: 26.8 体: 底: 高:	●若端は削離していることもあ ってうすいをなす。 ●外端は先端いをなす。	●口縁部は内外面とも横ナナ子調整。 調整は丁寧である。	胎: 砂粒少ないと精良で はない 焼: 普通 色: 灰茶色 他:
Y89 177 F84 P85	第2地点 包2	甕	口: 32.6 体: 底: 高:	●口縁部上面の内側は強く、側 上半部も内側することからく 字形に近い。外端は折面方形 に近い。	●口縁部は強く横ナナ子調整との 境に段がつく。	胎: 小砂粒多い 焼: 普通 色: 黄茶色 他:
Y90 96 F84 P-	第2地点 包2	甕	口: 32.4 体: 底: 高:	●I. 字形口縁部の上面は平で、 内側は小さく突出し丸みを持つ。 ●口縁部下方に小さな断面三角 形の突起をつける。	●胴部内面はナナ子調整。口縁部上 面から突起部にかけては横ナナ子 調整。	胎: 砂粒少ないと 焼: 良好 色: 赤茶色 他:
Y91 176 F84 P85	第2地点 包2	甕	口: 41.8 体: 底: 高:	●口径の大きい腹で、胴上半部 は強く内傾し倒卵形をなす。 ●口縁部上面は水平であるが、 外端は下方に垂れる。	●内面は削離のため不明。 ●外端は横ナナ子調整。	胎: 砂粒多いが粗 焼: 普通 色: 黄茶色 他:
~Y92 18 F84 P85	第2地点 包2	(盛 甕)	口: 体: 底: 高:	●上げ底の深さは約6cmで外周 にはわずかに凹がある。	●胴部内面はナナ子、外面は細かい 織のハケ目調整。	胎: 小砂粒わずか 焼: 良好 色: 赤茶色 他:
Y93 19 F84 P-	第2地点 包2	(盛 甕)	口: 体: 底: 高:	●底部の破片、上げ底の外縁は 平坦であるが、形状はいびつ である。	●全面削離のため調査直不明。	胎: 砂粒少ないと粗 焼: 悪い 色: 赤茶色 他:
Y94 20 F84 P85	第2地点 包2	(盛 甕)	口: 体: 底: 高:	●上げ底は深く外縁の平坦面の 幅はせまい。外縁部も丸みを持 つ。	●底部外縁の程ハケ目は時計まわ りに施される。 ●胴部内面はナナ子調整。	胎: 小砂粒含む 焼: 普通 色: 外: 茶色 内: 赤茶色 他:
Y95 98 F84 P-	第2地点 包2	(盛 甕)	口: 体: 底: 高:	●幅約1.7cmの外縁部は水平で はなく傾斜している。	●胴部内面はナナ子調整、外縁は程 ハケ目後にナナ子か? ●上げ底部もナナ子調整。	胎: 小砂粒含む 焼: 普通 色: 外: 淡茶色 内: 青色 他:
Y96 56 F84 P-	第2地点 包2	(盛 甕)	口: 体: 底: 高:	●中央部のみ底み上げ底となる。 ●底部の若端はおもて厚くな り背も高い。	●全面削離しているために調査法 知りえない。	胎: 砂粒少ないと精良で ない 焼: 普通 色: 外: 淡赤茶色 内: 淡黄色 他:
Y97 97 F84 P-	第2地点 包2	(盛 甕)	口: 体: 底: 高:	●深さ1cmを越す上げ底で底部 へはわずかに凹れて移行する。	●胴部外縁はナナ子調整のみクン目 は見られない。	胎: 小砂粒含む 焼: 普通 色: 外: 灰茶色 内: 赤茶色 他:

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y 98 83 F 84 P -	第2地点 包2	甕	口. 体. 底. 高.	●器壁はうすいが思われる。 ●底部は水平で腹部は丸くおさめる。	●割離のため調整痕や不鮮明だが、丁寧なナナ子調整か。	胎: 精良 焼: 普通(軟質) 色: 茶色 他:
Y 99 55 F 84 P -	第2地点 包2	(底部)	口. 体. 底. 高.	●底部はわずかにへこむ。 ●脚部は汚れるごとに直線的に外反して移行する。	●底部内面はナナ子で、外部は尾のへたり (?)ナナ子調整。調整は全体的に丁寧である。	胎: 砂粒少ないと精良でない 焼: 良好 色: 茶系色 他:
Y 100 82 F 84 P -	第2地点 包2	(底部)	口. 体. 底. 高.	●Y 99と同じような器形とす。 ●Y 99と同じように、底部土器の底部と思われる。	●底部外側はナナ子、底部内面は尾の丁寧なナナ子調整。	胎: 茶 焼: 良好 色: 茶系色 他: 黒斑

第13号住居跡

Y 101 30 F 93 P -	第3地点 住13	甕	口. 体. 底. 高.	●直筒の大きさ、本底。唇壁のうすさなどから底部上半部としめたが、下半部の可能性もある。	●底部は横ナナ子、他の部分はナナ子調整。	胎: 精良 焼: 普通 色: 外: 黒色 内: 茶色 他:
Y 102 26 F 93 P -	第3地点 住13	(底部)	口. 体. 底. 高.	●底部の小破片。上げ底で外縁部は平底をなし難い。	●調査裏不規。	胎: 2~3mm大の砂粒を含む 焼: 普通 色: 茶褐色 他:
Y 103 25 F 93 P -	第3地点 住13	(底部)	口. 体. 底. 高.	●底部の小破片。 ●平底の底部はうすいが底部移行部の器壁は厚いつくりをなす。	●全周剥離のため調整痕不鮮明。内面はナナ子。	胎: 砂粒少ないと精良でない 焼: 普通 色: 外: 茶褐色 内: 深黒色 他:
Y 104 53 F 93 P -	第3地点 住13 柱穴	(底部)	口. 体. 底. 高.	●底部は小さく丸みがある。また外縁部は小さく突出している。	●全面剥離のため調整痕不明。	胎: 砂粒少ないと精良でない 焼: 普通 色: 外: 茶褐色 内: 深黒色 他:
Y 105 168 F 93 P -	第3地点 住13 柱穴	(底部)	口. 体. 底. 高.	●平底の外縁部は丸みがあり、そのまま緩やかに剥離に移行する。剥離への立ち上がりは弱く外削しながらのびる。	●外縁部とともにナナ子調整か。	胎: 砂粒多い 焼: 普通 色: 茶褐色 他:
Y 106 54 F 93 P -	第3地点 住13	甕	口. 体. 底. 高.	●口縁部の小破片のため、口径は不明。 ●L字形の口縁部で内縁の突出はない。	●横ナナ子調整か。剥離のため不鮮明。	胎: 砂粒少ない 焼: 普通 色: 淡茶色 他:
Y 107 28 F 93 P -	第3地点 住13	甕	口. 17.0 体. 底. 高.	●L字形に外反する口縁部で、頂部はあまりしまらず、腹曲部の内面も緩やか。	●口縁部内面から底部外縁にかけては横ナナ子調整。剥離内面は粗い横ハケ目調整。	胎: 小砂粒含む 焼: 良好 色: 茶色 他:

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y108 27 F 93 P -	第3地点 住13	甕	口: 25.8 体: 底: 高:	●口縁部の小破片、底部はよく しまらず、口縁部は内側しな がらのびる。	●外縁は横ナナ子調整、内面は削離 し不明。	胎: 砂が多い 焼: 普通 色: 茶色 他:
Y109 29 F 93 P -	第3地点 住13	甕	口: 28.6 体: 底: 高:	●Y108と同じような口縁部で 底部は丸くおさめる。	●内・外縁ともに剥離磨耗し、砂 粒露出する。	胎: 砂粒多い 焼: 普通 色: 茶色 他:

第14号住居跡

Y110 130 F 99 P -	第3地点 住14	甕	口: 19.0 体: 底: 高:	●口縁部は肥厚せず、腹部より そのままL字形に折りかえし ている。 ●内・外縁ともに丸みがある。	●全面剥離磨耗し砂粒が露出して いる。 ●口縁部と腹部の境は波になって いることから口縁部は強い横ナ ナ子ですか。	胎: 砂粒含む 焼: 普通 色: 茶色 他:
Y111 109 F 99 P -	第3地点 住14	甕	口: 21.4 体: 底: 高:	●口縁部、腹上半部とともに内側 する。 ●内浦の突出はなく腹は丸みを 持つ。	●全面剥離し調整痕不明。	胎: 1~2mmの大砂粒多 焼: 普通 色: 茶色 他:
Y112 106 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口: 25.2 体: 底: 高:	●L字形口縁部は水平で外縁は 丸くおさめる。 ●口縁部下方に断面三角形の交 帶を巡らす。	●剥離はげしく突起も小さくなる。 ●調整痕不明。	胎: 小砂粒を含む 焼: 普通 色: 茶色 他:
Y113 110 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口: 28.6 体: 底: 高:	●L字形の口縁部は肥厚せず、 水平なつくりをなす。 ●内浦への突出はない。	●横ナナ子調整か?	胎: 砂粒少ないが粘度で はない。 焼: 普通 色: 茶色 他:
Y114 107 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口: 29.4 体: 底: 高:	●剥離しているためか器壁をわ めでやすい。 ●口縁部上面はへこみ、外縁は 丸くおさめる。	●全面剥離し調整痕不明。	胎: 小砂粒含む 焼: 良好 色: 茶色 他:
Y115 108 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口: 29.8 体: 底: 高:	●口縁部下方に断面三角形の交 帶をつけるが剥離のために小 さくなっている。 ●口縁部上面は水平で外縁は丸 くおさめる。	●口縁部の内外面から突帯部にか けて横ナナ子調整。	胎: 小砂粒含む 焼: 普通 色: 茶色 他:
Y116 105 F 99 P -	第3地点 住14	甕	口: 34.0 体: 底: 高:	●口縁部は内側し、中央部はへ こむ。 ●外縁は丸くおさめ、輪郭い口 縁部となる。 ●内浦への突出はないが、腹い 棱を持つ。	●全面剥離のため調整痕不明。 横ナナ子調整であろう。	胎: 小砂粒多い 焼: 良好 色: 茶色 他:
Y117 120 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口: 29.2 体: 底: 高:	●胴上半部は直線的に内側する。 ●口縁部は断面三角形の筋柱をつ くる。	●口縁部は横ナナ子調整。内浦は丸 みを持つ。 ●胴部内面は剥離して砂粒露出す る。	胎: 砂粒多い 焼: 良好 色: 茶色 他:

番号	出土区 地	器 種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y118 126 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口. 20.0 体. 底. 高.	●U字形の口縁部は直線的にの りる。 ●底部の延曲部は丸みがある。	●口縁部は横ナナ調整。底部は内 外表面とも剥離のため調整痕不明。	筋、砂粒含むが粗ではな い。 焼、普通 色、茶色 他。
Y119 123 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口. 23.4 体. 底. 高.	●Y118に比べ口縁部は厚手の つくりで底部の張りも弱い。 ●底部は同じく丸みがあ る。	●口縁部は横ナナ、底部外面はナ ナ調整。	筋、砂粒多く粗 焼、普通 色、黄茶色 他。
Y120 117 F 99 P —	第3地点 住14	甕	口. 16.0 体. 底. 高.	●巻状の二重口縁で底部外面 は小さく突出し、にぶい腰を なす。 ●口縁部は肩曲部より、わずか に外薄しながらのび。底部は 丸くおさめる。	●横ナナ調整。	筋、砂粒少ないが密でな い。 焼、普通 色、明茶色 他。
Y121 152 F 99 P 100	第3地点 住14	甕	口. 7.4 体. 底. 9.0 高. 16.0	●丸底気味の底部に球形の胸部 がつくり、底部はわずかに内凹 しながらのび口縁部近くでき らに小さく外反して底部を丸 くおさめている。	●全周削離しており、調整痕は不 鮮明。	筋、砂粒少ない 焼、普通 色、黄茶色 他。
Y122 111 F 101 P —	第3地点 住14	(底部) (底盤)	口. 体. 底. 6.6 高.	●上げ底で外縁部の輪はせまい。 ●底部への移行はわずかに括れ する。底部の背は高い。	●全面削離のために調整痕不明。	筋、砂粒少ない 焼、普通 色、明茶色 他。
Y123 169 F 101 P 102	第3地点 住14 床面	(底盤)	口. 体. 底. 7.8 高.	●平底であるが、中央部がわ ずかにへこむ。	●底部は厚手のつくりで、外縁部 は丸みがない。 ●内外表面とも調整痕不明。	筋、小砂粒多 い。 焼、普通 色、外：淡黄茶色 内：黄褐色 他。
Y124 112 F 101 P —	第3地点 住14	(底盤)	口. 体. 底. 6.4 高.	●上げ底で外縁部は幅約8mmが 平坦となる。 ●底部への移行はわずかに括れ している。	●底部近くに低い楕円窓が見 られる。内面は剥離している。	筋、2mm大の砂粒 現、普通 色、茶色 他。
Y125 170 F 101 P 102	第3地点 住14 床面	(底盤)	口. 体. 底. 7.4 高.	●平底で外縁端は丸みを持つ。	●剥離した砂粒露出している。	筋、小砂粒少 ない。 焼、普通 色、淡茶色 他。
Y126 116 F 101 P —	第3地点 住14	(底盤)	口. 体. 底. 6.6 高.	●平底で外縁端は丸みがある。 ●底部への立ち上がりは弱い。	●底部より胸部の壁が厚いく り。 ●外側はナナ調整。	筋、2~3mm大の砂粒を 含む 焼、普通 色、明茶色 他。
Y127 154 F 101 P —	第3地点 住14	(底盤)	口. 体. 底. 8.2 高.	●平底で背は低い。底部は外凸 しながらのびている。	●内面はナナ、外表面は丁寧なナナ 調整。	筋、小砂粒多 い。 焼、普通 色、外：淡黒褐色 内：茶色 他。

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y128 105 F101 P -	第3地点 住14 床面	(直筒)	口. 体. 底. 高.	●底の大きい平底で外縁端は小さく外に突出している。	●残りきわめて悪い。 ●内面はナデ調整、外面は不明。	胎、砂粒少ないが稍良でない 燒、普通色、赤茶色 他、
Y129 172 F101 P -	第3地点 住14 床面	(直筒)	口. 体. 底. 高.	●平底であるが外縁端は丸みがある。 ●底部へはわずかに外湾気味にのびる。	●剥離のため調整痕不明。	胎、砂粒少ない 燒、普通色、外：褐色 内：茶褐色 他、
Y130 119 F101 P -	第3地点 住14	(直筒)	口. 体. 底. 高.	●底部の小破片。底部は平底であるが、中央部が突出し、また外縁端が丸みを持っていますことから丸底気味となる。	●底部より上方に粘土をナデ上げている。	胎、砂粒含む 燒、普通色、黄茶色 他、
Y131 129 F101 P -	第3地点 住14	(直筒)	口. 体. 底. 高.	●底部は丸底気味。 ●底部、側部ともに器壁のうすいづくりになす。 ●底部へは外湾してのびる。	●全面砂粒露出し調整痕不明。	胎、2~3mm大の砂粒 燒、普通色、外：褐色 内：黄茶色 他、
Y132 93 F101 P -	第3地点 住14 床面	(直筒)	口. 体. 底. 高.	●所の小さい底部で中央部がわずかにへこむ。 ●側部の立ち上がり高く、外湾しながらのびる。	●全面剥離し、調整痕不明。	胎、砂粒少ない 燒、普通色、淡茶色 他、無焼
Y133 184 F101 P100	第3地点 住14	(直筒)	口. 体. 底. 高.	●底部は平底であるが、外縁は丸みがあり上面へは緩やかに外湾しながらのびる。	●調整痕不鮮明、内外面ともにナデ調整か?	胎、小砂粒多い 燒、普通色、茶色 他、
Y134 154 F101 P102	第3地点 住14	手把ねたて器	口. 体. 底. 高.	●鉢形の手把ね上器で、口縁部は抵打っている。全体のつくりは瓶である。	●外面に指押え痕が明瞭に残る。	胎、砂粒少ない 燒、普通色、茶色 他、
Y135 118 F101 P -	第3地点 住14	高杯	口. 体. 底. 高.	●高杯の脚部としたが小破片のため全形を知りえない。 ●縁部は丸くおさめ緩やかに上方にのびる。	●全面剥離しているために調整痕不明。	胎、1~2mm大の砂粒含む 燒、良好色、黄茶色 他、
Y136 156 F101 P102	第3地点 住14	器台	口. 4.9 体. 6.6 底. 6.4	●筒形の器台であるが、下端部はわずかに開く。 ●中央部は折れない。	●外面に全面に指押え痕が残る。 この後にナデ調整か?	胎、小砂粒含む 燒、普通色、外：褐色 内：茶褐色 他、
Y137 127 F101 P -	第3地点 住14	器台	口. 10.4 体. 12.2 底. 10.6	●下端部よりハリ形にのび、上端部で突出し、小さく外反する。	●上端の粗部内面の縫はにぶい。 ●下端内面に指押え痕が見られる。 ●外面に剥離のために調整痕不明。	胎、小砂粒多い 燒、普通色、茶色 他、

第15号住居跡

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y138 121 F109 P -	第3地点 住15	盃	口、 体、 底、 高、	●広口盤の口縁部で、直線的に のびた兩側端に幅広の水平な 口縁部をつける。 ●口縁部上面はやや凹凸があり 両端は斬削方形に近い。	●全周側面はげしいか、内面に複 数ナゲ痕が見られる。	胎、小砂粒多い 燒、良好 色、外：茶色 内：茶褐色 他、
Y139 165 F109 P -	第3地点 住15	盃	口、 体、30.2 底、 高、	●やや大きめの盃の底上半部破 片、 ●底部はよくしまり、直線的に 外反して口縁部へ続く。	●脚部は横干子、胴上半部はナゲ 調整で、全体が丁寧な調査である。	胎、砂粒少なく善 焼、良好 色、淡黃茶色 他、
Y140 166 F109 P -	第3地点 住15	盃	口、 体、 底、 高、	●直立する胴上半部に水平な口 縁部をつけ丁字形とする。 ●内・外端への突出はあまり強 くない。 ●口縁部下に2条の突起がつく。	●2条の突起は上が断面三角形で 下が断面台形をなす。 ●内外端とも複数ナゲ調整。 ●粘土の接合がよく観察できる。	胎、砂粒少ない 燒、良好 色、明茶色 他、
Y141 114 F109 P -	第3地点 住15	盃	口、 体、 底、 高、	●杯の脚部のように板やかに 開くが、内面にわずかに網目 があることから器皿とした。 (高杯の可能性もある。)	●全周側面が進んでいるが、外面 にわずかにハケ目痕が見られる。	胎、砂粒少ない 燒、普通 色、茶褐色 他、
Y142 113 F109 P -	第3地点 住15	盃	口、16.0 体、 底、 高、	●U字形に外反する口縁部で縁 部は肥厚し丸くおさめている。 ●底曲面部内面は接着はない。	●口縁部内面は横ハケ目をナゲ消 す。外面は複数ナゲ調整。 ●脚部外表面は複数の横ハケ目をナ ゲ消す。内面はナゲ調整。	胎、1mm大の砂粒多い 燒、普通 色、茶褐色 他、

128 出土土器観察表

第3章 おわりに

中尾遺跡の位置する丘陵は、3年度にわたる調査によって丘陵全域を発掘したことになりますが、これは管理広場建設工事に先立つ緊急調査であって、当然のことと遺跡は完全に削平され消滅してしまい、現在はわずかに数本の椎の木を残しているにすぎません。これまで発掘調査の結果について事実報告をしてきましたが、さらに2、3の補足をするとともに、問題点などをまとめておきます。

住居跡 検出した竪穴住居跡は15軒を数えます。これらのうち第4、10、15号住居跡については、その平面形、主柱穴の位置、出土遺物など住居跡として認定できるか細かな検討が必要なものもありますが、これを中尾遺跡の丘陵における竪穴住居跡の総数と考えておきたいと思います。すでに『久保園遺跡』の報告書において述べているように、席田遺跡群において住居跡が発掘確認されているのは大谷遺跡、久保園遺跡、中尾遺跡、北ノ浦遺跡、赤穂ノ浦遺跡の5か所で住居跡総数は34軒です。これらの遺跡は平野部に突出する小丘陵の谷奥に近い所、

あるいは丘陵の尾根上に位置しています。一方、同時期の墓地は谷の開口部に面した丘陵先端付近に豪棺墓の共同墓地として営まれており、このためか住居跡の占有する面積はごく限られたものとなっています。また庶田遺跡群における丘陵は、平野部への突出が弱くすぐに山間部となり大規模な集落を形成する面的な拡張性を許していません。もちろんすべての丘陵を発掘しているわけではありませんが、墓地との関係、あるいは地形的な制約が庶田遺跡群における集落の形成に大きな影響を与えたであろうことは容易に推測されます。このような意味で、中尾遺跡においては一つの丘陵の全域を掘り住居跡の総数が把握できたこと、さらに傾斜面利用における住居跡の外部施設、あるいは造成工事などが明らかとなり、先の推測を証明検討できる貴重な遺跡ということができるでしょう。

中尾遺跡は調査作業上から地形的に3地点に分けましたが、偶然にも住居跡の分布はこの3地点に集中しています。私達が調査途中、住居跡存在の可能性が最も強いと考え期待していた丘陵南西側の緩傾斜面には1軒も見られませんでした。中尾遺跡の住居跡は、私達の現代の感覚では適していないと考える急斜面や丘陵括れ部の狭い所につくられています。

第1地点は丘陵の括れ部に当り、4軒の住居跡を検出しました。うち第1～3号住居跡は重複切り合っており、第1号住居跡は古墳時代5世紀の土器が出上した第1号土坑によって壁の一部が切られていることから時期の下限が抑えられます。北壁は段に接しており、この段には床面より1段高い位置に狭い平坦面がつくられ小型丸底壺が2個体出土しました。この平坦面を第1号住居跡の祭壇的な施設とすれば、北壁は約1.5mを越す高さとなり、あるいは上部にもう1軒別の住居跡が重なっていたことも考えられます。第4号住居跡を住居跡とするには、疑問がありますが第1地点では4軒のみで北、南側には拡張していません。第2、3号住居跡が弥生時代中期後半ごろと考えられることから、第1号土坑の時期までは長い時間があるものの断続的に4軒の住居跡がつくられたにすぎません。これには丘陵の括れ部という地形的な制約と第1号豪棺墓が東に隣接する堤ノ上豪棺墓遺跡の西端を示していると思われることから墓域の拡大とも関係していると考えられます。

第2地点では第5～12号住居跡の8軒を検出しました。これらの時期は第11、12号住居跡が弥生時代中期中ごろから後半、第5、6号住居跡が古墳時代5世紀ごろ、第8号住居跡が古墳時代6世紀ごろと考えられます。第12号住居跡を除くすべてが重複切り合っており、また発掘区の南、西側は崖となっているために完全に姿をとどめているものはありません。第5、6号住居跡は壁を共有しているわけではないが同一家系による建て替えと思われます。第7～11号住居跡は弥生時代から古墳時代までの5軒の住居跡が重なっています。出土遺物が少ないために各住居跡の時期は決定できませんが、弥生時代中期の第11号住居跡から須恵器を出土した第8号住居跡までにはあまりにも長期間で、ある時期に断絶していることが考えられるものの、

その地点に固執している観さえします。第12号住居跡は中尾遺跡では最も古い時期の住居跡で、平面形は不整円形をしています。この住居跡のある発掘区西寄りでは地山面が急斜面となっているために、整地して貼床状の水平な床面をつくり出しており、第2号遺物包含地はこの下部に入りこんでいます。第1、2号遺物包含地より出土する遺物は弥生時代中期前半ごろが主であることから、第12号住居跡がつくられた時期が決定できるばかりではなく、第2地点の谷斜面側については第12号住居跡以外の部分においても同じような整地造成工事がなされた可能性があります。それは精円形プランの約半分しか残っていない第11号住居跡や、崖側に逆に進出している第7号住居跡の位置から、第2地点は谷側にさらに広かったことが推測されるものの、谷斜面側については整地などによって平坦面を確保する必要性があったことは当然予想されます。しかしその整地作業にも第1地点と同じように面積的に限界があり、その結果が5軒の重複切り合いになったものと思われます。また別の原因として撫立柱建物跡が1棟存在することから、東西に細長い第2地点において利用目的に応じてある種の制約があったことも見逃せません。いま掘立柱建物跡の時期については断定できる出土遺物がありませんが、第12号住居跡→溝状遺構→撫立柱建物跡の順にたどれることから、ここでは古墳時代に属するものとしました。第5、6号住居跡はあまりにも接近しており、第7～10号住居跡の時期に絞られてきます。また撫立柱建物跡1棟が何軒の住居跡に対応するのか明らかにできませんが、第1、3地点の住居跡もその対象とすべきです。したがって第2地点では弥生時代に第12、11号住居跡の順でつくられ、やや時間を置いて古墳時代に撫立柱建物跡と住居跡が現われたことになり、同時期に2軒以上の住居跡が営まれていたとは考えられません。

第3地点では3軒の住居跡を検出しました。第14、15号住居跡の山側は、斜面を大規模に切りこみ造成工事をし、2軒分の面積を確保するとともに排水溝や柵で囲み雨水や上砂流入の対策を講じています。さらに挿図88の断面図に見られるように、第15号住居跡の床の大半は崖上にあり、山側の土を大量に運び整地したものと思われます。この造成整地は第14、15号住居跡が切り合っていることから併存していた可能性はありませんが、当初から2軒分を想定して作業が行なわれています。第13、14号住居跡は弥生時代後期の時期で、第14号住居跡は中尾遺跡では最も高い位置にあり、整った平面形をなしベッド状遺構を持つなど他住居跡に比べ際立っています。同じ時期に宝満尾遺跡の青銅鏡や大谷遺跡の青銅製鋤先などがあり、席田遺跡群において成長安定期がこの時期にあったことが推測されます。また立岩產と言われる輝緑凝灰岩製の穂摘具の完成品と未製品が出土したこと、倉庫を持つ住居跡であることから、これまで平野部から離れて特異な立地をしていた席田遺跡群の住居跡も水稻耕作を生活基盤にしていたことが想定できました。しかし平野部における集落とは住居跡の構成からも大きな隔差があり、この差が単に耕地面積の大小に求められるのかさらに検討が必要となっていました。

福岡市博多区

席田遺跡群

中尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集

©1984年3月31日発行

編集 福岡市教育委員会

発行 福岡市中央区天神一丁目7-23

電話（福岡）711-4667

印刷 (有)松古堂印刷

福岡市西区大字周船寺407

電話（福岡）806-1661

席田遺跡群

中尾遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集

1984

福岡市教育委員会